

# 復讐の舞姫

梨善

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

モンスターの生態は謎に包まれているものも多く、人々はその調査を進め、共存をしていた。

時には力を借り、時には狩猟する。

そして狩猟を主にする者をハンターと呼ぶ。

あるモンスターを探し、新大陸へ赴いたハンター、ミレイナ。

この地で彼女は何を見る。

# 目次

新たな大陸	1
調査拠点アステラ	15
蛮顎竜の狩猟	43
弟子と飛雷竜	62
白銀のヴァルキリー	89
熔山龍、捕獲作戦（前編）	105
熔山龍、捕獲作戦（後編）	122
私、頑張ります！	137
ミレイナの過去	163
死の大地	177
赤き狼	194
赤き獣は鮮血と舞う（前編）	205

赤き獣は鮮血と舞う（後編）	220
2つの試練	230
試練の始まり	238
空の王の試練	248
束の間の休息	258
煌めく台地	271



# 新たな大陸

青い空と眩い海がどこまでも続く。

ハンターズギルドから新大陸と呼ばれる地に向かって複数の船団が航海を続けていた。

新大陸への航海は不安定で時期を見定め、船団が派遣され、未知のモンスター、そしてそこでの生態系の調査がギルドより命令されている。

この船団は5回目の派遣。つまり、5期団となる。

「……ん、んん……」

腰まである銀の長髪と並のハンターでは入手が不可能な『キリンXシリーズ』が目につく1人の女性ハンターは甲板で座り込み、うたた寝をしていた。

通常のキリンコルノ、頭にあたる防具はキリンのたてがみを使用したウィッグが付いているのだが、オーダーメイドで作ってあるそれには付いていない。代わりにたてがみを素材としたミサンガが付いているのだ。

ハンターの名はミレイナ。

このハンターは5期団として、新大陸の地へ向かっていた。

「何事よ……」

うたた寝から起きたミレイナは船団の慌ただしさを見て、顔をしかめる。

「そろそろ目的地に着くみたいニャ」

赤を基調とした『レウスXネコシリーズ』を身にまとった黒い毛並みのアイルーがミレイナに今の状況を説明する。

「だからなのね。……ふあ……。起きて損した。ありがとう、クリス」

このアイルーはクリスタル。愛称はクリス。

ミレイナのオトモアイルーだ。

「お目覚めにこれはいかがかニャ？」

三毛色の『レイアXネコシリーズ』を身につけたアイルーが頭に木のジョッキが乗ったお盆を持ってミレイナの元へやってきた。

「うん。頂くわ」

ミレイナはジョッキを受け取り、一気に飲む。

「これ！ビールじゃないじゃないの!?!」

「それはワタシ特性の眠気も一発で覚める、しかも眠りにならないマンドラゴラ配合の元氣ドリンクコニャー！」

三毛のアイルーは得意げに渡したドリンクを説明する。

「そういうこと聞いてるんじゃないの！バカマイラー！」

ミレイナの専属の食事係でオトモでもあるマイラー。

「今から上陸だつて言うのに酔っ払つてたらご主人様の威厳に関わるニヤ」

「そんなのどーだつていいわ。今の立場だつて私は望んでない」

ミレイナはギルドから特別な認定を貰つたハンター。

本来ならばギルド本部周辺で活動し、不測の事態に備えなければならぬ。

その見返りとして自由な狩猟、調査の許可が降りている。

とても派遣など選ばれるハンターではない。

だが、このミレイナは自らこの派遣団へ志願している。

「ようやくギルドのうるさい連中から逃げれたんだから少しは我儘も許しなさいよ」

「そうは言つてもだニヤ・・・」

文句を言いながらも『特性元気ドリンク』を飲み干す。

するとピクピク、とクリスタルとマイラのヒゲが動く。

「ご主人様！」

「ご主人！」

2匹が揃つて声をあげる。

「どうしたの、2人とも」

ミレイナは異変に気づく。

つい今まで明るかった空が、暗雲に覆われている。

次第に海も荒れ始めていた。

「なんなの、これ……。クリス！マイラ来なさい！」

「はいニヤー！」

1人と2匹は船内の自室に駆け込み、愛刀を掴む。

『召雷剣【麒麟帝】』

蒼い刀身が7つの棘を作っており、そのフォルムは雷を連想させる。武器カテゴリーは大剣。

その愛刀を担ぎ、再び甲板に飛び出す。

「船長！これは！」

ミレイナは出て、すぐそこにいたこの船の船長に声をかける。

「ああ、あんたか！あれを見ろ！」

船長が指を指した方を見る。

「これって……」

海面に浮き出していたのは火山。

紅く、猛々しく燃えている。



しかもそれは動いている。

「あれはゾラ・マグダラオス。新大陸に移り住んだハンターたちが追いかける古龍。古龍渡りの鍵だ」

近年各地で古龍種に分類されるモンスターたちの活動が活発化している。

元々古龍の生態自体が謎に包まれている。

しかし、ギルドの調査の結果、古龍はこの新大陸のどこかへ向かう傾向があると判明した。

その行動を古龍渡りと命名し、新大陸に調査団を設立したことがこの派遣の始まりだ。

以前は100年に1度程度と言われていたが、最近では10年に1度の周期でこの現象が起きている。

この現象の特定こそが調査団の真の目的なのだ。

「い、いかん！」

船長は悲痛の声をあげる。

立ち上がったゾラ・マグダラオスの背に1つの船が引つかかり、横転しようとしていた。

「クリス！マイラー！行くわよ！」

ミレイナは指笛を吹く。

すると船のマストに止まっていた一匹の翼竜が彼女の頭上まで飛ぶ。

ミレイナはその場でジャンプし、左腕に装着されたスリンガーアンカーを射出し、翼竜の足に絡め、ぶら下がる。

ぶら下がったミレイナの両足にクリスタルとマイラがしがみつく。

「・・・貴方たち、少し太った?」

「し、失礼ニヤー!」

マイラが不満の声をあげる。

「おい!どこに行くってんだ!?!」

「あの船に!すぐに戻るわ!・・・誰かが死ぬのなんて見たくないもの・・・」

荒れる海の上空を翼竜にぶら下がり、飛ぶ。

「これ。訓練の時も思ったけど、割と楽しいわね」

ミレイナはポツリ、と言葉を漏らす。

新大陸で生きるハンターは皆、左腕にスリンガーと呼ばれる小さな投擲機をつけている。

アンカーの射出、専用の弾、石ころ、きのみなどを弾として射出することができる。

「それ、ボクも欲しいニヤ」

「クリスの腕にはつけられないわ。．．．船の上には降りれそうにないわね」

ミレイナは周囲を見渡すと、ゾラ・マグダラオスの背に打ち上げられ、倒れている人を見つけた。

「あそこね。ほら、着くわよ」

アンカーを巻き取り、ミレイナの体は宙に浮く。

そのタイミングでオトモ2匹もミレイナから飛ぶ。

大勢を整え、落下の衝撃を前転で殺し、ゾラ・マグダラオスと呼ばれる古龍の背中に着地する。

「キミ、大丈夫？」

『レザーシリーズ』に身を包んだ若い男性ハンターがうつ伏せで倒れている。

返事も無い。

「どうやら、気を失っているようだ。

それに武器も持っていない。

急な出来事で準備ができていなかったんだろう。

「よっ……と。あちゃー。頭から血が出てる」

ミレイナはポーチから『薬草』を取り出し、傷口に当て、布で固定すると男性ハンターを担ぎ、他に怪我人がいないか周囲を見渡す。

目に付く人は皆、ゾラ・マグダラオスの背中を登り、各々で翼竜に捕まり、脱出している。

「大丈夫そうね。マイラ、『回復笛』をお願い」

「了解ニャー！」

マイラは腰のポーチから緑色の笛を取り出し、演奏を始める。

「あ、あれ？」

マイラがいくら息を吐き出しても音色が流れない。

「何してるの？」

「お、音が出ないのニャ……」

「……もしかして新大陸特有の影響？」

「分からないニャ……」

肩を落とすマイラ。

「原因はまた考えるところとして、今はとにかく急いで離脱するわ」

ミレイナは再び指笛を吹き、翼竜を呼ぶ。

頭の上に来たことを確認し、スリンガーアンカーで捕まる。

ミレイナの足が宙に浮き、翼竜はゾラ・マグダラオスを中心に回るように飛ぶ。

「それにしても大きい。ジエン・モーランより大きいんじゃない？」

率直な感想を漏らすミレイナ。

「1つの山が動いているようなものだ。」

その巨大さは圧巻だ。

「あつーこらー！どこ行くの！」

捕まっていた翼竜が突如暴れだし、船とは違う方向へ飛び始めた。

「ご主人！なんとかするニャー！」

足にしがみついているクリスタルが叫ぶ。

「何とかするって言われても！」

「怖いニャー！怖いニャー！」

フラフラと飛行を続ける翼竜に振り落とされないように必死に捕まる。

同時に担いでいる男性ハンターも落とさないうようにする。

「ご主人様！あれを見るニヤー！」

同様に足に捕まっているマイラが叫ぶ。

「あれってどれ！」

「前！前ニヤー！」

「前!?!」

前を見るとそこには雄大な大地が見えた。

その地を覆い尽くすのは木森。

そして一際目を引く巨大樹。

「あれが……。新大陸……」

キイエエエエエエ!!

捕まっていた翼竜がさらに暴れ、その反動でアンカーが外れる。

「あっ」

つまり、遙か上空からの自由落下の始まりだ。

「ご、ご主人!!」

「ご、ごめえええええええん!!」

落ちていく中でミレイナは何かないかと必死に考える。

ミレイナたちと地面の距離はどんどん縮まっていく。

そして、視界の端にキラリ、と光る何かを見つけた。

「お願い！届いて！」

ミレイナは再び、アンカーを射出する。

カキン、とアンカーが何かを捉える。

「よっしっ！」

そのまま振子のように弧を描きながら、勢いを次第に弱めていく。

動きが完全に消えると、さらにアンカーを伸ばし、ゆっくりと地に足をつける。

「……んはあーよかったー！死んだかと思ったわ！」

声を上げ、即座に周囲警戒を始めるミレイナ。

男性ハンターを近くの木に座らせ、一息つく。

どうやら先程見た森の海岸沿いに降りたようだ。

「流石ご主人ニヤ……。よく生きてるニヤ、ボクたち……」

クリスタルが防具の兜を脱ぎながら座り込む。

「コラ。まだごが安全とは決まってるよ。……まあ、あれのお陰ね」

ミレイナが上を指さす。

それを追うようにクリスタルとマイラも上を見る。

「『楔虫』ニヤ？」

そこにいたのは木にしがみついている、黄色く光る大きな虫だ。

「そ。この新大陸だけに生息する変わった虫ね。どうやらフツクのような性質を持っているらしいの。あらかじめ新大陸の生物を調べておいてよかったわ」

ミレイナは背中にかけている大剣を置き、その場に腰を下ろす。

「ここは大丈夫そうね。マイラ、おいで」

マイラはトコトコとミレイナに寄って行き、彼女の膝の上に乗る。

「はあく。マイラは温かいわね」

ミレイナはマイラをぎゅーつ、と抱きしめる。

「ご主人様、少し苦しいニヤ」

「気にしないの」

しばらくマイラを抱きしめ、リラックスしたミレイナは少し周囲を探索することにした。

「じゃあ、私は少しこの辺りを見てくるわ。クリスとマイラはその子を見てて」

「了解ニヤー！」

敬礼した後、手を振る2匹。

ミレイナも軽く手を振り、『召雷剣【麒麟帝】』を担ぎ、歩いていく。



少し歩くと木が生い茂り、陽の光が届きにくい広地に出た。

付近にはアプノトスと呼称される草食竜の群れがいた。

「少しお腹も減ってきたし．．．。うん。そうしよう」

ミレイナはアプノトスに近づく。

特に身を隠している訳ではなく、普通に歩み寄っても逃げる素振りがない。

「どうやら、この地に住むアプノトスはハンターに対する警戒心が薄いのかもしれない。」

「ごめんね。弱肉強食だから仕方ないの」

ミレイナは愛刀を掴み、抜刀からそのまま振り下ろす。

刀身はアプノトスの身を削り、武器から発生した雷はその場で青白い閃光を散らし、一瞬でアプノトスの全身へ駆け巡る。

そして、アプノトスの活動は終わりを迎えた。

「うん。では、早速」

腰の剥ぎ取り用の短刀で生肉を剥ぎ取る。

「さて、もう少し見て回らないと」

ミレイナは死んだアプノトスに手を合わせ、その場から離れた。

ミレイナが離れた直後、アプノトスの死体に群がる影が4つ。  
不穏な空気に気づくことなく、ミレイナは進む。

## 調査拠点アステラ

「さて。結構採取できたし、マイラたちの元に帰らないと」

あれからまたしばらく探索を続けていたミレイナ。

小一時間ほど時間は過ぎ、すっかり新大陸という未知の土地を満喫している。

『回復薬』などといった必要最低限の物しか入っていなかった彼女のポーチは既に満杯だ。

「頼むわね」

ミレイナはポーチからマイラの毛を一房取り出す。

先程マイラを抱きしめた時に抜け毛を少し取っていたのだ。

その毛を防具の腰についている籠に入れる。

すると籠は緑色に眩しく発光した。

『導虫』

新大陸で活動するハンターの必需品の一つ。

特定の匂い、物質に反応する光る虫で、直前に記憶した匂いへ飛んでいく習性を持つ。

『導虫』は光の帯となって道を示す。

ミレイナは光を追って走りだす。

走ること数分。

マイラたちがいる場所に到着した。

「おまたせ」

「随分長かったニヤ」

クリスタルがマイラを出迎える。

「聞いてよクリス！ここすごいわ！一度取った木の実や植物が数分後には生えてるのよ！」

「ご主人の取り忘れだと思っニヤ」

「ホントよ！」

嬉々と話すミレイナだが、クリスタルは素っ気なく返答した。

「つて、なんか荒れてない？」

地面をよく見ると土が抉れたり、付近の草が萎られている。

「あー。あいつらのせいニヤ」

クリスタルが指さした方を見ると黄色い鳥竜種と思われる小型モンスターが2頭倒れていた。

「こいつらか。私の跡をしばらく追ってたわよ。途中からいなくなってたけどね。名前前は確か……。じゃ、じゃ……。」

「ジャグラスです」

「そう！ジャグラス！って貴方！」

ジャグラスと教えてくれた声はミレイナが助けた男性ハンターだ。

「目が覚めたのね」

「貴女が助けてくれたんですか……。ん？その装備……。」

男はミレイナの装備をジロジロ見る。

『キリンシリーズ』に大剣……。まさかミレイナ！あのミレイナ!?!」

「え、ええ……。そうよ」

「驚いた！5期団に居るといふ噂は聞いていたけど、まさか本当だったとは！『白銀のヴァルキリー』をこの目で見れるとは運がいい！」

1人で盛り上がる男にミレイナは少し引き気味だ。

「あ、あはは……それは良かったわ……。貴方、名前は？」

「おっと、すみません。俺はフレッド。見ての通り、新米です。今の状況はオトモ2人から聞いてます」

「フレッドくんね、よろしく。私はミレイナ、って知ってるか。敬語は使わなくていいわよ」

ミレイナの目からしても5期団は新米ハンターや年齢も若いハンターが多い。

彼もその1人のようだ。

「じゃあ、正直『白銀のヴァルキリー』がこんなに若いとは思ってもいなかったよ。俺と歳はあまり変わらないようだがで20歳くらいか？」

「ご生憎、私はそんなに若くないわよ。27歳。もう少しで8になるわ。このハンターっていう仕事も10年以上続けてる」

「嘘……、だろ？」

「本当よ」

フレッドは信じられない、と言った顔で目を丸くする。

「最近鏡を見てはシワが増えたって嘆いてるニヤ」

「マイラー！余計なこと言わない！」

笑いながらからかうマイラー。

反対にクリスタルは興味が無さそうだ。

「ところでフレッドくん。怪我は大丈夫？ 多分、そこに倒れているジャグラスには何もやられてないみたいだけど」

「あ、ああ。そのオトモ2人がやってくれたよ。あまりの強さにジャグラスが逃げたよ」

「そうなのね。マイラとクリスもお疲れ様」

ミレイナは2人を褒めると、その2人はふんぞり返ってドヤ顔だ。

「さて。お腹も減ったし、何か食べましょう。『生肉』や美味しそうな植物とかいろいろ取ってきたわ」

ミレイナは地面に布を広げ、その上に戦利品を広げる。

中には彼女自身が必要な道具も混じっていた。

「おお・・・。これはまた・・・」

予想よりも多かったのか、フレッドは声を漏らす。

「マイラ、調理をお願いしていい？」

「任せるニャー！ 見たところ香辛料になりそうなものもあるし、今日はアプトスの『ジューシーこんがり肉』にするニャー」

マイラはポーチから『肉焼きセット』のような物を取り出し、ドン！と大きな音をた

て、地面に設置する。

そしてそれは左右に広がり、簡易キッチンになった。

「な、なんだこれ!？」

「あー、そうよね。こんなもの見たことないわよね」

驚くフレッドをおかしそうに笑うミレイナ。

「これね、前に拠点にしてた村の工房のアイルーがマイラのために作ったのよ。．．．今ではないと困るけど、これ作る時は色んなモンスターを頼まれたわ」

「そ、そうなのか．．．」

「クリスー」

ミレイナはあぐらをかいて座るとクリスタルを呼ぶ。

「なんニヤ?」

「おいで」

「嫌ニヤ」

「なんでよお!」

手を広げ、クリスタルを呼んだミレイナだが、ふいつ、と顔を背けた。

「どうせマイラみたいにボクも潰されるのニヤ」

「そんなことしないわよ!ただちよーつと抱きしめてリラックスするだけじゃない!」



「それが嫌なのニャー！」

ハンターとそのオトモが言い争っている姿を見てフレッドは困惑する。

普通、オトモアイルーというものは主人のハンターに従順ではないのか？と。

「いいから来なさい！」

「嫌だニャー！」

「ああもう！」

いつの間にかドタバタと追いかけてつこを始めた2人。

フレッドはあまりの緊張感の無さのため息をつく。

（最年少でギルドお墨付きになった歴戦のハンターにはあまり見えないな……。なんと  
いうか、覇気とか雰囲気とか……）

フレッドが聞いていた話の『白銀のヴァルキリー』はオーダーメイドの『キリンシリ  
ズ』に身を包み、あらゆる狩猟対象を愛用している大剣で叩き切る。その姿は阿修羅の  
生まれ変わりと聞いていた。

『ヴァルキリー』という通り名も共に狩りを行ったハンターが皮肉を込めて付けたとか。

しかし、今フレッドの目の前にいるミレイナはどうだ。

あの体型で大剣を振る姿など想像もつかない。

現にミレイナは自分のオトモとじゃれあっている。

「このどこが阿修羅なのだろう、とフレッドは首を捻る。

「捕まえた!」

「ギニャアアアアアア!! 離すニャ! 離すんだニャ!」

ミレイナはようやくクリスタルを捕まえたようだ。

「うるさい! 叫ばないの! いい、クリス」

ミレイナはクリスタルの耳元に小さな声で囁く。

「さつきジャグラスは逃げたと言ったわね?」

「そうニャ。4頭いたうち、2頭が逃げたニャ」

「そうなのね。マイラが料理を作り終わったら動くわよ」

「どうしてニャ?」

「きつとドスと呼ばれるモンスターもいるはずよ。私とクリス、それにマイラがいたとしても武器を持ってないフレッドくんを守りきれ自信が無いわ」

「なるほどニャ。マイラにはボクから言っておくニャ」

「ありがとう、クリス」

ミレイナはクリスタルを離し、空を見上げる。

日はまだ出ているが、少しずつ傾き始めていた。

「できたニャ!」

マイラはこんがり焼けた肉を満足そうに見つめる。  
ミレイナと簡易キッチンはそのそこ離れているが、食欲を誘う匂いが空腹を刺激する。

「さつすがマイラー！いただきまーす！」

ミレイナはでき上がった肉を1つ掴み、噛み付く。

噛み付いた肉からは透明な肉汁が溢れ出す。

「あつっ!？」

何とか一口飲み込むも、肉汁は口を伝い、胸元へ垂れる。

「最悪……。胸に垂れた……。マイラー、拭くものある?」

「ご主人様は相変わらずせっかちニヤ」

マイラは小言を言いながら布巾をミレイナに渡す。

「ごめんねー。フレッドくんも食べましょう?」

「あ、ああ……。いただきます……。」

フレッドも肉を受け取り、一口かじる。

「美味しい……。!こんなに美味しい肉、食ったことない……。」

「お口に合ってよかったニヤ」

「マイラの料理は1級品よ。さて、みんな肉は持ったわね。片付けて食べながら移動し

ましよう」

ミレイナは立ち上がってみんなを促す。

「どうして?」

「日が暮れる前に本来、無事にたどり着く予定の拠点に行きましょう。夜は視界も悪くて危ないから」

「場所は?」

「目星は付いてるわ」

「分かった。貴女がそう言うなら」

フレッドも立ち上がる。

オトモ2人は協力してあつという間に片付けを終わらせた。

「こうしてお肉食べながら森を歩くってピクニックみたいね」

『『こんがり肉』を食べながら呑気に呟くミレイナ。』

「そんなこと言ってる場合じゃないニャ。知らない土地の知らないモンスターが沢山いるから油断はダメニャ」

「分かってるわよ、クリス。全く似てるんだから・・・」

クリスに注意され、ため息をつくミレイナ。

「・・・こんなに美味しいお肉食べてるのにビールがないなんて・・・」

「またお酒……。少し控えた方がいいニヤ」

「ワタシもクリスに同感ニヤ」

「マイラもー?」

いつものような話をしながら歩みを進めていく3人。

そんな3人の少し後ろをフレッドは歩く。

「ミレイナさん」

「なーにフレッドくん」

「拠点の位置なんだが……。 」

「多分、あれ」

ミレイナは上を指さす。

「船?」

森の奥に見えるのは巨大な船。

遠目だからはつきりとは見えないが、船からは何かが出ている。

「とりあえずあそこへ向かいましょう」

ミレイナを先頭に4人はまた進み始めた。

しばらく進むと開けた場所に出た。

アプトスの群れが水を飲んでいた。

そして、そこには。

「待って。静かに。身を屈めて」

ミレイナは手でフレッドたちを止め、岩に隠れる。

「あれ、見て」

顔だけ覗かせ、行き先にいるものを見据える。

「あれが、ドスジャグラスね」

黄色い巨体。

発達した鬣と腹。

大きすぎる腹は地面に引きずり、ゆっくりと歩みを進めている。

そして、その付近にはジャグラスも5頭付き添っている。

「このまま気づかれないようにすり抜けましょう」

「ああ・・・」

ミレイナたちは身を低くし、壁を沿うように進む。

ドスジャググラスは水を飲んでいるアプノトスにゆっくり近づく。アプノトスも異変に気づいたのだろう。

ドスジャググラスを視界に入れると同時に鳴き声をあげ、その場から逃げ出した。ドスジャググラスも目の前の獲物を逃がすまい、と駆け出す。

「ラツキーね。捕食中ならやり過ぎせる」

ミレイナの言葉に3人は頷き、速度を少しずつ上げる。

しかし……。

「嘘……」

ミレイナは目の前の光景に息を呑む。

ドスジャググラスはアプノトスに噛みつき、動きを止める。

そして、アプノトスを頭から丸呑みにした。

「デタラメしてんじゃないわよ……」

ドスジャググラスはアプノトスの2回りほど大きい。とはいえ、丸呑みにしたアプノトスも大型だ。

それをドスジャググラスはあつという間に丸呑みにした見せた。

そのドスジャググラスの腹部は膨れ上がり、捕食前と比較すると2倍程の大きさになっ

ている。

「丸呑みとは……」

フレッドも今の光景に驚きを隠せない。

「ご主人様！急ぐニヤ！」

マイラに呼ばれ、呆気に取られていたミレイナはゆつくりとドスジャグラスから距離をとる。

もう少しでこの場所を抜けられると思ったことが悪かったのか。

それとも、捕食行為に目を惹かれていたのがいけないのか。

ミレイナはドスジャグラスと目が合ってしまった。

「……ごめんね、クリス、マイラ。目、合っちゃった」

ドスジャグラスはゆつくりミレイナとの距離を詰める。

「いい、みんな。ゆつくりよ。背を向けずに後ずさりなさい」

そう言いながらミレイナは大剣に手をかけながら、立ち止まる。

「ミレイナさん、貴女は？」

フレッドが今のミレイナの行動に疑問を持ち、話しかける。

「なるべくこいつの足を止めるわ。頃合いを見て追いかけるから安心して」

ドスジャグラスとミレイナの距離が縮まり、仕掛けられる間合いに入る。



その距離、約3 m。

しかし、ドスジャグラスは敵対する意思がないらしく、威嚇の声をあげる様子もない。

「・・・あ、あれ？」

意外な行動にミレイナはキョトン、とする。

後ろにいるフレッドやマイラたちにも興味が無さそうだ。

「クリス、マイラ、フレッドくん！走って！」

拠点と思われる船の真下も近づいてきた。

目の前には入口と思われる関所が見える。

一か八か、ドスジャグラスに敵意を持たれないことに賭けて走る。

ミレイナの声で3人も走り出した。

茂みを抜け、海岸沿いに出る。

ドスジャグラスはミレイナたちには興味を示さない。

「おい！こつちだ！」

前方に大剣を担いだ男性ハンターが手を大きく振り、こつちだ！と誘導する。

木で作られた関所を転がるように4人は通る。

「フーン！」

ハンターはレバーを力強く引くと関所の門は激しい音と共に降りた。

門が降りる瞬間、ミレイナは別の大型モンスターを見た。  
赤い皮膚に青い毛皮。

二足歩行の恐竜のようなモンスターを。

(そんなこと、今はどうでもいいか……)

ミレイナは座り込み、息を整える。

「大丈夫か、お前たち」

「え、ええ……。助かったわ」

ハンターはしゃがんで手を差し出す。

ミレイナはその手を取り、立ち上がる。

「お前たちが昨日行方不明になった5期団で間違いないな？」

「多分ね。私たちの以外にもいなければ」

「それは問題ないよ。5期団の名簿は確認済みだ。君たち2人で最後だ」

フレッドも何とか立ち上がる。

「着いてきてくれ。案内しよう」

「ほ、本当に拠点があるニヤ？」

「ああ。あるぞ」

マイラの質問に笑顔で答えるハンター。

オトモ2人もそれを聞き、元気に立ち上がる。

「よし、じゃあ行こうか」

「(い)は・・・」

海の上に建築された街は複数の階層に分かれていた。

その頂上には巨大な船。

圧倒的な規模に驚きを隠せない4人。

案内してくれたハンターはミレイナたちを見据える。

「ようこそ。新大陸の活動調査拠点、『アステラ』へ」

「拠点というよりは街ね。まあ、ここで生活しないといけないから当然か」

ミレイナの眩きにハンターは頷く。

「ああ。その通りだ。こここの指揮を執る総司令の元に案内する」

再びミレイナたちは彼の後ろをついて行く。

「じいちゃん。連れてきたよ」

ミレイナたちが案内されたのは会議に使われる大きな机が置かれたスペースだ。

そこには白髪頭の初老の男性が立っていた。

「ああ。ご苦労。私はこの『アステラ』を指揮する者だ」

「貴方が総司令ですね。私は」

「ミレイナ。噂は常々聞いている。君の『古龍渡り』調査参加には驚いたが、これはチャンスと受け取る。君の成果に期待する」

「まあ、頑張ります・・・」

少し気だるげに返事をするミレイナ。

「君たちに青き星の導きがあらんことを」

その言葉でミレイナたちは解散となった。

「はー……。ここまで来てあんなこと言われるなんて思ってもなかったわ」

3階の食事エリアでミレイナはビールを飲みながら項垂れる。

「せつかくギルドの目が届かない場所に来たのに……。なんでこうなのよ……。期待してるとか言われたらやるしかないじゃないの……」

テーブルに頭を擦りながら愚痴をたれている。

「ミレイナさん……。飲みすぎ……」

愚痴に付き合わされているのはフレッドだ。

テーブルにはビールジョッキが散乱していた。

「raithたい私はさー、『古龍渡り』の解明のためにここに来たわけひやらいのよー」

アルコールが回ってきたのか、ミレイナの呂律はあまり回っていない。

「じゃあ、何のために？」

「言わない……」

「……。はあ。もう酒は終わりだ。料理長、もう酒は出したらダメだからな！」

「ああ」

フレッドは料理長である隻眼のアイルーに頼む。

「クリスタルとマイラが居れば……」

「あの2人は荷物整理中よー。新しい家、どんな感じなんだろうー」

サイコロミートをフォークでつつきながらミレイナは呑気に呟く。

「この料理はマイラの味に負けてないわね！美味しい！」

「もう、それ言うの何回目？」

「だって美味しいんだもの！」

「もう……。俺はそろそろ行くから。自分のこともやんないといけない。一緒に来たオトモと妹を探さないと」

フレッドは立ち上がると伸びをした。

「妹さん？」

「ああ。双子のね。俺と同じで新米さ」

「コンビでやるの？」

「それは分からん。まあ、お互い頑張ろう」

フレッドはそう言うのと下の階層に降りていった。

「・・・なんか覚めちゃったわ」

ミレイナはジョッキを置き、サイコロミートをたいたらげる。

「下の広場でも見ましよう」

少し千鳥足気味にミレイナは下の階層に降り始めた。

『アステラ』の1階層は主にハンターのための市場となっている。

ミレイナは1軒ずつ回りながら品物を見ていく。

「・・・ん？何か騒がしいわね」

港の方で何やら揉め事が起きているらしい。

「やだやだ。帰りましょう。確か、食事場の下の通路から部屋に行けるんだっけ・・・」

帰り道を思い出しながら歩き始めた。

が。

「お姉様!? やつと見つけました! お姉様あ!!」

馴染みのある声にミレイナの足がピタリ、と止まる。

「ま、まさかね。あつはは! 飲みすぎたかもなあ」

「私! 私ですよ! ミレイナお姉様あ!!」

どうにもミレイナの聞き間違いではないようだ。

「おい! 静かにしないか!」

「離してください!」

恐る恐る振り返ると女性が船員に取り押さえられていた。

「やっぱりあの子か・・・」

ミレイナは頭を抱えながらそこへ向かう。

「いいかしら?」

「ん? ああ、あんたは5期団の」

「ああ・・・! お姉様!」

ミレイナを見た少女は喜ぶ。

彼女の反応にミレイナはため息をつく。

「その子がどうかしたんですか?」

「こいつ、船に密航してたんだよ。とりあえず総司令にどうするか指示を貰おうと思ってる」

「密航などしていません! 私はお姉様の相棒として乗り込んだままです!」

「誰が私の相棒よ! 確かに私のクエスト一覧は貴女が持ってたけど! なぜかね!」

「よく分からんがこいつはアンタに任せていいのか?」

「ええ。行くわよ」

ミレイナは少女の手をとり、人の通りが少ない路地裏のような所へ連れていく。



「シエリー！何をしてるのよ！」

「言つたじゃないですか！私はお姉様についていく、と！ミレイナお姉様あるところにシエリーあります！」

「このシエリーという少女は以前ミレイナの拠点で受付嬢をしており、かなりミレイナを慕っている。」

『お姉様』呼びもその現れだ。

ミレイナの専属ではないはずなのだが、ミレイナへの依頼は全てシエリーが管理していた。

「無茶があるわよ！だいたい向こうの仕事は？」

「頼れる私の後輩が引き継いでくれましたよ！ここではハンター1人に大して1人、専属の受付がつくみたいですし、それにここに来た以上、帰れませんし」

全て計画しての行為だったようだ。

「はあ……。仕方ないわね。総司令の元に行きましょう。私の受付にしてみらうわ」

「さつすがお姉様！」

シエリーはミレイナに勢いよく抱きつく。

「お姉様はやめて！恥ずかしい！」

「お酒くさ……。」

「なら離れなさい！」

シエリーを引きはがすミレイナ。

「ああ！お姉様の温もりが！」

「置いていくわよ！」

「待ってくださーい！」

とにかくミレイナはシエリーを連れ、総司令の元へ再び向かった。

再び総司令の元へ訪れた。

「おや？どうした。．．その子は確かここへ密航してきたと報告を受けているが」

「ええ。送り返すのも難しいので私の受付嬢にしたいのですが」

「ほう」

総司令は興味深そうな目でミレイナを見る。

「以前拠点にしていた村の受付嬢をしていました。私の依頼も彼女を経由していたので

心強いのですが……」

「ふむ。ならばいいだろう。君、名は？」

「シエリーです」

名前を聞くと総司令は頷く。

「では、この4階層の『星の船』で手続きを済ませるといい」

「ありがとうございます！」

そういうとシエリーは走って行ってしまった。

「折角だ。君には1つクエストを依頼したい」

「はぁ……」

「手続きはこちらで済ませる。内容は戻ってきた彼女から詳しく聞くといい」

「分かりました。では、失礼します」

お辞儀をし、ミレイナは離れようとする。

「ああ、後」

「はい？」

「酒は程々にな」

「……善処します」

「おー。ここが私の部屋ね」

ミレイナがやってきたのはマイルームと呼ばれるハンターの自室だ。

ミレイナに支給されたのは特等クラスの最上級の部屋だ。

「すごい豪華ねー」

キングサイズのベッド。

大きなハーブをアイルー2人で演奏している。

オマケに小さな庭と池もある。

「あ、ご主人様おかえりニヤ」

荷物の整理をしていたマイラがミレイナに気づき、出迎える。

「マイラありがとう。クリスもありがとうね」

クリスタルはミレイナの武器防具を整理していた。

「前の部屋みたいに並べておいたニヤ」

「流石クリス！さて、そろそろ騒がしいのが・・・」

「お待たせしましたー!!」

扉を勢いよく開けてシエリーがやって来た。

「もう!置いていくなんて酷いですよ!『星の船』の人たちにここを教えて貰ったんですからね!」

「ニヤ!?シエリーだニヤ!」

「なんでここに居るニヤ!」

「ここに居ることを知らないマイラとクリスタルは驚きの声をあげる。

「クリスタルさんとマイラさん!こんにちは!」

「本当にシエリーニヤ?」

イマイチ信じていないクリスタル。

「もちろんです!お姉様の側にいるのはこのシエリーなのですから!」

「・・・間違いなくシエリーニヤ」

クリスタルもため息をつく。

「それで、手続きは?」

ミレイナは本来の目的が終わったのか確認する。

「はい!ご覧の通り!」

シエリーが見せたのは分厚い本。

「それが？」

「はい！クエストの一覧です！バインダーみたいになって、依頼書を貯めれるようになってますよ。中はまだペラペラです」

シエリーは中を見せるがページは少ない。

「そして、早速依頼ですよ」

「・・・いよいよね」

シエリーが開いたページを見るミレイナ。

その表情は薄く微笑んでいた。

## 蛮顎竜の狩猟

翌朝。

ミレイナは任されたクエストに必要な道具の整理をしていた。

狩猟対象は蛮顎竜アンジャナフ。

『アステラ』近辺の『古代樹の森』に生息する獣竜種。

気性が荒く、高い縄張り意識を持つ、と調査班のレポートにまとめられていた。

その激しい気性から森の暴れん坊とも呼ばれているらしい。

依頼はこのモンスターを狩猟し、調査を進めたいとの事だ。

「ま、このくらいでいいでしょう。後は・・・」

道具の整理、持っていく武器の選別も終わったミレイナ。

しかし、問題が一つ。

それはマイラだ。

ゾラ・マグダラオスの背中でマイラの『回復笛』が機能しなかったことだ。

新大陸の影響なのだろうか。

理由がわからない以上、使うわけにはいかない。

もしかしたら笛以外にもオトモたちの道具は使えなくなっているのかもしれない。

「とにかく、2人には気をつけておかないと」

ミレイナは大剣を背負い、マイルームを出る。

「ご飯も食べたし。よしっと。クリス、マイラ行くわよ」

彼女の呼びかけにオトモ2人は走って、ミレイナの元を集まる。

「それじゃあ、シエリー。行つてきます」

一応コンビになつたシエリーに声をかける。

「ああ……。お姉様！今日もお美しい！その銀の輝きはリオレウス希少種すら霞むほど……。そんな美しさを私は毎日見れるなんて……」

「聞いてないわね。行きましょう」

自分の世界に入り込んでしまったシエリーをおいてルームを後にした。

『アステラ』のハンターは飼い慣らした翼竜に掴まってクエスト地に向かう。



ミレイナもそれにならない、翼竜が止まっている門の下に向かう。  
「やあ」

食事場の前でここまで案内してくれたあのハンターがミレイナに声をかける。

「あら？リーダー。どうかしました？」

彼は総司令の孫で調査班のリーダーをしている。

「アンタに敬語やリーダーと呼ばれるほどの腕はないんだが・・・」

「関係ないですよ。ここでの私はただの新入りなんですから」

「・・・まあいい。ここでの狩りは初めてだろう？キャンプまで案内をしよう」

「助かります」

ミレイナはリーダーの提案を受け、翼竜に掴まり、『古代林の森』へ移動を始めた。

「着いたぞ。ここがベースキャンプだ」

ベースキャンプにはテント、支給品ボックス、そして簡易の食事場があった。

「テントにはアンタの装備品もある。ここに帰って武器の交換、道具の補充もできる」  
「え？どうやって持つてくるんですか？」

「君の相棒、シェリーと言ったか？あの子と翼竜たちに任せているよ。もうしばらくすると到着するはずだ」

そういつた矢先、数体の翼竜がアイテムボックスを吊るして飛んできていた。

その中にはシェリーも翼竜に捕まっている。

「翼竜つて力持ちだね・・・」

「食事場だが、これは料理長が釜戸で温めれば食べれるような物を定期的にここへ輸送している。好きに食べてくれるといい」

「便利なのね」

「そして新大陸は広い。そこで各地店にベースキャンプもある。どこのベースキャンプもここと同じようになっている。困ったら指笛で翼竜を呼んで飛ぶといい」

「ありがとうございます、リーダー」

ミレイナはお礼を言う。

「さて、いよいよ狩りだ。使えるものはなんでも使う。そして生き残る。これが新大陸のハンターの鉄則だ。では、健闘を祈る」

リーダーに激励を貰い、ミレイナたち3人は歩き出した。

歩き始めて数分。

アプノトスの死体があつた。

その死体は腹を食いちぎられている。

「また酷く荒い食べ方ね」

ミレイナが呟くと、腰の導虫が発光し、反応を示す。

後ろに納刀している剥ぎ取りナイフを抜き出し、捕食跡を少し採取すると籠に入る。

すると導虫は籠から飛び出し、この『痕跡』の主の元へと誘導を始めた。

「どうやら当たったみたいね。行くわよ、2人とも」

「はいニャー！」

木のトンネルや木の根のが道となつている独特な地形を進み、人の背丈以上の大きなキノコや背の高い樹木が並んだ場所に案内される。

「視界が悪いニヤ。木も大きいしボクらは見えなくなりそうニヤ」

「そんな訳ないでしょう。しっかり狙われるから安心しなさい」

ミレイナはクリスタルの発言を否定する。

「ほら、いたわよ」

木に隠れ、様子を伺う3人。

目の前の巨軀こそターゲットであるアンジャナフだ。

赤の鱗と青の毛皮、そして強靱な脚で二足歩行をしている。

「仕掛けるわよ。まずは私があのキノコの上から飛びかかって、乗りを狙うわ。2人は自分のタイミングで攻撃を始めて。頼んだわ」

ミレイナはアンジャナフの視界に映らないよう、身を屈め、少しずつ距離を詰める。

アンジャナフは立ち止まり、周囲を見回している。

(チャンスね)

ミレイナはアンジャナフから最も近い位置にある巨大キノコの上に登り、背中の『あかねさす紫微両断剣』に手を添える。

短く息を吐き、手を添えたまま走り、ジャンプする。

空中で抜刀したミレイナは、滞空時間を活かし、大剣の真髄である『溜め』を行う。

「……せえい!!」

落下と溜めの力が込められた一撃はアンジャナフの胴体に直撃する。  
!?

不意の一撃に驚いたアンジャナフはよろける。

その隙をミレイナが見逃すわけはなく、乗りへ移行する。

「クリス！マイラー！いいわよ！」

「任せるニャー！」

「お役に立ってみせるニャー！」

2人も木の影から飛び出し、手にしたオトモ武器で攻撃を仕掛ける。

ミレイナは背中に張り付き、剥ぎ取りナイフで背中を何度も突き刺す。

背中に乗った異物を退かすためにアンジャナフは体を動かし、ミレイナを吹き飛ばそうとする。

すると、アンジャナフはミレイナを乗せたまま壁際まで移動し、身を引き、弓の弦のように体を弧の字にした。

「嘘……」

とつさにミレイナは尻尾に飛び移る。

その瞬間、アンジャナフは壁に体を叩きつけた。

潰されなかったことに安堵したのも束の間。

その尻尾を地面に叩きつけようとする。

「こんの……」

再び背中に飛び乗り、振り落とそうとするのを避ける。

ミレイナもナイフを突き刺し、アンジャンフに抵抗する。

次第にアンジャンフはよろけ、力も弱まる。

「クリス！ マイラ！ 離れて！ 倒れるわよ！」

ミレイナの声で2人は少し距離を置き、様子を見る。

頭に飛び移ったミレイナは『あかねさす紫微両断剣』を抜刀し、そのまま力を溜める。

「フツ……」

その一撃はアンジャンフの顔面に食い込んだ。そのまま豪快に引き抜くと巨体は倒れ、攻撃のチャンスを生み出す。

ミレイナは飛び降り、体勢を立て直すと、素早く距離を詰める。

抜刀縦切り、強・溜め斬りをあえて溜めずにそのまま振り下ろす。

ミレイナは大剣で円を書くように後ろへ下がり、再び溜め始める。

「はあっ!!」

真・溜め斬り。

ギルドの研究で使用できるようになった新たな攻撃手段。

溜め斬りの反動を活かし、縦に1回転しながら最大火力の溜め斬りを叩き込む大剣の新たな切り札。

その一撃はアンジャンフの頭部へ容赦なく直撃し、牙をへし折る。

ミレイナはそのまま横へローリングし、その反動を活かし、体重を乗せたタツクルを頭部に当てる。

そこから強・溜め斬り、そして真・溜め斬りに。

しかし真・溜め斬りのモーションに入った瞬間、アンジャンフは立ち上がる。

「まっずー！」

ミレイナが思ったよりもダウン時間が短かった。

反撃を覚悟し、グツ、と歯を食いしぼる。

が、アンジャンフの鼻がまくれ上がり、鼻骨がむき出しに。そして、背中からは翼のように皮膜が広がる。

ゴガアアアアアアアアアアア!!

強烈な咆哮。

凄まじい音量に3人は耳を塞いで、動きが止まる。

追撃が来るかと思ったが、アンジャンフは後ろに飛び退き、ミレイナを威嚇する。

どうやら怒り状態になったようだ。

「炎・・・？」

ポツリ、と呟くミレイナ。

睨み合っているアンジヤナフの口からは炎が溢れていた。

「あれ、マズいやつだニヤ」

クリスタルがミレイナの元にやってくる。

「分かつてるわ。2人共、無理はしないでね」

少し離れた位置で様子を伺っているマイラも頷く。

「さて、どう戦う・・・」

アンジヤナフは一直線にミレイナへ突進するが、その攻撃を股下を転がり、回避するミレイナ。

小回りを効かせ、すぐさま縦切りをアンジヤナフの尻尾に当て、後ろへローリングする。

武器を納刀し、足元に潜り、素早く縦切りを繰り出すとローリングし、離脱する。

ミレイナが離脱したタイミングでクリスタルとマイラが飛び込み、足元へ攻撃する。

これが3人の得意とする戦法。

一撃が強烈な大剣だが、その分溜めによる隙も大きい。

ミレイナはあえて溜めずに離脱する。



そのタイミングでオトモ2人の攻撃を与え、再びミレイナが攻撃に加わる。

そして、気が来た時に大剣の真髓をお見舞するのだ。

「ナイスタイミング！・・・クリス!!」

アンジャンナフは足元をうろつかれるのを嫌うように、片足を虫を払うように蹴る。

何気ない仕草に見えるものもあの巨軀があつては破壊力は凄まじい。

それは足元に居たクリスタルに容赦なく襲いかかる。

「ギニャ!?!」

クリスタルの小さな体は宙に浮き、小さな弧を描いて地面に倒れる。

「マイラ、こいつの注意を引くわよ!」

「ニャ!」

2人はアンジャンナフの正面に立ち、注意を引く。

しかし、アンジャンナフは2人に興味を示さず、起き上がったばかりのクリスタルを狙

う。

「こんの・・・!!」

最大まで溜めた抜刀溜め切りを当てるも無視されてしまう。

「クリス走りなさい!」

ミレイナの声でクリスタルは走り出す。

それをアンジヤナフは追いかける。

「止まりなさい!」

ミレイナはポーチから『弾』を取り出す。

それをスリンガーに装填し、突き出す。

パシユツ、という音と共に『スリンガー弾』が射出された。

弾はアンジヤナフの真横を通り過ぎ、目の前で激しい光を放った。

ミレイナが撃つたのは『スリンガー閃光玉』。

その眩い閃光でモンスターの視界を一時的に奪うアイテム。

アンジヤナフも例外ではなく、閃光の光に驚き、大きく仰け反るだけでなく、視界も奪われる。

「助かったニヤ!」

「クリスは今のうちに立て直して!私とマイラでまた仕掛けるわ!」

ミレイナはアンジヤナフの正面に立ち、抜刀し、そのまま力を溜める。

ガアアアアアア!!

アンジヤナフは声を上げると、頭を振り、すぐ前方を薙ぎ払う。

「うぐっ!?!」

溜めのモーションに入っていたミレイナは回避できず、吹き飛ばされる。

「……いったあ……」

吹き飛ばされ、地面に倒れたミレイナは吐き捨てるように呟く。

特に気にするような傷もなく、ゆっくり起き上がる。

「ご主人様！」

マイラが叫ぶ。

何を慌てているのだろう、と顔を上げると、アンジャナフの巨体が宙に浮き、ミレイナ目掛け、飛びかかっていた。

「ええ!??!」

とっさに大剣を盾にし、攻撃を防ぐ。

凄まじい衝撃をなんとか耐え、納刀する。

どうやらアンジャナフは視界を奪っても暴れるタイプのモンスターのようだ。

少し距離を離し、念の為に『回復薬』を一つ飲み干す。

アンジャナフは視界に戻ったのだろう。

雄叫びをあげ、顔を降つて、こちらに向き直った。

「また来たニヤー！」

マイラが叫ぶとアンジャナフは再び飛びかかってくる。

それを左に避けると、アンジャナフとの距離はまた開く。

しかし、アンジヤナフはその勢いのまま、顎で地面を抉りながら前進していく。

「……ええ……」

ミレイナは立ち止まり、その光景に声を漏らす。

「顎、折れないのかしら？」

「そんなこと言ってる場合ニヤ!？」

アンジヤナフは立ち止まり、再び咆哮をあげるとその場から去っていった。

「場所を変えるようね。追いましよう。クリスは大丈夫？」

「もうバツチリニヤ」

「よし、追いましよう」

アンジヤナフが移動した箇所は関所が近い海岸。そこで待ち構えていた。背中の皮膜は閉じ、口からの炎もこぼれていない。

怒りは治まったようだ。

アンジャナフはミレイナを見つけると一直線に走り、強靱な顎で噛み砕こうとする。ミレイナは懐に飛び込み、噛みつきを躲す。

「ふっ！」

そのまま抜刀切り。

クリスタルとマイラは左足に攻撃を加える。

ミレイナも左足の方へローリングし、タックルを行う。

そして強・溜め斬りを放つ。

グガアアア!!

その一撃でアンジャナフはよろめく。

しかし、すぐさま再び咆哮をあげ、また怒る。

「・・・っく」

その咆哮で耳を塞ぐ。

アンジャナフはまたしても怒り状態に突入する。

ミレイナたちを見据えたまま数歩後ずさる。

「次は何をする気・・・」

アンジャナフは頭を振り、大きく息を吸う。

周囲の温度も上がっていく。

「まさか、炎ブレス!？」

慌てて飛び退く3人。

そして、アンジヤナフは炎を吐き出す。

火炎放射のように吐き出す炎は地面を燃やし尽くす。

「思ってたのと全然違う!？」

火球のようなブレスと思っていたミレイナは思わず叫ぶ。

しかし、ブレスを放っているアンジヤナフは無防備だ。

その頭に抜刀切り、強・溜め斬り、真・溜め斬りを放つ。

「こいつでどう!!？」

渾身の一撃は容赦なくアンジヤナフを殴り飛ばす。

ボン!という爆発音。

アンジヤナフの口内の炎が爆発し、その巨体は倒れる。

ミレイナは『あかねさす紫微両断剣』を納刀し、再び頭に抜刀溜め切り、強・溜め斬り、真・溜め斬りを全て最大まで溜めて繰り出す。

「これでえ!!！」

真・溜め斬りの最後の一撃。

ミレイナには確かな手応えがあった。

生物の命を奪い、その生涯に終止符を打つその手応えが。

ガ……、グルル……。

短く、弱々しい声を上げて、アンジヤナフは動かなくなった。

「……おしまいっと」

さつ、と『あかねさす紫微両断剣』を納刀し、剥ぎ取りを始める。

「やっぱり初めて見るモンスターは手強いニヤ」

クリスタルが眩く。

「そうね。でも、やっと新大陸に来た、て感じね」

「あいつはいるかニヤ?」

マイラの言葉にミレイナの表情は強ばる。

「……一応、調べてみるわ」

ミレイナはポーチから何かを取り出す。

それはモンスターの黒い棘のようなもの。

腰の導虫の籠に入れる。

「どう……?」

導虫が反応することを願い、見守る。

しかし、導虫は何も反応しなかった。

「・・・いない、か」

「仕方ないニヤ。根気よく探すしかないニヤ」

クリスタルも少し残念そうだが、できるだけ明るくミレイナに声をかける。

「そうね。じゃあ、帰りましょうか」

ミレイナはスリンガーに『弾』を装填し、上空に発射する。

緑の発煙弾。

これを撃つことで『アステラ』に狩猟が終了したことを知らせる。

「研究班がくるまでここで待ちましょうか」

ミレイナは近くの岩に腰をかける。

そのミレイナの膝にマイラが丸くなって寝転がる。

「マイラ、お疲れ様」

マイラの頭を撫でながら、今日クエストのことを労う。

「お安い御用ニヤ」

クリスタルもミレイナの近くにやって来て、彼女の足元に腰を下ろす。

「クリスも頑張ったわね」

「あんなやつは攻撃を食らうなんてボクもまだまだニヤ」



悔しそうに言うクリスタル。

その姿は喧嘩に負けて悔しがる小さな子供のように見えたミレイナはクスクス笑う。

「ふふっ」

「何が面白いのニャ?」

「何でもないわ。ゆっくりしましょう」

青い空を見上げ、研究班の到着を待つのだった。

## 弟子と飛雷竜

新大陸での初の狩猟を終え、『アルテラ』へ帰還したミレイナたち。

そんな彼女たちを出迎えたのは総司令だった。

「アンジヤナフの狩猟、ご苦労だった」

「ありがとうございます」

「君には1つ頼み事がある」

「頼み事、ですか・・・」

ミレイナは首を傾げる。

「気が向いたらでいいんだ。ゾラ・マグダラオスの『痕跡』を追って欲しい」

「・・・いいですが。どうして私なんですか？」

「理由は単純だ。現役ハンターで古龍の相手ができる者が君以外に浮かばない」

現在の『アルテラ』に滞在する1期団から5期団。

確かにハンターは多くいるものの、1期団は高齢で引退。

2期団は鍛冶職人、3期団は学者が多い。

4期団にもハンターはいるが、ミレイナほどのハンターはいないらしい。

「こればかりをやれ、と言ってるわけではないさ。空いた時間やクエスト中に見かけた際に奴の『痕跡』を持ってきてくれればいい。君には君の目的があるんだろう？」

「・・・」

ミレイナは黙る。

「ふつ。何にせよ、初のクエスト達成ご苦労だった。また君には依頼を準備しておこう」  
総司令は踵を返し、行ってしまった。

「・・・帰りましょう」

ミレイナはオトモ2人に声をかけ、シエリーの待つマイルームへ歩き始めた。

数日後。

毎日依頼をこなしているミレイナ。

しかし、この日は特に何もなく、昼間から食事場でいつもの如くビールを堪能していた。

「つくはぁー！！料理長のビールは最高よ！！」

ジョッキを机に強く置く。

「いい飲みっぷりだ。・・・だが、お前が来てから酒の手配量が前の3倍だ」

「気にしない気にしない！お金はあるから！」

「そういう問題じゃねえ」

どうやら料理長もミレイナの酒癖には手を焼いているようだ。

「ミレイナさん」

「んー？」

後ろから声をかけられ、振り返るとフレッドがいた。

「フレッドくん！久しぶりね！元氣だった？・・・って、その腕!?!どうしたのよ!?!」

ミレイナのハイテンションに若干引き気味の彼は左腕を首から下げた布で吊っていた。

「どうやら腕を折ったらしい。」

「また飲んで・・・。これはちよつとハマして・・・」

「恥ずかしそうに笑うフレッド。」

「無茶しすぎた？」

「いや、そんなことは」

「私のせいなんです！」

「貴女は？」

フレッドの背中から不安な顔をした少女が顔を出した。

「そ、その……。プケプケというモンスターの狩猟中にリオレウスが割り込んできて……。兄さんは私を庇って腕を……」

申し訳なさそうに眩く少女。

「そうなのね。貴女はフレッドくんの妹さんね。話は聞いてるわ」

「わ、わわっ……。！ミレイナ様に知って貰えてるなんて……」

「……。えっと。名前教えてもらえる？」

はっ、としたように少女は頭を下げながら名前を言う。

「ソフィーです！」

「そこでミレイナさんに頼みなんだが……」

フレッドが口を開く。

「そのリオレウスでも狩ればいい？」

「……。その発想はなかった……。じゃなくて俺が復帰するまでこいつを鍛えてくれな  
いか？」

「鍛える？」

むしろミレイナにはその考えがなかったようで首を傾げる。

「ああ。俺もソフィーも狩りの経験値が全くない。その間スキルアップしてもらいたくて……。というのは建前で……」

「ん？」

歯切れを悪くするフレッドに更に首を傾げるミレイナ。

「実は俺たちのバディの受付とオトモなんだけど……。ゾラ・マグダラオスの背に打ち上げられたのがトラウマになったみたいで、先日の出航で本国に帰ってしまったんだ」

「ええ……」

フレッドは頭を下げる。

「どうかお願いします！せめてソフィーだけでも面倒を見て貰えませんか！」

「いいわよ」

ミレイナは即答だった。

あっけなく了承されたことに驚き、フレッドは目を丸くする。

「一緒に何かやる人がいれば楽しいし、こっちにきて最初に知り合ったフレッドさんの頼みなら断りたくないしね。私でよければ喜んで引き受けるわ」

「……ありがとう！」

「ありがとうございます！」

フレッドとソフィーはまた頭を下げる。

「でも、フレッドくんは怪我が治るまで何をしてくれるの？もしよかったらフレッドくんの面倒も見るわよ。マイラが」

「・・・それは気が引けるよ。適当なバイトでもやるつもりだよ。市場で何か探ささ」  
「そうなのね。じゃあ、ソフィーちゃんは私の部屋に行きましょう。紹介しないと行けない人いるから」

「は、はい！よろしくお願いしますー！」

フレッドは手を振って1階層に降りていく。

ミレイナは立ち上がり、料理長にお代を払う。

「それじゃ、行きましょうか」

「はい」

返事はしたものの、ソフィーは何か言いたげにモジモジしている。

「どうかした？」

「あ、あの・・・。随分昔の事なんですけど、ココット村でのゲリヨスを覚えていますか？」

ソフィーの質問に首をひねり、思い出すミレイナ。

「ココットのゲリヨス・・・、ゲリヨス・・・。確か綺麗なペンダントを取り返しに狩猟したような・・・。一緒に女の子もいて、その子を助けたっけ・・・」

「それです！私はその時、ミレイナ様に助けられた子供です！」

「え？」

遡ること6年前。

『ギルド』の認定を貰ったばかりのミレイナはココット村にしばらく滞在する期間があり、その時にペンダントを盗んだゲリヨスの狩猟を頼まれていた。

依頼主は盗まれた女性。

その女性の娘の少女が一人で巣に向かい、ペンダントを取り返そうとしていたのだが、ゲリヨスに見つかつたところを助けたことがある。

それがそのソフィーだったのだ。

「ああ！よく見ると面影が！大きくなつたわね！」

「今の私があるのはミレイナ様のお陰なんです。あの時の姿に憧れて私はハンターを目指してきました」

「私に憧れた、か……。照れくさいわね」

恥ずかしそうに頬をかくミレイナ。

「ここに来たのだからミレイナ様が新大陸に渡るといふ噂を聞いたからなんです。まさか先に兄さんが出逢っているのは予想外でしたが……。しかもタメ口なんて……」

ソフィーはミレイナの熱狂的なフアンのようなのだ。



その熱量にミレイナは少し苦笑いする。

「あ、あはは・・・。その様付けはやめてくれる？私はそんな人間じゃないわ」  
「ですが・・・」

「その敬語もダメ。むず痒いわ」

ソフィーは手を顎に当て、考える。

「分かりました。では、先生！ミレイナ先生と呼びます！でも、敬語だけは変えませんか！  
尊敬する人に汚い言葉は使えませんので！」

「はあ・・・。分かったわ。あまり変わってない気がするけど・・・」  
話しているとミレイナの部屋の前に到着する。

「ここが私の部屋よ。先に言っておくけど、気を悪くしないでね？」

「どういうことですか？」

「まあ、すぐに分かるわよ。ただいまー」

ミレイナが部屋の中に入ると元気のいい声がする。

もちろん、シエリーだ。

「お姉様!!おかえりなさいませ!!・・・なんですか？その雌は」

「め、メス・・・!?!」

ソフィーを見た瞬間にシエリーはゴミを見る目をする。

ミレイナの言ったことはこれだったのか、と堪えるソフィー。

「貴女ねえ……。この子は今日から私の相棒なんだからね。次そんな目したら受付の子を変えて、貴女を海に流すわ。そうね、ラギアクルス辺りが美味しく食べてくれるわよ」  
「ああつ!? 申し訳ありません!!」

美しい土下座を披露するシェリー。

ミレイナはため息をついて、ベッドに腰掛ける。

「小さな椅子とかしかないけど、それに腰掛けていいわ」

「は、はい!」

緊張し、動きがぎこちないソフィー。

椅子に座るとキョロキョロして落ち着きがない。

「どうしたの?」

「そ、その緊張して落ち着かなくて……」

「そんなに?」

「そ、そりやそうです! ずっと憧れてた先生の自室なんて……。緊張しますよ!」

「んー。マイラー、いるー?」

ミレイナはマイラーを呼ぶとトコトコと庭からやってきた。

「ご主人様、お帰りなさいニヤ。そちらはお客様ニヤ?」

「ええ。後でクリスマスも呼んで紹介するわ。それで、リラックスできる飲み物、出せる？」  
「すぐ入れてくるニャ！」

マイラは走って自分のキッチンに向かう。

「ま、ゆつくりしましょう。シェリーはそこに正座よ」

「そんな!？」

待つこと数分。

マイラはお盆にティーカップとポットを載せてやって来た。

クリスタルもマイラを手伝っていくつかのハーブの葉などを持っている。

「お待たせニャ！紅茶を入れるからもう少しお待ちくださいニャ」

人数分のティーカップに紅茶を注いでいくマイラ。

「わぁ……。いい匂い……。」

ソフィーは匂いを嗅いで満足そうだ。

紅茶を入れ終わったマイラは皆の前にカップを置く。

「それじゃ、飲みながら。クリスマス、マイラ。この子はソフィーちゃん。フレッドくんの妹

「よ」

「よろしくニャ」

クリスタルが頭を下げる。

「そして今日から私たちと一緒に狩りをする仲間よ」

「どういうことニヤ？」

クリスタルは首を傾げる。

マイラも同様だ。

「そのままの意味よ。この4人でこれから狩りをしていくの」

オトモ2人は顔を見合わせ、何度か瞬きをする。

「うーん。ボクはいいと思うニヤ」

「ワタシはご主人様が仰るなら・・・」

クリスタルとマイラも賛成のようだ。

「決まりね。じゃあ早速、行きますか！」

「え、え？」

立ち上がったミレイナとは反対にソフィーは今から何をするのか分からず、あたふたしている。

「早速つて・・・。クエストですか？」

ソフィーは不安な顔をしながらミレイナに尋ねる。

「いいえ、探索よ。ちように頼まれていることもあるしね。ソフィーちゃんは準備したら食事場の止まり木まで来てね」

「は、はい！」

ソフィーは状況を全ては飲み込めていないようだが、元気のいい返事をしてミレイナの部屋を出ていった。

「ご主人がこんなことするなんて珍しいニヤ」

クリスタルは少し疑問を持った声の調子でミレイナに話しかける。

「いいじゃない。ただの気まぐれよ」

「ご主人様のことだから何かあるはずニヤ！」

マイラは笑いを堪えるように呟く。

「なんでもいいじゃない！ほら、私たちも準備するわよ」

そそくさとアイテム類の準備を始めたミレイナ。

そんな彼女を2人のオトモは笑って見つめていた。

ソフィーと合流したミレイナは『古代樹の森』にやって来た。

ソフィーは『ジャナフシリーズ』を身に纏い、背には太刀、『鉄刀』を担いでいた。「マイラとクリスは好きに探索して。私はソフィーちゃんの腕前を見るから」

オトモ2人は手を上げて、ベースキャンプから出ていく。

「さて、私たちも行くわよ」

「はいっ。先生」

歩き始めたミレイナの後ろをソフィーは着いていく。

「何か手頃のモンスターはいないかしら」

「あ、あまり強力なのは避けてもらいたいかなー、なんて・・・」

ソフィーは少し震え声で呟く。

「大丈夫よ。危ないと思ったら助けるから」

「1人なんですわね!? やっぱり!」

「あら? これって・・・」

ミレイナはモンスターの足跡を見つける。

『導虫』も反応している。

付近にいるモンスターの『痕跡』のようだ。

「じゃあ、コイツ。探しましょうか」

ミレイナは『痕跡』を籠に入れ、モンスターの探索を始めた。

森を進み、導虫が誘導し、到着したのは古代樹の根の上。  
独特な成長をした根は斜面と高台を作っている。

「居たわよ」

身を低くし、2人はモンスターを見据える。

4足歩行でトカゲのような顔。

体を覆う体毛は青白く、棘の鋭い。

何より目を引くのは大きな尾。

全体的なフォルムは狼のようだ。

「あれって、トビカガチですか？」

「ええ。ソフィーちゃんにはあれを狩って貰うわ。あいつの狩猟経験は？」

「な、ないです・・・」

そのモンスターの名はトビカガチ。

別名『飛雷竜』と呼ばれ、牙竜種に分類されるこのモンスターはアンジャナフ同様、新大陸で存在が発見されたモンスターだ。

「そう。じゃあ、ソフィーちゃんの実力が分かるわね。じゃあ、太刀の特徴はもちろん、分かっているわよね？」

トビカガチから目を逸らさずに、ミレイナはソフィーに尋ねる。

「・・・はい。攻撃をして武器に溜まっていく錬気を使って気刃斬り、気刃大回転斬りを駆使して、適切な間合いで戦う、ですよね」

「その通り。そして柔軟な立ち回りね」

答えてくれたソフィーに笑顔で頷く。

「それじゃ、頑張つて。大丈夫、自身持つて」

ミレイナはソフィーの背中を叩き、喝をいれる。

「・・・っ！はいっ！」

ソフィーは駆け出し、トビカガチの後ろに回る。

すぐさま抜刀縦切りを尾に当たると、トビカガチは彼女に気づく。

トビカガチは息を吸い込み、咆哮をあげる。

「・・・ふっ！」



ソフィーはそれを見越していたようで、円を描きながら距離を取り、衝撃をいなし、そのまま踏み込みながら薙ぎ払う、見切り斬りを披露する。

そして、そこから気刃大回転斬りを繰り出したソフィー。

その一撃でトビカガチを切り抜け、刀身は白い光を帯びている。

太刀の特徴は攻撃を繰り返すことでその鋭さを増していく。

大回転斬りで錬気を放出し、強力な一撃を放つ。

そして、放った錬気は刀身に集まり、太刀に力を与える。

「上手く行った……!」

大回転斬り後の納刀を行いながら、ソフィーは笑顔を浮かべる。

憧れのミレイナの前で一連の流れが決まったことが嬉しいようだ。

「喜んでる場合じゃないわよ!」

「は、はいっ!」

ミレイナに叱られ、慌ててソフィーはトビカガチに向き直る。

再び抜刀縦切りを行うも、トビカガチは横に飛び、ソフィーの攻撃を避ける。

「ハのっ」

ソフィーはトビカガチの方向へ移動斬りをし、一定の間合いを保つ。

トビカガチは小さく首をすぼめ、正面に立つソフィーへ噛み付く。

彼女はトビカガチの側面にローディングし、体勢を立て直すと、太刀で突き、斬り上げ、斬り下ろす。

ソフィーへ正面に向いたトビカガチだが、ソフィーはすぐさま側面へと移動斬りをし、間合いはそのまま、位置を変え続ける。

「やっ!!」

移動斬りの反動を利用し、踏み込みながら気刃斬りを繰り返すソフィー。

その一撃でトビカガチは僅かに仰け反る。

そこへ左右へ薙ぎ払った後に斬り下ろす気刃斬り。通称気刃斬りⅢを行う。

その後気刃大回転斬りを浴びせ、ソフィーの『鉄刀』はその刃に橙色の錬気を纏わせる。

「2回目……あと1回」

気刃大回転斬りによる錬気は3段階まである。

後1度、気刃大回転斬りを当てることで太刀はその全ての力を発揮できる。

ソフィーが太刀を抜き、攻撃を仕掛けようとした瞬間、トビカガチは咆哮をあげる。

「くっ……」

ソフィーは耳を塞ぎ、トビカガチを睨む。

さらにトビカガチは咆哮程ではないが、声を上げる。

すると、トビカガチの体毛が逆立ち、青白く光る。

数秒で光は消え、体毛も元に戻る。

「帯電し始めたわね……」

バレないように背の高い植物の茂みに座って隠れているミレイナが呟く。

「ソフィーちゃん。まだ完全には帯電していないから落ち着いて行くのよ」

「わ、分かっています！」

頭では理解しているようだが、ソフィーの声からは焦りが見える。

狩猟したことのないモンスターの力を溜めるような行動を見て不安にならないはずもない。

トビカガチは先程より動きが早い。

怒り出したのか、帯電による影響なのかは分からないが、確実に手強くなった。

「……ふーっ。先生が見てる。カッコ悪いところは見せたくないもん」

ソフィーは息を吐いて、呟く。

己の武器を握り締め、トビカガチの細かな動作を見逃さないように注意する。

「……来る」

トビカガチは身を引き、予備動作を作る。

ソフィーはその場でトビカガチの腕を突き、見切り斬りの体勢に移る。

トビカガチは自慢の尾を大きく振り回す。

尾が通った後には青白い電気が待っていた。

「ソフィーちゃん！」

叫ぶミレイナ。

「大丈夫です！」

そのソフィーの声からは自信があることが分かる。

トビカガチの尾を上手くいなし、カウンターの見切り斬りを当てたソフィーは3度目の大回転斬りを命中させた。

思わずぐつ、と拳を握り、ガッツポーズをするミレイナ。

(・・・いけない、いけない。思いつきり観戦者になつてたわ・・・)

軽く咳払いをし、再びソフィーを見るミレイナ。

ソフィーの太刀は赤い錬気を帯びている。

今の状態こそが太刀の真の力を発揮できる。

すると、トビカガチは高く跳び、木に張り付く。

「あっ・・・」

木に張り付いたまま電気を纏い始めた。

こうなってしまうと攻撃ができない。

ソフィーは納刀し、走って距離をとる。

薄らと体毛に電気を纏わせたトビカガチは木から跳ぶ。

手足を広げるとそこには滑空するための皮膜があり、数秒だが宙に浮く。

「ソフィーちゃん！避けて！」

「え？」

ソフィーはミレイナの呼びかけに疑問を持ち、トビカガチを見る。

トビカガチは手足をたたみ、地面へ急降下すると、着地と同時に体を回し、尻尾を振り回す。

「きやあ!!？」

反応できなかったソフィーは吹き飛ばされる。

これがトビカガチが飛雷竜と呼ばれる由縁。

木々を飛び回り、電気を操る生態から呼ばれているのだ。

「ソフィーちゃん!？」

危ないと感じたミレイナは茂みから飛び出そうとした。

しかし、ソフィーは倒れたまま、手を突き出し、ミレイナへ来るな、と訴えかける。

「大丈夫、です……。やれますから……」

ゆっくり立ち上がり、太刀を構えるソフィー。

その間にトビカガチは帯電し終え、体毛が棘のように逆立つ。

「私は先生と違って未熟だから……。持つてるもの全部を使わないと……」

ソフィーは眩き、左腕のスリンガーに『弾』を装填し、撃ち出す。

撃ち出したのは『スリンガー閃光弾』。

眩い閃光でトビカガチの視界を奪い、その隙に『回復薬グレート』を飲み、傷を癒す。

「後は、これ……」

ソフィーがポーチから取り出したのは罾の装置。

それを地面に置くと、装置は起動し、穴を掘り始めた。

「よし……」

ソフィーは駆け出し、赤く染まった太刀を振り下ろす。

視界が戻ったトビカガチは顔を振り、ソフィーを見据える。

「こっちだよー」

ソフィーは斬り下がり、踏み込み気刃斬り、また斬り下がり、踏み込み気刃斬りを繰り返し、トビカガチを罾の方へ誘導する。

流石のトビカガチも鬱陶しくなったのか、宙返りの要領で尾を地面へ強く叩きつける。

「見えてるよー」

ソフィーは見切り斬りでその攻撃をいなし、大回斬りのモーションで納刀するが、すぐさま抜刀気刃斬り。

トビカガチはついに仰け反り、大きく怯む。

「貰った!!」

ソフィーは太刀を地面と水平に構え、錬気を放出させながら突き刺す。

そこからトビカガチを踏み台にし、高く跳ぶ。

「やああああああああ!!」

落下の勢いも加え、太刀を垂直に斬り下ろす。

その一閃は赤い軌跡を描く。

錬気が生み出したその軌跡は触れたトビカガチを何度も切り裂く。

これが気刃突きと気刃兜割。

太刀の最強にして最後の切り札。

トビカガチはあまりのダメージに足を引き摺りながら逃げていく。

どうやら自分の巢に逃げるようだ。

だが、その先には。

!?

トビカガチの足元が抜け、穴に落ちる。

ソフィーが先程仕掛けたのは対モンスター用の『落とし穴』。

トビカガチは穴から抜けようと足掻くが、上手く脱出できない。

ソフィーは錬気を放出させ、刀身が赤から橙に変わった太刀で再び気刃斬りを繰り出し、大回転斬りを当て、再び刀身を赤くする。

トビカガチは大きく跳び、穴から脱出すると、逃げるのをやめ、ソフィーに向き直る。

「もう一息……。頑張らないと……」

肩で息をしながらソフィーは太刀を構える。

帯電の影響で動きが素早くなったトビカガチの攻撃は完全に避けることが難しくなった。

噛み付きや、尾の攻撃がソフィーの体を掠めるが、彼女は怯まず、自分の攻撃を与えていく。

トビカガチの前足で目の前を薙ぎ払う攻撃がソフィーの腕を浅く引き裂く。

苦痛に顔を歪めながらも、移動切りで側面に立ち回ると、踏み込み気刃斬りをトビカガチの後ろ足に当てる。

「つく……!」

トビカガチはその一撃で倒れる。

ソフィーは気刃斬りⅢ、そして気刃突き。



トビカガチを蹴り、高く飛ぶ。

滞空中にちらり、とミレイナが視界に映る。

ミレイナは心配そうにソフィーを見ていた。

(・・・先生、そんな顔しないでください。綺麗な顔がもったいないです)

ソフィーは小さく笑い、太刀を持つ手に力を入れる。

「これで!!」

渾身の気刃兜割。

その斬撃はトビカガチの弱点である尾を引き裂き、尾を部位破壊する。

つまり、ソフィーの渾身の一撃でトビカガチを完全に仕留めることはできなかった。

「まだ、ダメなの・・・?」

ソフィーの体は限界を迎えていたようで、膝から崩れ落ちる。

トビカガチは起き上がり、咆哮をあげると、ソフィーに強力な尾の一撃を浴びせよう

と、宙返りをする。

「あつ・・・」

頭では避ける、と命令を出しているが、ソフィーの体は言うことを聞かない。

(ああ・・・。ダメだ・・・。先生にカッコ悪いところ、見せちゃったな・・・)

目を閉じ、襲ってくる激痛を覚悟する。

「……あ、あれ？」

しかし、ソフィーには何も起きない。

恐る恐る目を開けるとトビカガチの尾を大剣の大きな刀身で受け止めるミレイナが立っていた。

「先生……？」

「頑張ったわね。立てる？」

笑顔で話しかけるミレイナ。

ソフィーはその光景で6年前のことを思い出す。

初めてミレイナと出会い、助けてもらった日のことを。

場所、モンスター、お互いの姿は違えど、あの時と同じ言葉と笑顔。

「ソフィーちゃん？」

「あ……はい！」

ソフィーは頭を振って、意識を集中させる。

(今は狩りの最中なんだ。あの時のことを思い出してる暇はないの……！)

足に力を入れ、ふらつきながら立ち上がる。

「いい子ね。さあ、決めなさい！」

「……はい！」

ミレイナは大剣を押し出し、トビカガチを退ける。

「ソフィーちゃん！」

「行きます！」

ソフィーは走り出す。

間合いへ入ると、左から右へ薙ぎ払う気刃斬り。

1歩下がり、逆方向へ薙ぎ払う気刃斬りⅡ。

左右へ薙ぎ払い、斬り下ろす気刃斬りⅢ。

そして。

「はああああああああ!!」

そして気刃大回転斬り。

勢いよくトビカガチを切り抜ける。

カチャツ、と納刀する音と共にトビカガチはその場に倒れ、動かなくなった。

トビカガチの狩猟達成だ。

振り返り、倒したトビカガチを見るソフィー。

「・・・やつ、た？」

彼女はその場に座り込み、安堵のため息をこぼす。

「狩猟達成おめでとう、ソフィーちゃん」

ミレイナが歩み寄り、ソフィーの前でしゃがむ。

「先生……」

「頑張ったわね。上出来よ」

ミレイナはソフィーの頭を撫でる。

「えへへ……。どうでした？私、カッコよかったですか？」

「ええ！それはもう。2回目の兜割は思わず見とれちゃったわ！」

「やった……。よかつ……。」

「ソフィーちゃん!？」

ミレイナの胸に倒れ込むソフィー。

彼女からは静かな寝息が聞こえる。

どうやら安心して、眠ってしまったようだ。

「もう……。兄妹揃ってよく寝る子たちね。……とにかくお疲れ様、相棒」

ミレイナは気持ちよさそうに眠るソフィーを抱きかかえ、ベースキャンプまで歩くのだった。

「……完全に観戦者になって展開がどうなるのか楽しんだ、なんて言えないわね」

## 白銀のヴァルキリー

荒れた地面。

草木は茂ってはいるものの『古代樹の森』とは違う、乾燥地特有の成長をしたものだ。付近にはドロドロとした質感の沼。

ここは『大蟻塚の荒地』と呼ばれる乾燥地。

この地でミレイナたちは1頭の大型モンスターと見合っていた。翠の鱗と甲殻。

大きな翼と強靱な脚。

その姿は伝記なので見かける竜そのもの。

それは陸の女王の名を冠する飛竜種のモンスター、リオレイア。

「せ、先生……」

「どうしたの？」

不安げな声を出すソフィー。

「私たち、キャンプの設営に来たんですよね？」

「そうね」

「なんでこんなことになってるんですか!？」

リオレイアと対峙する2人の後ろには土砂竜ボルボロスも現れていた。

「ご主人と狩りに出かける時はよくあることニヤ」

クリスタルは呑気に呟く。

「そうね。よくあるわ」

「あるあるニヤ」

「キャンプ設営の邪魔になるから狩っておくわよ」

「ええ……。もう!」

ソフィーは半場ヤケになりながらトビカガチの素材から作り上げた『パルサーシヨール』を構える。

「いいわね。やる気じゃない。じゃあ、行くわよ!」

ミレイナも背中に担いだ『召雷剣【麒麟帝】』に手を添え、リオレイアへ走る。

「ソフィーちゃんとクリスもリオレイアに!マイラはサポートをお願い!」

「了解ニヤ!」

クリスタルはミレイナの後ろについて走っていく。

一方、マイラが取り出したのは大きな虫籠。

その虫籠は何やら光を放っている。

それをその場に設置する。

「えっ?! ボルボロスはどうするんですか!？」

ボルボロスに誰も向かって行かないことにソフィーは驚く。

大型モンスターが同じエリアに現れた場合、片方を追い払うか手分けして狩猟するのがセオリーなのだが、ミレイナはそんな気はないようだ。

「あんなの、気づいたら死んでるわよ」

「はあ!？」

ソフィーはミレイナと共に狩りに出るようになって気づいたことがある。

ミレイナはかなりの血の気が多い。

まず、目に入った大型モンスターは片っ端から狩ろうとする。

瀕死に追い込まれ、逃げようとするモンスターを罾やアイテムを使って逃がさない。

挙句の果てにはモンスターの捕獲の依頼ですら、そのモンスターにトドメを刺そうとした時は冷や汗ものだった。

「ほらー! ぼーっ、とすると危ないわよ!」

既に攻撃を始めているミレイナ。

クリスタルとマイラもリオレイアに取り付いている。

「うう……もうどうとでもなれ!」

ソフィーも腹を括り、ミレイナの指示に従う。

「ふっ!!」

ミレイナは早速真・溜め斬りをリオレイアの頭に直撃させる。

その一撃はリオレイアの頭の鱗を砕き、大きな切疵を作り出す。

そこへソフィーの踏み込み気刃斬りも叩き込まれ、リオレイアは大きく仰け反る。

「ソフィーちゃん、後ろに避けなさい!」

ミレイナの声に反応し、ソフィーはその場から後方へローリングする。

すると、そこへ頭を下げ、自慢の頭部を突き出したボルボロスが勢いよく突進してきた。

「あ、危な・・・」

ソフィーの目の前を走り抜けるボルボロス。

被弾しなかったことに安堵し、ソフィーは2体のモンスターを見据える。

「先生!」

再び走り出すボルボロス。

そのボルボロスの進行方向にはミレイナがいる。

「大丈夫よ!」

どうやらミレイナはボルボロスが接近していたことに気づいていたようだ。



リオレイアの股下を潜るようにローリングし、リオレイアの後ろに回る。  
激しい衝突音。

ボルボロスの突進はリオレイアの胴体に当たる。

ギャオオオオオオオオオ!!

グオオオオオオオオオ!!

リオレイアは怒りの咆哮をあげる。

それに感化され、ボルボロスも咆哮をあげた。

2頭はミレイナたちを無視し、互いに争い始める。

その度に咆哮をあげ、ミレイナたちは耳を塞ぐ。

「ソフィーちゃん!」

なんとかその場を離脱したミレイナたちがソフィーに駆け寄る。

「普通こういうのって手分けするから逃げるかですよ! やっぱり危ないですって!」

「まあまあ。なかなか1人の癖が抜けなくてね。とにかく!」

ミレイナは足元の程よい大きさの『石ころ』を拾い、スリンガーに装填する。

「ギャーギャーうるさい、あの2体にはお灸を据えないとね!」

「ひっ!?!」

ミレイナに怯えるソフィー。

口は笑っているが、目がすわって瞳には光を感じない。

「あー。キレてるニヤ」

「ど、どうして・・・」

クリスタルはやれやれ、と言ったように手をあげる。

「ご主人様はモンスタ―が何回も咆哮をあげるのが嫌いニヤ」

「・・・クリスさんとマイラさんはよく見るんですか？」

「見るニヤ」

クリスタルとマイラは頷く。

「うるさいわよ」

「は、はい！」

ポン、と『石ころ』が飛んでいく。

ミレイナが撃ち出した『石ころ』はマイラが最初に設置していた虫籠に当たり、壊れる。

すると、虫籠は激しい閃光を放つ。

ゴオオ!?

ガアツ!?

その光で2体は視界を奪われる。

ミレイナが壊したのは以前、マイラとクリスタルの2人で『古代樹の森』を探索した際、そこに生息するテトルー一族に貰ったオトモ道具、『閃光虫かご』。

これをマイラが使っている。

「じゃあ、行くわよ。3人共」

「は、はい……」

ソフィーは少し声を震わせながら、前に行くミレイナについて行く。

すると、ミレイナはポーチから小さな木の実と丸薬を取り出した。

その2つはどちらも赤い。

「あつ。これはマジなやつニャ……」

「ちよつと離れてた方がいいかニャ？」

クリスタルとマイラは顔を引き攣らせる。

「あれって、『怪力の種』と『怪力の丸薬』？」

ソフィーは至って普通のアイテムに顔を引きつらせるオトモ2人に首を傾げる。

ミレイナはその2つを一気に噛み砕く。

そして、『鬼人薬グレート』で口の中の実と丸薬を流し込む。

「……っはあー。すぐに叩き潰してやるわ」

ミレイナは小声で呟いたはずだが、その声はソフィーの耳にはつきり届いていた。

「本当に大丈夫なんですか!?! あんな先生見たことないですよ!?!」

ソフィーは狼狽えながら、クリスタルとマイラに訴えかける。

「あんなったのって前はいつだったかニヤ?」

クリスタルは足を止め、マイラに話しかける。

「確か、ユクモ付近のティガレックス亜種以来な気がするニヤ」

マイラはその場に立ち止まるどころか、腰を下ろす。

「あー。あれは凄かったニヤ」

クリスタルもマイラと並んでその場に座り込む。

「ちよっ!?!二人共何してるんですか!?!」

完全にリラックスして、自分たちの『回復薬』が入った水筒を飲む2人。

その行動にソフィーは叫ばずにはいられなかった。

「いくら先生とはいえ、2頭を相手に」

グオオ・・・。

「するの・・・は・・・」

グギャアアアア!?!

ソフィーに聞こえるのはリオレイアとボルボロスの悲鳴。

ゆっくり振り返り、ミレイナの方を見ると、全身の泥が剥がれ落ち、尻尾が切られて

いるボルボロス。

リオレイアは両翼がボロボロだ。

「あの時のご主人様には近寄らないのが身のためニヤ。一緒に斬られそうになるのはもう勘弁ニヤ」

マイラが近くのキノコや植物を採取しながら言う。

「・・・何でもいいや」

ソフィーはクリスタルと同じ所に腰を下ろし、行く末を見守ることにした。

2頭を相手に取るミレイナ。

リオレイアのほとんどの攻撃は足元に潜ることで避けることができる。

強靱な脚と翼を使い、毒を生成する尻尾を宙返りしながらぶつける、リオレイアの代名詞の尻尾サマーソルトも真横に転がり、的確に避ける。

宙に浮いたリオレイアへ容赦なく『閃光スリンガー弾』を撃ち出し、地面へ叩き落とすと、真・溜め斬りを叩き込む。

そこへボルボロスが飛び込んで来るのだが、リオレイアと同時に真・溜め斬りの餌食となり、ボルボロスの巨体は地に倒れる。

リオレイアが立ち上がり、咆哮をあげようとするが。

「ぶるっさいのよ!!」

真・溜め斬りを放った直後だったミレイナはローリングからリオレイアの喉元へ渾身のタツクルを放つ。

ギャツ!?

数歩後ずさるリオレイア。

そのまま息を大きく吸い込み、高出力炎プレスを吐き出す。

だがそれは地面を焦がすだけでリオレイアの標的には当たらなかった。

プレスの隙に足元へ移動していたミレイナは抜刀斬りから、強・溜め斬りを繰り出す。

その2発を脚に当て、リオレイアはバランスを崩し、倒れる。

「おおりやああああああ!!」

倒れたりオレイアの頭部へ渾身の真・溜め斬りの1段目が直撃する。

頭部の甲殻をバラバラに砕き、柔らかい肉を刃が刺る。

クオ・・・

『召雷剣【麒麟帝】』の雷の刃。

その雷がリオレイアの傷口を焼き、血は一滴も出ていない。

だが、肉が焦げる嫌な匂いが鼻につく。

「せえええええい!!」

全体重を乗せた一撃。

その一撃はリオレイアの頭部内を深く抉り、鮮血を撒き散らす。リオレイアはその場で動かなくなった。

「ふん……」

ミレイナは『召雷剣【麒麟帝】』を地面に突き刺し、手をはたく。『キリンXシリーズ』の純白が鮮血でどこどころ赤く滲んでいる。

「3人共ー。帰るわよ」

「ボルボロスはいいんですか？」

ソフィーはいつの間にか逃げていったボルボロスのことを心配する。

「別にいいでしょ。あれだけこっぴどくやられたら仕返しにも来れないわよ」

「はあ……」

「それより帰りましょう。後は技術班に任せるわよ。……お腹減ったし、シャワー浴びたいわ」

ミレイナは大剣を担ぎ、ベースキャンプまで歩き始める。

その後ろをクリスタルとマイラがトコトコと付いていく。

「めちやくちやだけど、やっぱり先生は凄いなあ」

「ソフィーちゃん、置いていくわよー」

「あっ！待ってください！」

ソフィーも慌てて3人を追いかけるのだった。

ミレイナたちが拠点に戻ると何やら『アステラ』全体が騒がしくなっていた。  
「何かあったのかしら?」

ミレイナはとりあえず近くにいた男性ハンターにこの状況を尋ねる。

「何かあったの?」

「ああ……。実はゾラ・マグダラオスの『痕跡』が見つかったんだ!」  
「本当?」

「嘘なもんか。『古代樹の森』にヤツの落とされた甲殻があったんだ。それを今、リーダー  
が取りに行っている」

「そうなのね。ありがとう」

ミレイナは礼を言うとソフィーたちに向き直る。



「とりあえず、総司令の元に行きましょう。そこで今後の動きを決めるわ」

「はいっ」

「了解ニャー!」

総司令の元へ行くと、来たか、とでも言いたそうな表情をした総司令が腕を組んで立っていた。

「来ると思っていたよ。皆を集めよう。ゾラ・マグダラオス捕獲作戦の会議を始める」  
総司令の言葉にミレイナは眉を動かす。

「捕獲? 待つてください。あんな巨大なものをどうやって・・・」

「この『アルテラ』の全てを持って挑む。あいつが帰ってきたら詳細を説明しよう。君も出席してくれ」

「・・・分かりました。行きましょう」

ソフィーたちに声をかけ、その場を後にする。

「一度解散ですか？」

「そうね。シャワーでも浴びてくるわ」

「私もそうします。では、また後で」

ソフィーは自分のマイルームへ行く。

彼女の後ろ姿が見えなくなるまで見送り、ミレイナたちも歩き始める。

「ワタシたちも先に行ってお風呂を沸かしておくニヤー！」

「ありがとう、マイラ」

そう言うとマイラは走り出す。

その後ろをクリスタルが追いかける。

1人になったミレイナは空を見上げる。

「あんなに巨大でまだ調査不足の古龍を捕獲なんて・・・。無謀すぎる・・・」

誰もいない道でポツリ、とミレイナは呟いた。

調査班のリーダーが帰還し、会議が始まった。

各班のリーダー、副リーダーが招集されていた。

そして……。

「以上が内容だ。意見があるものは？」

誰も何も言わない。

どうやら皆賛成のようだ。

「よし。準備が整い次第決行だ。君たちに青き星の導きがあらんことを」

総司令の言葉で皆、血気盛んに作業に取り掛かっていく。

そんな中、ミレイナだけが浮かない顔をしていた。

「先生、何か引つかかるんですか？」

隣にいるソファイが心配して声をかける。

「……普通、古龍っていうのはそこに現れただけで私たちに災厄をもたらすものよ。でもゾラ・マグダラオスは災厄をもたらした？」

「確かにそうですが……。災厄が起きない理由がこの『古龍渡り』に関係しているんじゃない

「ないんですか？」

「……だといんだけどね」

ミレイナの直感は何か嫌な予感がする、と訴えかけていた。  
決戦の時は近い。

## 熔山龍、捕獲作戦（前編）

『古代樹の森』の奥底へ進行して行つたと推測されたゾラ・マグダラオス。

ゾラ・マグダラオスの進行を止め、捕獲するために『アルテラ』の人々は進行ルート上の大渓谷に頑丈な木で作り上げた巨大な障壁を2つ建設した。

物資班と技術班がいつ現れるか分からないゾラ・マグダラオスを気にしながら急ピッチで作業を進めている。

障壁は完成し、後はあの巨体に対抗する装備である『大砲』、『バリスタ台』を次々に設置していく。

この2つの障壁と装置を使い、ゾラ・マグダラオスの動きを止め、弱つた所を捕獲するのが今回の作戦だ。

「作業の進みはどうだ！」

総司令の声が響く。

「細かい調整だけです！」

若者が技術班リーダーからの伝言を伝える。

「そうか。ハンター諸君！」

作業を手伝っていたハンターたちが作業を止め、総司令に向き直る。

「この作業が終わり、ヤツが現れた時が君たちの本業だ。キリがいい者から順に休息をとってくれ。ただし、しばらくしたらまた作業に戻ることだ」

「はいっ！」

若いハンターたちの返事が溪谷に響く。

その中にはもちろんソフィーの姿もあった。

一方、ミレイナは……。

「もう最高！あれとこれと！ああ、幸せ♡」

テーブルの上に並んでいるのは大量の料理。

この料理を作っているのは料理長とその弟子のアイルーたちとマイラ。

このために特設された食事場で忙しく動いている。

「このために生きてる……！私はこのために……！」

ミレイナは料理を次から次に口へ運んでは幸せな顔をする。

「はあ……。主人は食べ物に目がなさすぎニヤ。イビルジョーもきつとビックリニヤ」

クリスタルが呆れながらミレイナを見る。

「そこまでないわよ。ほら、クリスも食べましょう。本当に美味しいんだから」

「ボクはもう食べたニヤ。大体他のハンターたちが手伝ってるのにご主人は食べてばか

り。やる気あるのかニヤ？」

「ハンターの仕事は狩りよ。食べれる時にたくさん食べて、飲んで、休む。．．．そもそも私があんな作業できると思う？」

「．．．ご主人は片っ端から壊しそうニヤ」

「そこは否定するところでしょ!?!料理長、ビール!」

ミレイナがビールを注文すると弟子のアイルーがジョッキを運ぶ。

「ありがとう。ンクツ、ンクツ．．．。ぶはあ!!これがあれば狩りが捗るといふものよ!」

「ああ、やつぱりここに居た．．．」

料理を一心不乱に食べ続けるミレイナを見て、ソフィーはため息をついた。

「先生．．．」

「あら、ソフィーちゃん。お疲れ様」

「作業はあらかた区切りが付きましたよ。後はゾラ・マグダラオスが現れるのを待つだけです」

「そう．．．。料理長、ご馳走様。お代、置いておくわ」

ミレイナは立ち上がり、キャンプ用のテント群に歩き始める。

「どこに行くんですか?」

「準備しようかなって。そろそろ始まるわよ」

「え？」

「まあ、気を張っても仕方ないわ。気を引き締めるのは狩りの最中だけ。じゃ、また後で」

ミレイナは手を振り、自分のテントに行ってしまった。

陽が登り始める。

技術班の作った障壁の端で一人、ミレイナは腰を下ろし、朝日が登っていくのを見つめていた。

朝日を浴びながら、常に持っているモンスター黒い棘を見つめる。

「このどこかに……。新大陸のどこかにいる……。」

先日対峙し、撃退したボルボロスなのだが、無数の棘に串刺しにされ死んでいた、とキャンプ設営をした技術班から報告を受けた。

彼らがその時採取した『痕跡』とミレイナの持つ棘。



サイズは違うが、同種のモンスターで間違いない。  
そして。

「……来るわね」

ミレイナが眩くと導虫が青い光を纏い飛び出す。

「この反応が古龍なのね」

棘をしまい、ミレイナは立ち上がり、他のハンターたちが集まっている場所に向かう。

「先生！導虫が……！」

ミレイナを見つけたソフィーが慌てて寄ってくる。

「ええ。古龍だとこんな反応をするみたいね」

「はい……。なんだか、不気味ですわね」

「おい！あれ！」

1人のハンターが大声をあげ、渓谷の遥か先を指さす。

微かに響いてくる足音と振動。

1つの山がゆっくり動きながらこちらへ向かってくる。

「来たわね……」

熔山龍ゾラ・マグダラオス。

目的のモンスターがその姿を現した。

「総員、配置につけ！何としてもマグダラオスを捕獲するのだ！」

「おおおおおおおおお！！」

総司令の命令と共に、ハンターたちが一斉に『大砲』と『バリスタ台』に向かっていく。

砲弾の轟音。

弾の発射音。

人々が生き残っていくための知恵と力はゾラ・マグダラオスの体力を少しずつ奪っていく。

しかし、あの巨体だ。

『大砲の弾』、『バリスタ弾』を受け止め、ゾラ・マグダラオスは障壁の前まで進行し、自分の通行の障害となる壁に体をぶつける。

「うわっ！……すっごい衝撃……」

バリスタを撃っていたミレイナはその振動で地面に手をつく。

「……障壁は……。無事そうね」

ゆっくり立ち上がり、再びバリスタを撃ち始める。

だが。

「障壁が破られました！」

ゾラ・マグダラオスは何度もその巨体を障壁にぶつけ、とうとう破壊したのだ。

「慌てるな！2つ目の障壁へ先回りする。ハンターたちは翼竜に掴まり、ヤツに取り付くのだ！」

ハンターたちは一斉に翼竜に掴まり、ゾラ・マグダラオスの背を指す。

「私たちも行きますか……。クリス！マイラ！ソフィーちゃん！」

3人は手分けして『大砲』に弾を運搬していた。

運搬をやめ、ソフィーは指笛を、クリスタルとマイラはミレイナの元へ駆け寄る。

「行きましようか」

ミレイナの足にオトモ2人は掴まり、ソフィーの翼竜とミレイナの翼竜は並行して空を飛ぶ。

「えっと……。排熱機関を壊すんですよね。それってどれなのでしょう？」

「確かに。先に行った人たちが見つけてくれるとありがたいんだけどね」

ソフィーの質問にミレイナも悩む。

とにかくミレイナは先にゾラ・マグダラオスに乗り移ったハンターたちが集まっている箇所、向かっている先を探す。

「あれ。多分あれよ。あの赤い大きなやつ」

ミレイナの指さした燃えるように赤く、蒸気を出している岩のような外殻。

そこにハンターが数人集まり、攻撃をしていた。

「みたいですね。私たちも行きますか？」

「そうね。あれを探し回ってみましょう」

何事もなくゾラ・マグダラオスの背に降りたミレイナたち。

「ひと月前、だったかしら。ここでフレッドくんを助けたのは」

「もうそんな前になるんだニヤ」

ミレイナとマイラは感慨深そうに呟く。

「物思いにふけてる場合じゃないニヤ」

クリスタルが2人を注意する。

「分かってるわよ。それじゃ、排熱機関を探しましょうか」

壁を登り、上を目指す。

時折激しくゾラ・マグダラオスが暴れるのは他のハンターが排熱機関の破壊に成功した証拠だろう。

「つて！どこにもないじゃない！」

頂上まで登ったものの、排熱機関と思わしき外殻は見つからない。

ミレイナは不満の声をあげる。

「他の人たちが全部壊しちゃったのかもしれないですね」

しゃがみこんでゾラ・マグダラオスの背を見つめるソフィー。彼女もどこか不満げだ。

「まあ、全ハンター総動員だから取り分が無くなるのも仕方ないか……。一度降りましよう。何か見つかるかもしれないわ」

「そうですね」

その時だった。

ミレイナは見た。

黒い何かが大きな翼を羽ばたかせながらこちらへ飛んでくるのを。

あれはモンスターだ。

全身に黒い棘を生やし、頭には白く、太い1対の大角。

どの種にも当てはまらない独特な骨格と風貌。

間違いなく古龍だ。

「嘘……」

「先生？」

「逃げなさい」

「え？」

ミレイナの言ってる意味が分からないソフィーは間の抜けた声を出す。

「ここにいるハンターみんなに離脱するように言って、貴女も逃げなさい！」  
「どういうことですか!？」

「説明してる暇はないの！分かったのなら早く！クリス！マイラ！」

「はいニヤー！」

クリスタルとマイラはミレイナの肩に飛び乗る。

頂上からゾラ・マグダラオスの尾を指して斜面を滑っていく。

「なんで？なんでアイツがここに・・・」

黒いモンスターはゾラ・マグダラオスの尾に4本足で着地し、おぞましい咆哮をあげる。

「あれ！不味いニヤー！」

マイラが指さした方を見ると、モンスターが着地した場所にはそこで待機していたハンターたちがいた。

「その貴方たち！早く逃げなさい！」

ミレイナは叫ぶ。

だが、ハンターたちにその声は届いていない。

ハンターたちは各々の武器を抜刀し、モンスターに向かう。

「やめなさい！クソっ・・・」

ハンターたちは4足歩行の未知のモンスターに果敢に攻め入るが、黒い棘に武器を弾かれてしまう。

バアオオオオオオオオオ!!

モンスターは前足を強く振り下ろし、ハンターの1人を吹き飛ばす。

後ろから回り込んだハンターには長い尾を振り回し、なぎ倒す。

「でやああああああああ!!」

ミレイナは滑っている壁を蹴り、モンスターへ向かって大きく跳ぶ。

背中『召雷剣【麒麟帝】』を抜刀し、空中で溜める。重力と溜めた力を存分に使い、モンスターへ振り下ろす。

だが、その一撃は空を斬り、地面に重鈍な音を響かせる。

モンスターは上から攻撃してきたミレイナに気づき、後ろへ大きく飛び退いていたのだ。

少しの距離を空け、ミレイナと黒い棘のモンスターは見合う。

「クリスとマイラはその人たちを逃がすのに専念して」

「ご主人様は1人で大丈夫ニヤ？」

心配そうに尋ねるマイラ。

だがミレイナはニツ、と笑う。

「私を誰だと思ってるのよ」

「……すぐ助けにいくニヤー！」

そう言うのとマイラはクリスタルと共にハンターたちを逃がし始めた。

その場に残されたのはミレイナだけ。

モンスターは荒々しい息を吐きながらミレイナを睨み続ける。

「やっば……。どうしよ……」

大剣を構えるミレイナの腕は小刻みに震える。

体中を嫌な汗が伝い、不快感もある。

「震えが止まらない……。武者震い、て訳じやないわよね、これ。あんなこと言つたく

せに怯えてる……。怖いなんて思うのもいつぶりかしら……。でもね」

ミレイナは大剣を納刀し、モンスターへ全速力で駆け出す。

「私はお前を殺さない気が済まないのよ!!」

突っ込んでくるミレイナを迎撃するために前足を振り下ろす。

「……っ！」

ミレイナは前方に飛び込むようにローリングし、前足を紙一重で躲す。

起き上がる反動と共に大剣を抜き、モンスターの胴体に抜刀斬りを当てる。

が、手応えはまるでない。



すぐさまその場から抜け出し、モンスターを視界から外さないように立ち回る。黒いモンスターは溜める動作もなく、ミレイナに飛びかかってくる。

「くっそー！」

慌てて大剣を盾にその攻撃を受け止める。

「おっも、いっ!!」

何とか踏みとどまり、モンスターの腹へ潜る。

次は腹ではなく、尾に抜刀斬り。

先程より手応えを感じたミレイナは尾に張り付き、少しずつダメージを蓄積させていく。

グオツ・・・。

縦斬りでモンスターは怯む。

すぐさま強・溜め斬りを後ろ足に叩き込む。

だが、またしてもモンスターはその場から跳び、ミレイナと距離をとる。

「はっっ・・・」

納刀し、次の一手を考える。

しかし、考える時間も与える気はモンスターにはないらしい。

おぞましい声をあげながら、ミレイナに向かって飛び込んでくる。

「こんの……！」

真横に転がり、なんとか避け、そのままミレイナは前足を狙う。そこでミレイナは気づく。

このモンスターの棘が目で見分けるほどの速度で成長していくのを。

「古龍っていうだけで、どいつもこいつもデタラメして……」

不意に黒いモンスターは背の翼を地面に叩きつける。

「……あつぶな」

翼はミレイナのすぐ目の前に叩きつけられ、小石を飛ばす。

ミレイナはふっ、と息を吐く。

しかし、安堵したのがいけなかった。

モンスターはそのまま翼で地面、いや、ゾラ・マグダラオスの背を削りながら進み始めた。

「なっ……!?!」

突然の事で大剣でろくに防御もできず、ミレイナの体は吹き飛ばされる。

体を正面に向けたまま、両手足を地面につけ踏ん張るが、それでも数mほど飛ばされてしまった。

「……つく……。いたつ……」

左肩に攻撃を受けたミレイナ。

その肩からは鮮血が流れ、『キリンXベスト』肩口の白を赤く染める。

「繋がってるし動く。いける」

追い打ちをかけてくるモンスターに合わせて、ミレイナは抜刀溜め斬りを頭部に打ち込む。

ガキン！と弾かれる音。

やはりあの大角は頑丈で、ミレイナの一撃を容易く弾く。

「・・・硬っ。でもー」

もう一度振り下ろすと、ちょうど角の生え際。モンスターの眉間を刃が捉え、頭部の棘を砕く。

「っー」

砕けた棘の欠片の大半がが頬をかすめ、1つが額に刺さる。

そこから血が流れ、嫌でも口に鉄の味がまとわりつく。

流石に今の一撃は効いたのだろう、モンスターは軽く後ろに仰け反る。

「早くなんとかしないと・・・。ゾラ・マグダラオスが第2障壁に辿り着く前に」

グオオオオオオオオオオオオオオ!!

最初に聞いたのとは少し違う咆哮。

おそらく、怒ったのだろう。

口からは黒い吐息が漏れ、棘の再生が早まった。

証拠に今砕いた頭部の棘は白いが、他の部位に引けを取らない長さに再生している。

モンスターは仕切りに左前足を叩きつけ、ミレイナを踏み潰そうとする。

「そう何度も……!」

モンスターを中心にグルツ、と後ろに回り込み、尾へ攻撃を重ねていく。

「先生!」

「ソフィーちゃん!」

ミレイナと反対の方向からソフィーが走ってくる。

「私も……」

「帰りなさい!」

モンスターから距離を取り、ソフィーに向かって叫ぶ。

「え……」

思わず立ち止まるソフィー。

「1人より2人の方が……」

「そんな次元じゃないの! トビカガチにボロボロになつてるようなレベルじゃ足でまといなのよ!」

ソフィーは俯く。

確かに今の彼女の實力ではあつという間にやられてしまふだろう。

その間、ミレイナはソフィーに敵意が向かないように必死に注意を向ける。

「分かったのなら早く行きなさい！死にたいの!？」

その言葉にソフィーはピクつ、と肩を跳ねさせ、悔しそうな顔をしながら背を向け、走っていく。

「それでいいのよ・・・」

走っていくソフィーの背中を見て微笑むミレイナ。

抜刀斬りから強・溜め斬りを当て、モンスターを大きく怯ませる。

「後で謝らないと。せっかくできた相棒なんだから。嫌われたくないわ」

ミレイナは眩き、モンスターに向かっていくのだった。

## 熔山龍、捕獲作戦（後編）

ゾラ・マグダラオスの進行は止まらない。

最後の障壁の前でハンターたちは持てる装備全てを使い、ゾラ・マグダラオスの体力を奪おうとするが、ヤツが弱る気配は一向に見えない。

「早く！早く止まってよ！先生が……」

ミレイナの言いつけを守り、障壁でゾラ・マグダラオスを迎え撃つソフィーが焦ったように呟く。

「落ち着くニヤ。マイラもいるし、ご主人を信じるしかないのニヤ」

ゾラ・マグダラオスの背でハンターたちの離脱の誘導をしていたクリスタルとマイラ。

しかし、2人は途中ではぐれてしまったが、クリスタルはソフィーと鉢合わせ、障壁にてゾラ・マグダラオスを迎撃している。

「ですが！私が見た時にはもうポロポロだったんですよ！」

「……ぞって時のご主人の底力は凄いニヤ。それを信じるのニヤ」

「……はい」

「いっつ．．．」

肩で荒い息をしながら黒いモンスターを睨む。

体中傷だらけのミレイナ。

何度も即死するような攻撃を躲し続けるも、飛び散る棘で傷を増やしていた。

防具の7割近くが血で赤くなり、輝く銀の長髪にも血が付いていた。

モンスターも少しづつ弱り続けてはいるものの、攻撃の手を緩める様子はない。

モンスターはミレイナへまたしても跳びかかり、トドメを刺そうとする。

「くっそ．．．。しつこいのよ．．．」

大剣を盾にし、何度目かも分からない攻撃を受け止める。

「くっそっ！」

縦斬りを繰り返すも難なく躲されてしまう。

「やっぱり大剣だと・・・」

あのモンスターは素早い。

振りが遅い大剣ではなかなか決め手の入らない状況にミレイナは歯ぎしりをする。

ポーチの中を手探りで漁るが、『回復薬』などの傷を癒すアイテムも底を尽きようとしていた。

「ご主人様！」

「マイラ!？」

モンスターの足元をくぐり抜け、棘を砕きながらミレイナの元に駆け寄るマイラ。

「傷だらけ・・・。遅くなって申し訳ないニヤ」

「マイラ、離脱したんじや・・・」

「ワタシはご主人様のオトモなんだニヤ」

「・・・ありがとう」

マイラが来たことにより、ミレイナの表情は少し明るくなる。

「クリスは？」

「途中ではぐれたニヤ。多分、ソフィーさんと一緒だと思うニヤ」

「そう。だったらソフィーちゃんは大丈夫ね」

すると、ゾラ・マグダラオスが大きく揺れる。



無数に刺さった『バリスタ弾』には強靱なワイヤーが括りつけられており、それによってゾラ・マグダラオスの動きを止めたのだ。

「とにかく、私たちがコイツをどうにかしないと。やるわよ、マイラ」

「はいニャ。2人で狩りだなんて昔を思い出すニャ」

「そうね。あの頃とは随分変わってしまったけど、いつも通りやるわよ」

ミレイナはモンスターへ向かって走り出す。

残り少なくなつた『怪力の種』をかじり、アドレナリンの分泌量を増やし、一時的に筋力を高める。

そして、マイラの『はげましホルン』の音色により、ミレイナの力は更に上がる。

ミレイナの抜刀斬りはモンスターの眉間を的確に捉え、刃が甲殻を切り裂き、青白い稲妻が焼く。

「マイラー！」

ミレイナは前方にローリングし、マイラを呼ぶ。

「とつたニャー！」

マイラはミレイナの攻撃した箇所へ飛び込みながら、『寧レイアネコレイピア』を傷口へ差し込む。

その一撃でモンスターは仰け反る。

「ナイス！」

そのチャンスに漬け込み、ミレイナは溜め始める。

「倒れなさいよ!!」

真・溜め斬りがモンスターの後ろ足に直撃する。

グオツ・・・!

遂に黒いモンスターは転倒する。

「マイラー！畳み掛けて！」

2人は自身のできる最高の攻撃を容赦なくモンスターへ叩き込む。

ミレイナが2度目の真・溜め斬りを頭部に当てた時にモンスターは立ち上がる。

例のごとく、前足を地面に叩きつけ、腕の棘を周囲に撒き散らす。

「このつ・・・！再生が弱まるどころか早くなってる！」

ミレイナは大剣を水平に薙ぎ払い、飛び散る棘を砕く。

「ご主人様！毒が入ったニヤ！」

よく見るとモンスターの口からは紫色のヨダレが流れ始めた。

全てのモンスターは自身の身が毒で蝕まれると口から唾液と共にその毒を外へ吐

き出す。

この黒いモンスターも同様のようだ。

マイラの持つ武器はリオレイアの毒を分泌する棘から作られている。その毒はこの黒いモンスターにも通用した。

そして、ミレイナは段差から飛び降り、ジャンプ溜め斬りを翼に当てる。

モンスターに乗り移ることはできなかったが、確かなダメージを与えたことにより、モンスターは仰け反る。

「このタイミングなら・・・！」

ミレイナは前足を狙い、大剣を振りかぶり、溜め始める。  
だが・・・。

グオオオオオオオオオオオ!!

モンスターは2本足で立ち上がり、大咆哮をあげ、そのあまりの音量と衝撃にミレイナとマイラはその場で蹲る。

モンスターの全身の棘は瞬時に伸びきり、禍々しい艶が生まれる。

そして、翼を大きく広げ、飛び上がり、ミレイナたちを睨む。

「マイラー！つちにー！」

マイラは慌ててミレイナの足元に駆け寄る。

「来るー！」

モンスターは2人へ急降下する。

それに合わせミレイナは大剣を盾にし、自分と足元のマイラの身を守る。

モンスターのそれは着地とはとても呼べるものではない。

地面に激突し、強引に体をコマのように横回転させながらゾラ・マグダラオスの背を  
挟む。

恐らくこれがこのモンスターの切り札。

今までとは比べ物にならない衝撃がミレイナを襲う。

「ぐっ……うう……！」

耐えたと思ったのも束の間。

モンスターは全身の棘を四方八方に撒き散らす。

激しく何度も棘が『召雷剣【麒麟帝】』を叩く。

しかし、棘を受け止めきれなかったミレイナの体は宙に浮く。

「きゃあっ!!」

「ご主人様!!」

ろくに受け身も取れず、背に叩きつけられるミレイナ。

「……う……あ……」

うつ伏せのまま手探りで『召雷剣【麒麟帝】』を探すが、見つからない。

それもそのはず。

ミレイナの愛刀は彼女が吹き飛ばされたと同時にゾラ・マグダラオスの背から落ちていったのだから。

「……ない……。ど……。？」

ミレイナは無理矢理体を起こし、付近を見渡すが、彼女の視界の半分が赤く染まっていた。

「……血が、目に……」

ミレイナの頭からは血が流れ出し、視界を染める。

見えにくいまま、目の前を見るとマイラがミレイナの前に立ち、モンスターと睨み合っていた。

「……マイラ、私を置いて逃げなさい……」

「イヤニャー！」

「……いいから。私はもうダメみたい……。やっぱりコイツには……。勝てなかった……」

「まだチャンスはあるニャー！2人でここから帰ってまた頑張るんだニャー！」

「……マイラ……」

ゾラ・マグダラオスを拘束していた『パリスタ弾』が外れる。

大きな揺れにモンスターも僅かに体をよろめかす。

どうやら少しは弱っているようだ。

「・・・アイツも相当効いてるみたい。今ならまだ逃げれるわ」

「聞かないニヤー！」

なお、拒否し続けるマイラ。

すると、何かが空を裂く音が聞こえる。

それは『バリスタ弾』だ。

何百ものバリスタがゾラ・マグダラオスに突き刺さり、その何発かが黒いモンスターにも刺さる。

しかし、モンスターは全く動じず、刺さった『バリスタ弾』を体を振るい、落とす。

「おおおおおおおおおおお！！」

聞きなれない声でした。

ゾラ・マグダラオスの頂上から駆け下りてくるハンターが2人、ミレイナの元へ駆け寄ってくる。

1人は旧式の『レイアシリーズ』を身に纏い、『飛竜刀【翠】』を背負ったハンター。

もう1人は『ジュラシリーズ』を身につけ、チャージアックス、『ディアールテミナ』を手に持っている。

「ミレイナさん！！」

「フレッドくん……?」

ミレイナが聞いた声は間違いないくフレッドのものだ。

「1期団の人、頼みます!」

「うむ」

『レイアシリーズ』のハンターは太刀を抜き、的確に黒いモンスターの前足を斬り、棘を砕く。

しかし、その棘は瞬時に再生する。

「1人じゃ……、危ない……。私も……」

意地でも立ち上がり、モンスターに人を寄せようとしなないミレイナ。

「何言ってるニヤ! そのまま寝てるんだニヤ!」

「マイラの言う通りだ。ここから出よう」

フレッドはミレイナの肩を持ち、立ち上がらせる。

「ダメ……。アイツを……」

「いい加減にしろよ!」

怒鳴るフレッド。

その声にミレイナは驚く。

「何がアンタをそこまでさせるんだ! そんなボロボロの体で武器も無い! そんな状態の

「アンタにできることなんてないんだよ！」

「……………」

ミレイナは何も言い返せない。

突如大きな揺れが起きる。

「な、なんだ!?!」

ゾラ・マグダラオスは急に立ち上がる。

その場の誰一人、立つことはできなくなり、ゾラ・マグダラオスの背から振り落とされる。

黒いモンスターは両翼を大きく広げると、1度吠え、どこかへ飛び立つて行った。

「クソツ！ミレイナさん！」

落ちていく4人。

フレッドはミレイナを咄嗟に抱きしめ、落下の衝撃から守る。

落ちている中でフレッドは見た。

ゾラ・マグダラオスが立ち上がり、障壁を押し潰すその瞬間を。

「ガッ!?!」

ミレイナを庇い、背から渓谷の谷に落ちたフレッド。

「うぐっ…………。ミレイナさん、大丈夫か?」



「ええ……。ありがとう、フレッドくん……」

フレッドの腕の中のミレイナはいつもの陽気で明るい姿はどこにもなく、長く浅い呼吸を苦しそうに続けていた。

「ヤバいな……。とにかくみんなの元へ行かないと。マイラも乗ってくれ」

フレッドはミレイナを右肩に担ぎ、マイラは左肩に乗る。

「貴殿、これは彼女のものか？」

『レイアシリーズ』のハンターが『召雷剣【麒麟帝】』を持ち、フレッドに見せる。

「ああ。悪いがそれを持ってくれないか？流石にもう持てそうにない」

「承知した」

フレッドは指笛を吹き、翼竜を呼ぶ。

「降ろして……。恥ずかしい……」

少しだけ身をよじらせるミレイナ。

自分の体の傷が開くよりも担がれている今の方が嫌なようだ。

「それだけ言えるならまだまだ元気だな。よし行こう」

「おそろしくして……」

フレッドはミレイナの話も聞かず、『アステラ』の人々がいる高台に翼竜に掴まり、向かうのだった。

「お姉様!?!」

高台に降り立ったフレッドたちの元へ真つ先に駆け寄ってきたのはシエリーだった。

その後ろにはクリスタルとソフィーの姿もあった。

「ああ……。なんて酷い……。」

シエリーは口を押さえ、呟く。

「フレッドくん……。降ろして……。」

「だけど……。」

「いいから……。」

「ああ……。」

フレッドはミレイナに言われるまま、ゆっくりと降ろす。

「……。おつ、とと……。」

地に足をつけるとミレイナはそのまま尻餅をつく。

「あ、はは……。体が言うこと聞かないわ……」

「お姉様！ 喋らないでください！ 傷も酷いんですから」

「ごめんね、シエリー。ソフィーちゃん、いる？」

「……はい」

名前を呼ばれたソフィーはゆっくりミレイナの前に出る。

「ごめんね、酷い事言つて」

「そんな……。私の力が足りないのがいけなくて……」

「そうですねーこの女にもつと腕があるならお姉様は怪我をせずにすんだんです！ 貴女がいればお姉様が傷つくだけなんですよー！」

シエリーはソフィーに怒りを向ける。

ソフィーもその事を十分に理解しているのか、その場で俯く。

「やめなさい、シエリー。それと、ね、ソフィーちゃん。ありがとう、私の言ったことをちゃんとやってくれて」

「……先生」

「先生、か……。私をまだそう呼んでくれるのね……。もつとカッコいいところ、見せたかったなあ……。これから私も頑張るから、ね……」

「先生!!」

「お姉様!!」

そう言うとミレイナは横に倒れ、意識を失った。

障壁は壊され、ゾラ・マグダオスは地面に潜り、その姿を消した。

捕獲作戦は失敗したのだった。

私、頑張ります！

ああ……。これは夢だ……。

何度も見たこの地獄のような景色。

何度味わっても薄れない絶望。

そして、その中心には片角の悪魔。ヤツは吠え、こちらに跳び掛かる。

それは夢の終わりの合図。

捕獲作戦が失敗して1週間が経つがミレイナはあれから目を覚まさない。

ソフィーはベッドに眠るミレイナが起きるのを隣で見つめ、じつ、と待っていた。

「起きないな」

一緒に見守るフレッドがソフィーに話しかける。

「うん……。私のせい、だよね……」

「それは違うって何度も言っただろ」

「だけど……」

拳を強く握るソフィー。

「私がおつと強かったら……。先生が任せるようなハンターだったら……」

「……今は考えても仕方ないさ。ミレイナさんのところに依頼は今日も来てるんだろ?」

「うん。沢山来てる。今はこんなだから1人でもできそうなものをシエリーが選んでくれて、私が入ってるよ……。それでもクリスさんとマイラさんに手伝って貰ってやっただけど……」

「そうか。俺は行くよ。1期団の人がそろそろ立つって言ってるから」

フレッドは偶然知り合った『ソードマスター』の異名を持つハンターと共に新大陸を歩き回っているらしい。

「兄さんも行くんだ……。寂しくなるなあ」

「今回はすぐ拠点に戻るって話だ。ソフィーなら大丈夫さ。起きたらミレイナさんによろしくって伝えてくれ」

「うん。伝えておくね」

フレッドは自分の荷物を持ち、ミレイナの部屋を後にした。

「ソフィーさん、ご飯ができたニヤ。後、シエリーさんが今日の依頼の話をするみたいニヤ」

マイラがやって来て、ソフィーを呼ぶ。

「あ、はい。今行きます」

ソフィーは立ち上がり、もう一度ミレイナを見つめる。

「私、頑張りますから」

ソフィーは歩き出し、マイラに着いて行く。

クリスタルとシエリーは既にテーブルを囲んで、マイラの作った料理を食べていた。

「ソフィー、これ。今日の依頼です」

シエリーは食べながら依頼書をソフィーに渡す。

ミレイナが眠っているこの1週間で2人にも少しばかりの進展があった。

作戦が終わってすぐは険悪な空気が漂っていたが、2人ともミレイナを慕っているし、年も近いためか、ふとしたきっかけで仲は良くなり、互いを呼び捨てで呼び合うようになった。

ソフィーは書類を受け取り、内容に目を通す。

「え？『陸珊瑚の台地』？」

依頼書に書かれている土地は未だに開拓が進んでいない『陸珊瑚の台地』

依頼内容はこの土地で遭難し、行方の掴めない3期団一行の搜索だ。

「これを私が?無理だよ……」

「またですか……。その依頼書、誰宛だと思います?」

「先生宛でしょ?」

当然の質問に首を傾げるソフィー。

「よく読んでください」

シエリーに言われるまま、再び書類に目を通す。

「これ、本当?」

「本当ですよ。最近の活躍を見込んで、総司令が直々に貴女へ依頼を出したんです」

ソフィーは初めて自分に依頼が来たこと、自分の努力が周りに評価されていたことに感激する。

「ソフィーはちゃんとやっています。貴女はすっかりハンターとして役目を果たせているんですよ」

シエリーはソフィーを見つめ、微笑む。

「自分に自信がなさすぎるのはたまにムカつきますが、ソフィーなりに自信をつけようと頑張っているのは私が一番分かっています。その証拠にリオレイアやアンジャンフ



は狩れるじゃないですか。だから」

「うん．．．！頑張るから．．．」

泣きそうな声のソフィー。

自分の頑張りを認めて貰えて感極まっている。

腕で零れそうな涙を拭い、マイラの料理を次々に平らげていく。

「ご馳走様でした！私、準備ができたらすぐに行くから！」

「あつ！ソフィー！」

ソフィーはそう言うと、自分の部屋に走って行った。

「他にも情報がありますのに．．．。あの子は．．．」

『アステラ』の北部に位置する『陸珊瑚の台地』

そこ一帯は色鮮やかな草木、そして大きな珊瑚に囲まれ、幻想的な光景を生み出している。

ここでもまた独自の生態系が作られており、一風変わったモンスターたちが数多く生息している。

「すいっ……」

その景色を翼竜に掴まり、空から見下ろすソフィー。

「あの下、何があるんだろう……」

無数に広がる珊瑚を囲うように広がる奈落。

底が見えないほど深いその高低差に身震いをする。

ソフィーはゆっくり珊瑚に降り立つ。

「新しい場所……。胸が高まる感じ。私、好きかも」

気持ちが高揚しているソフィー。

こんな浮かれた状態で敵しかいない、モンスターの領域に入る訳にはいかない。

彼女は頬を叩き、気を引き締める。

「強く叩きすぎた……。痛い……」

頬を撫でながらゆっくり歩いていくのだった。

未開の地というだけあって、『古代樹の森』や『大蟻塚の荒地』ほど道ができていない。草を踏み倒しながらソフィーは進む。

「失敗しちゃったなあ……。手がかりとか色々聞いてくるんだつた……。疲れた……。」  
3期団の搜索は定期的に行っているらしいが、かれこれ10年以上手がかりが掴めていないらしい。

ソフィーはその場に腰を下ろし、水筒を取り出し、水を飲みながら、携帯食料を1つ口にする。

「美味しくない……。先生もこれの味嫌いって言ってたし、分かるなあ。マイラさんのご飯が食べたいよ……。」

文句をいいながら1つ食べ切る。

味はイマイチだが、ソフィーの疲れをとり、少しの空腹を満たす。

「今まで兄さんや先生たちと狩りをこなしてたから本当に1人だけって初めてだなあ……。ちよつと寂しいかも……。」

弱気に呟くソフィー。

そんな彼女に近づいてくる影があった。

「え?」

キイヤアアアアアアアアア!!

青い鱗とベージュ色の皮。

大きな翼はためかせ、頭部の耳のような独特な長い角を持つ。

そのモンスターの特徴なのだろうか、翼を動かす度に周囲の空気を凍結させていた。

「飛竜種?!」

ソフィーは慌てて立ち上がり、『鉄刀【襖】』に手をかける。

「狩るしかない、よね・・・」

しかし、モンスターはソフィーのその後ろを見ている。

視線に気づいたソフィーは恐る恐る後ろを振り向く。

その姿は鬼。

獣の様に4足歩行でゆっくりと空に浮かぶ、青いモンスターへ近寄る。

赤い皮膚には筋肉の筋が荒々しく浮かび、1つの足に夥しい数の爪が生え揃っており、口の牙も荒々しくむき出しになっている。

オオオオオオオオオオオ!!

キイヤアアアアアアア!!

狼のような咆哮を上げる赤いモンスター。

それに感化され、青いモンスターも再び吠える。

「やばっ！逃げないと・・・」

1頭ならなんとか相手をできるかもしれない。

だが、名も知らぬモンスターが2頭現れたとなると話は別だ。

ソフィーはタイミミングを見計らい、離脱を決める。

「始まった！」

赤いモンスターは青いモンスターに飛びつき、組み合い始めた。

「そこのアンター！こっちへ来な！」

声のした方を振り向くソフィー。

そこには大きな荷物を背負い、ゴーグルもマスクをし、顔を隠している。

声から察するに初老の女性だろう。

「あ、貴女は・・・？」

「いいから！」

「は、はい！」

ソフィーは言われるまま言葉に従う。

「いい子だ。着いてきな！」

前を走る女性。

ソフィーもその背中に着いて行く。

「ここまで来れば大丈夫だ。この辺はヤツらのテリトリー外だからね」

肩で息をしながらゴーグルとマスクを外しながら女性は話す。

「あ、ありがとう、ごさいます・・・」

ソフィーも同じく息を切らしながら、礼を言う。

「いいのよ。アンタは1人かい?」

「はい・・・。3期団の搜索を頼まれて・・・」

ソフィーの言葉を聞くと女性は驚いた顔をした。

「まあまあ。運がいいわね。案内するわ」

「え? 3期団の方たちの行方を知ってるんですか?」

「まあね。ここからそれなりに歩くよ」

「は、はい!あの、貴女は?」

「ああ、私かい？ そうだね．．．。みんなはフィールドマスターと呼ぶわ」  
「フィールド、マスター？」

聞いたことがない言葉にソフィーは首を傾げる。

「この辺の生態の調査をずっとやっててね。気づいたらそう呼ばれるようになった。  
お婆ちゃんだったり、おばさんだったり、好きに呼んでいいさ」

「はあ．．．」

おどけて話すフィールドマスターと名乗った女性。

「ソフィーはよく分からない、と言いたげに首をかしげた。  
「とにかく行くよ。まだモンスターはうようよいるからね」

途中、赤い鱗と大きな目をしたシャムオスと呼ばれる小型モンスターと数匹遭遇したものの、あつさりと撃退したソフィー。

フィールドマスターに案内され、到着した場所にあったのは不時着した飛行船だった。

「これが?」

「そうさ。詳しい話は中に入ってからするわ」

彼女に続いて飛行船の中に入るソフィー。

そして、ソフィーは同時に疑問を持った。

なぜこんな施設があるのに、救援を呼ばなかったのか、と。

「さて、アンタ。聞きたいことが山ほどある、と言いたげな顔だね」

「分かりますか?」

あつさりと心境を読まれてしまったソフィーは驚く。

「そんなに顔、出てました?」

「まあね。それは3期団長に聞くといいさ」

自分からは語ろうとしないフィールドマスターに疑問を持ちながら、ソフィーは奥へと進んでいく。

研究所の上層階。



そこには竜神族の女性が独自のスペースを作り、くつろいでいた。

「あら。その子は？」

「この子は『アステラ』から来たのさ。アンタたちを探しにね」

「そうなの。それはご苦労ね。貴女、名前は？」

「そ、ソフィー、です・・・」

「そ。私は3期団の団長を務めているわ」

「あ、貴女が？」

若い見た目にソフィーは驚く。

しかし、彼女は竜神族だ。

長寿で聡明なのだから、当たり前のことだ。

「ええ。見ての通り、3期団は学者が中心だね。レイギエナが飛び回って帰りたくても帰れないうえに、使いも出せない。だから、ここをそのまま研究施設にしている訳」

「レイギエナ？」

聞いたことのないモンスターの名前にソフィーは首を傾げる。

「あの青い飛竜種さ。この『陸珊瑚の台地』の頂点に君臨するモンスター。またの名を風漂竜」

「そ。ちなみに、この空中研究施設を叩き落としたのも、レイギエナよ」

「そ、そうなんですわね……」

特に関心がなきげに3期団長は告げる。

すると、ソフィーは1つの疑問が浮かんだ。

あの青い飛竜種がレイギエナと分かったのはいい。そうになると、あの赤い狼のようなモンスターは一体何者なのだろうか。

「しばらくはまだここにいて研究を続けるつもりよ。それで、『アステラ』はどうしてるの?」

「あ、はい。つい先日、ゾラ・マグダラオスの捕獲作戦を決行しました。ですが、失敗に終わり、追跡中です」

ソフィーの説明に2人は顔をしかめる。

「そう。とうとう『アステラ』も動き出したのね。私たちも動き出すべきかね」

フィールドマスターはやはり、とでも言いたげに呟いた。

「そのようね。さしあたってはゾラ・マグダラオスの追跡とこの施設の復旧ね。今できることは……。そうね、貴女」

「は、はい!」

3期団長に指を刺され、ソフィーは肩を跳ねさせる。

「ハンターよね。この近くに生息しているモンスターを狩って来てほしいの」

「ま、まさか……。あのレイギエナとかいう飛竜を……。」  
ソフィーは怯えながら訊ねる。

そんな彼女を見て3期団長は愉快そうに笑う。

「惜しいわね。同じ飛竜だけど、レイギエナと違って可愛いわよ」

「可愛いんですか!?!」

ソフィーは目をキラキラさせて食いつく。

「あらあら。女の子ね」

フィールドマスターは優しく微笑む。

その事に気づき、はしやぎかけていたソフィーは恥ずかしくなり、顔を赤くして俯く。

「じゃあ、このモンスターの狩猟をお願いね」

3期団長が差し出した、モンスターの資料をソフィーは受け取り、内容を読む。

「パオ、ウルムー?」

資料に描かれたモンスターの絵を見る限り、白い体で首周りが鬣に覆われているようだ。

「可愛い……。早速行ってきますー!」

ソフィーは走り出し、研究施設を飛び出していった。

「若いわね」

「ええ。若いわ」

ソフィーが辿り着いたのはクラゲのような環境生物が浮かび、風変わりな樹木が生え揃っている。

そんな中、ソフィーはまたしても肩を落とすし、ドボドボ歩いていた。

「またやつちやった……。どこがパオウルムーのテリトリーか聞いてくるんだった……。飛竜種だし、飛び回るんだから足跡も見つけにくいのに……。可愛いんだろうなあ。躊躇っちゃいそう」

近くの木の下に腰を下ろし、その周辺を飛び回っている環境生物を見つめる。

「あのピンクの鳥、可愛いなー。捕まえちゃおうかな……。」

ソフィーはスリンガーに『捕獲用ネット』を装填し、撃ち出す。

網は鳥を覆い、一匹捕まえた。

「えへへ。可愛いなー」

捕まえた鳥を網から出し、掌に乗せる。

その鳥はドレスサンゴチヨウといい、この周辺に生息する生物だ。

ドレスサンゴチヨウは逃げる様子もなく、ソフィーを見つめている。

「あ、これ。食べる？」

ポーチから『携帯食料』を取り出し、軽く崩すと、ドレスサンゴチヨウを乗せている手に散りばめる。

ドレスサンゴチヨウは『携帯食料』をついばみ、食べ始める。

「ふっ。美味しい？…っ。美味しくないか…」

項垂れるソフィー。

すると、ドレスサンゴチヨウは突然飛び立って行った。

「あぁっ！…ん？」

そして、ソフィーは気づく。

自身を大きな影が覆い隠しているのを。

慌ててソフィーは上を見上げるが、その影の正体に首を傾げる。

「毛玉？」

空に浮いているのは白く、大きな毛玉。

その毛玉の中心からコウモリのような頭が生え、黒く、大きな瞳でソフィーを見つめ

る。

あれが浮空竜。パオウルムーだ。

「わっ! か、かわ!」

しかし、ソフィーの期待は裏切られる。

その瞳は釣り上がり、口は大きく広がり、顔の半分を占める。

「いけない!」

ソフィーは叫び、『鉄刀【襖】』を抜く。

「可愛くないなら容赦しないよ!」

ギャルルルルル!!

浮いたまま特徴的な咆哮をあげるパオウルムー。

今の位置からではソフィーの攻撃は当たらない。

彼女は近くの段差を駆け上り、空中のパオウルムーへ一太刀浴びせる。

しかし、その攻撃にパオウルムーは何の反応も示さない。

「やっぱり、先生と違って力もないし、武器も弱いから!」

確かにミレイナならば今の一撃でモンスターをよろめかせ、空中での攻防を展開させ

ていただろう。

「……気にしちゃダメ。先生と私は違うんだから!」

1度深呼吸をし、ソフィーは空中のパオウルムーを睨む。動いたのはパオウルムーだった。

白い翼を動かし、ソフィーの側面に回り込むと、茶色の尾を使い、真下の地面を薙ぎ払う。

そして、その尾は伸びた。

「あ、危なっ！」

咄嗟に転がり、ソフィーは尾を避ける。

パオウルムーの尾はゴムに似た性質を持ち、伸縮するのだ。

「ど、どうしよう・・・」

パオウルムーは空中からなかなか降りてこない。

位置次第では段差から飛び、攻撃を当てることができるとは思っていたが、それでも状況は進展しない。ソフィーは防戦一方となっていた。

「せめて、降りてさえくれれば・・・」

少し息を切らしながらパオウルムーを見るソフィー。

すると、パオウルムーは高度を下げ、地面に足を付ける。

特徴的だった首元の大きな毛はなくなり、従来の飛竜の姿になる。

「チャンス！」

ソフィーはすぐさま距離を詰め、太刀を振り下ろす。瞬く間に気刃大回転斬りまで走り、刃が白い光を纏う。

「まだまだ！」

気刃大回転斬りで納刀した武器をすぐさま抜刀し、移動斬りで位置をずらしながら、確実に錬気を溜めていく。

「よしっ。．．．!?!」

すると、パオウルムーは突如走り出す。

速度はさほどないものの、ソフィーより大きな体躯。

その体にぶつかり、ソフィーは吹き飛ばされる。

「いったたた．．．。思いつきりくらっちゃった．．．」

なんとか受け身をとり、すぐさま起き上がるソフィー。

「パオウルムーは?」

視界から消えた。パオウルムーを探し、付近を見渡す。

「あ、あれ?」

ソフィーが目にしたのは突進の勢いを殺しきれず、腹から地面に倒れ込むパオウルムーの姿。

あまり脚は発達していないようだ。



「なんか可愛い……。じゃなくて！そうと分かれれば！」

ソフィーは再び仕掛ける。

狙うのは両脚だ。

何度も気刃斬りを浴びせ、ついにパオウルムーは転倒する。

「よしっ！」

真つ赤になった『鉄刀【禊】』の刃を水平に構え、錬気を解放させながら突き刺す。

「はああああああああ!!」

大きく叫んだソフィーは、パオウルムーを踏み、高く跳ぶ。

「フツ!!」

兜割で真つ直ぐに振り下ろした剣先はパオウルムーを斬り裂く。

飛び散る返り血を気にすることもなく、攻撃の手を緩めず、パオウルムーを攻め立てる。

「ダメか！」

パオウルムーはゆっくり起き上がる。

ソフィーはトドメを刺すことはできなかつた。

ギャルルルルル!!

再び咆哮をあげたパオウルムー。

案の定、怒り状態になる。

モンスターが怒ると、いつもなら慌てたり、緊張で取り乱しているソフィーだが、今回は落ち着いていた。

ミレイナのいなかった狩りの時間がこういう時にソフィーを成長させていた。

ソフィーの狙いは変わらず脚。

それが分かっていたのか、パオウルムーは尾を横に振り回し、ソフィーが近づくのを妨げる。しかし、それは全く意味をなさず、あっさりソフィーの接近を許す。

ところが。

「わっ!?!」

謎の風がソフィーの動きを止めた。

動きが止まったソフィーを目標け、パオウルムーは突進する。

風圧により動くのが遅れたソフィーは慌てて避けようとするが、広げた翼にぶつかってしまふ。

ぶつかったとはいうが、肩を少し当てられた程度。

「まだやれるー!」

ソフィーは意気込み、転ぶパオウルムーに近づく。

すぐさまパオウルムーは起き上がると、再び謎の風がおこる。

「また!？」

風の軌道を感覚で追うソフィー。

その風はパオウルムーへ向かっていた。

「この風はなんだろう……」

再び風が舞う。

ソフィーはじつ、とパオウルムーを観察し、その謎を突き止めた。

「息を吸っているの?……なんて肺活量……」

そして、パオウルムーは再び首元を膨らませ、宙に浮く。

パオウルムーはその肺活量で空気を吸い、首にある空気袋を膨らませ、飛んでいたよ  
うだ。

「本当に独特な生態なんだ……」

感心するソフィーだが、そんな暇はない。

パオウルムーが空中にいる時点でこの狩りの流れは変わってしまったのだから。

宙を自由に動き、あらゆる方向からの攻撃をソフィーはギリギリで避け続ける。

「どうしよう……。こんな時、先生なら……」

避け続けながら頭をフル回転させ、今まで見てきたミレイナの行動を思い出す。

『いい? 飛行が得意なモンスターと戦う時はできるだけ相手の得意な空中に行かせない

ように戦うの』

『確かにそうですね。でも、どうやるんですか？飛ぶ前に狩るのなんて無理ですよ』  
『だから、コレを使うの。私の大好きな道具の1つよ』

「あつた！」

ソフィーはポーチからアイテムを取り出す。

それは『スリンガー閃光弾』だ。

迷いなくスリンガーに弾を装填し、パオウルムーの目の前に撃ち出した。

強烈な閃光がほとばしる。

自分で使ったのは初めてのソフィーは思わず目を瞑る。が、すぐに目を開き、パオウルムーが閃光に驚き、地面に墜落したのを確認する。

「やったー！これなら！」

目が見えなくなったことにより、上下の感覚を維持できなくなり、落ちたままもがくパオウルムー。

ソフィーは2度目の気刃兜割を頭部に入れ、再び太刀の連続攻撃を繰り出す。

それでもパオウルムーを討伐することはできず、モンスターは立ち上がる。

だが、パオウルムーも瀕死のようだ。

呼吸もゆっくりになり、白い毛皮は自身の血で赤く染まり始めていた。

「いける！もう一息！」

パオウルムーもやられる訳にはいかない、とでも言うように、ソフィーへ尾を振る。  
「もう分かつてるよ！」

ここで初めて見せる見切り斬り。

尾を的確に躲し、カウンターのように放つ薙ぎ払う。

その太刀筋は今日一番の冴えだった。

ギヤツ!?

攻撃中に反撃を貰うことなど考えていなかったのだろう。

パオウルムーは声をあげ、仰け反る。

「これでー！」

流れるように気刃大回転斬りに移行し、パオウルムーを斬り抜けるソフィー。

ギツ・・・、ギヤツ・・・。

パオウルムーが崩れ落ち、動かなくなる。

カチン、と気持ちのいい納刀の音を響かせ、ソフィーはうーん、と背伸びをする。

「できた！私にもできたよ！これも先生のお陰だよ！」

初めてのたった一人での狩猟を達成できた喜びにはしゃぐ。

「さっそく3期団とお婆ちゃんに報告しないと！」

気分のいいソフイーは走って研究施設まで帰還するのだった。

## ミレイナの過去

3期団の研究施設にて、3期団長はいつものようにくつろぎながら、書類に目を通していた。

「……うん。頼み事はこれで終わりね。ご苦労様」

3期団長は目の前に立っているソフィーに告げる。

「えつと……。じゃあ、私は？」

『『アステラ』』に戻っていいわよ。総司令にこっちは無事ってことと、こちらの方針を伝えて。内容はこれにまとめてある」

ソフィーは3期団長から紙が挟まれたファイルを受け取る。

「これで貴女への依頼は終わりよ。後はこちらで進めるわ」

「はい。こちらこそ、お世話になりました！」

ソフィーは元氣よく頭を下げる。

パオウルムー狩猟後、なんだかんだここで依頼ごとをこなしていると1週間以上の経っていた。

『陸珊瑚の台地』に生息するモンスターの殆どの狩猟を。たった1人で成功したソ

フイーの腕は格段に上がっていた。

「また何かあったらこつちからお願ひするから。次に来る時は貴女の先生も一緒にね」  
「はい！」

ソフイーはしばらくぶりに『アステラ』へ帰還するのだった。

「・・・緊張する・・・」

ソフイーが『アステラ』に帰還すると既に夜になっていた。

ミレイナのルームの入口に立っているソフイーはポツリ、と呟く。

ここに立ち止まって数分経つが、彼女はソワソワしたり、頻りに髪型を気にしたり、と落ち着きがない。

「よ、よし・・・！」

ソフイーは意気込み、扉に手をかけ、開ける。



「こ、こんばんはく．．．。戻りました」

顔を覗かせると部屋には誰もいない。

一応自由な出入りが認められているが、恐る恐る中に入る。

「もうみんな寝ちゃったのかな．．．」

静かな部屋を歩き、ソフィーは何となく庭へ向かう。

「あ．．．」

今夜は満月。

その月の白い光が庭を照らし、幻想的な景色を生み出す。その庭にはミレイナが居た。

ミレイナなのだが、寝巻きにしている長袖のシャツを着て、月明かりに照らされながら、美しく、静かに舞を踊っていた。

「先生．．．？起きたんだ．．．」

無事、目覚めたミレイナに安堵すると同時にソフィーは見たことのない舞を踊るミレイナの姿に見惚れ、見つめ続ける。

「あ．．．？」

ミレイナはソフィーに気づいた。

「見られちゃったわね」

ミレイナは照れくさそうに言う。

「あ、いえ。覗き見をしていた訳じゃなくて……」

慌てて弁解するソフィーだが、ミレイナは微笑む。

「いいのよ。元々人に見せるため、神様に見せるための儀式の舞なんだから」  
月を見つめながらミレイナは語る。

その姿は昔を懐かしむような寂しさがあつた。

「あの一！」

「何？」

「教えてくれませんか？先生の昔のことと、故郷のことを。先生がああ黒いモンスターに執着する理由を」

「……」

ミレイナはしばらく考える。

「……そうね。少しだけ」

「ありがとうございます」

ミレイナは庭のベンチに腰掛け、その隣にソフィーを座るように促す。

ソフィーが腰掛けると、ミレイナはふーっ、と息を吐く。

「何から話そうかしら。……まずは私の故郷よね。私の故郷はユクモ村から少し離れた

小さな村。そこはユクモの地を統べる古龍、アマツマガツチを祀る村だったの」

「アマツマガツチ……。聞いたことがあります。嵐龍と呼ばれて、現れると嵐を呼ぶ大型の古龍ですよね」

ソフィーは以前読んだことのある文献の一文を口にします。

「ええ。私の村では年に数回、アマツマガツチが現れないことを願いつつ、敬意を示すための儀式をしていたわ。さつき私が踊つてたのはその儀式の舞よ」

「じゃあ、先生つて巫女、なんですか？」

「そんな立派なものじゃないわよ。私なんてたまたまその家に産まれたただけだから。……まあ、村では『舞姫』なんて呼ばれててね。こう見えて箱入り娘だったのよ？」

「……あんまり想像できないです」

普段の好戦的で酒ばかり飲むミレイナしか知らないソフィーは苦笑いを浮かべる。

「それもそうよね。……小さい頃は外なんて知らないし、人なんてあの村の人しか知らないで、適当に結婚して、子供を産んで死んでいく、なんて思ってた。でも、『舞姫』は同時にハンターをやらなければならぬ。現れ、災禍を起こすアマツマガツチを討伐するため。それを知った私は飛び跳ねて喜んだわ」

「どうしてですか？」

「ハンターになれば外に出れる。見たことない場所、知らない人、モンスターに沢山会える、そう思ったの。それが14歳の時だったわ」

「そんな年でハンターになったんですか？」

あまりにも若い年齢にソフィーは驚く。

「ええ。私がやりたい、って言ったのもあるわ。その時にマイラと出会ったの。あの子はずっと私のパートナーなの」

「そうなんです。先生はずっとハンターをやってたんだ」

ソフィーは感慨深そうに呟く。

「そうね。もうこの生き方しかできないわね。それにハンターをやるのは楽しいから」

ミレイナは笑う。

「このハンターという職業に満足しきっているようだ。」

「じゃあ、あの黒いモンスターは……」

ソフィーはもう一つの聞きたいことをミレイナに質問する。

その瞬間、ミレイナの表情は暗くなる。

「あいつはエネルギーというらしいわ」

「らしい……」

珍しく歯切れの悪い言い方をするミレイナ。

ソフィーもそれを不思議に思い、首を傾げた。

「私もあいつの事はほとんど知らないわ。ただ私が起きてすぐにシェリーがああのモンスタの名前を覚えてくれたわ。この『アステラ』の古い書庫にあいつの記録が少しだけあったらしくて。それで調べて来てくれたのよ」

「流石シェリー。普段はあんななのに、仕事は本当に早い・・・」

「ええ。頼もしいわ。それで、あのネルギガンテについて私が知ってること。あいつは古龍を喰うのよ」

「え・・・？」

ソフィーはネルギガンテの生態に面をくらい、気の抜けた声を漏らす。

確かにモンスター同士の捕食の仕合はある。

だが、古龍が古龍を喰うという事例はない。

「見たのよ。昔、アマツマガツチが現れて、討伐に向かった時、ネルギガンテがアマツマガツチを捕食しているところを・・・。そして・・・」

ミレイナは声を震わせ、腕を握りしめる。

「いいえ。何でもないわ・・・」

ミレイナはそこで言葉を切った。

「あのネルギガンテもゾラ・マグダラオスを捕食に来たのよ・・・。さ、中に入り

ましよう。夜は冷えるわ」

「……はい」

立ち上がり、部屋に入るミレイナの後ろを着いて行くソフィー。

「コーヒーでも入れましょうか……。ソフィーちゃんは飲める？」

「え、えつと……。苦手です……」

申し訳なさそうに告げるソフィーへミレイナは優しく微笑む。

「だったらソフィーちゃんに紅茶にしましょうか。私が眠ってる間の話を教えて？」

「はい！」

ミレイナはキッチンへ向かう。

「あ、先生！」

「何かしら？」

ミレイナは立ち止まってソフィーへ振り向く。

「ただいま戻りました！」

忘れていた帰ってきた時の挨拶。それをミレイナに告げる。

「おかえり、ソフィーちゃん」

「へへ。『陸珊瑚の台地』か。綺麗な所のようね」

「それはもうー！」

この一週間、『アステラ』に何があったのか。ソフィー自身は何をしていたのかをミレイナに説明する。

時々はいやいで話すソフィーの姿にミレイナは微笑みながらコーヒーをすすする。

「先生！」

不意に呼ばれ、肩を跳ねさせるミレイナ。そして、ソフィーは頬を膨らませていた。

「もう、聞いてましたか!?!」

「え、ええ……」

ミレイナとしては起きたら少し頼もしく成長していた相棒の姿に驚き、ぼーっ、としていた。

「それでですね！そのツイツイヤツクなんですけど」

饒舌に話すソフィー。そして、ミレイナは終わりそうにない話を楽しむことにした。

「では、昨日の朝起きたばかりのお姉様と帰ってきたばかりのソフィーに今の『アステラ』の動きを説明します」

いつものように全員で机を囲いながら朝食をとるミレイナたち。

シエリーは分厚い資料に目を通しながら現在の報告を始めた。

「まず『アステラ』は次の捕獲作戦に向け、装備と施設、及び迎撃ポイントの見直しを進めています。未だにゾラ・マグダラオスの足取りは掴めておらず、難航とのことです。……ソフィー、聞いてるんですか？」

「あ、うん」

注意を受けたソフィーは必死に料理を口に運んでいた。



「・・・貴女、そんなに食い意地のある人でしたっけ？」

「ち、違うの！久しぶりに食べるマイラさんの料理が美味しくて。つい・・・」  
「作った身としては嬉しい限りニヤ！」

「はあ・・・。程々に・・・。そして、お姉様立ちなんですけど、『陸珊瑚の台地』にある3期団の研究施設に向かってください」

「どうして？」

「それが・・・」

ミレイナの質問にシエリーは曖昧に返事をする。

「詳細が書かれていなくて・・・。ただ、総司令からの司令のようです」

「はあ・・・。だろうと思っただわ。仕方ない、行くわよ」

ため息をつきながらミレイナは立ち上がる。

それに合わせ、クリスタルとマイラも自分たちの装備を取りに行く。

ミレイナは自分の装備、『キリンXシリーズ』に身を包む。

「うん。綺麗になってる」

眠っている間に気を利かせて、修理とクリーニングに出してくれたシエリーに感謝しながら、武器を背負い、自室から再び広間に戻る。

ソフィーはと言うと、まだ食べていた。

「ソフィーちゃん。置いていくわよー」

「ま、まっへふははい！」

慌ただしく飲み込み、ソフィーはミレイナへついて行くのだった。

ミレイナは初めて降り立つ、『陸珊瑚の台地』に光景に目を丸くしていた。

色鮮やかな珊瑚礁にまるで海の中にいると錯覚してしまった。

「本当に綺麗ね」

「そうなんです！でも、昨日の今日で来るとは……」

「ハンターなんだからそんなものよ。さ、研究施設？つてところに行くわよ。案内お願

いしていい？」

「はい！行きますよー！」

自信満々に歩いていくソフィー。

その後ろ姿を見てクリスタルは眩く。

「なんか、見違えたニヤ。この1週間、余程いい経験をしたようニヤ」

「確かに。ワタシたちが居てもどこか不安そうにしてからニヤ」

マイラも同意見のようだ。

「昨日の夜にたくさん話を聞いたわ。ま、たまには倒れるのも悪くないわね」

「それは困るニヤー！」

声を揃えて叫ぶ2人。

「わっ。何よ、2人して」

「なんとかかなりはしたけど、ソフィーと

シエリーの仲は最悪だったニヤー！」

「あの空間は耐えられるものじゃなかったニヤ・・・」

震えながら話す2人。

「・・・よく分からないけど、仲良くなつたんならいいじゃない・・・」

「ご主人様は寝てたからそんなことが言えるんだニヤ・・・」

「ま、なんでもいいわ。ほら、ソフィーちゃんに置いてかれるわよ」

前に行くソフィーを追いかけながら、ミレイナはネルギガンの『痕跡』を取り出し、

導虫の反応を見る。

「一度も足を運んだことのない土地ならばと思ったが、導虫は何のアクションも起こさない。」

（あの時……。ゾラ・マグダラオスを捕食に来たネルギガンテに導虫は反応しなかった……。つまり、あいつは私が探している奴とは違う……）

「ご主人様？」

マイラがミレイナの顔を覗き込む。

「なんでもないわ」

余計なことは考えない、とミレイナは頬を叩くのだった。

## 死の大地

ミレイナたちの目の前に広がるのは枯れ、飢え、荒廃した大地。地面の至る所に白骨化したモンスターの骸が散乱していた。

「ここに『瘴気の谷』か……」

ミレイナは呟く。

「はい。『陸珊瑚の台地』の真下に位置するのにこんなに違うんですね」

新調した『ウルムーシリーズ』を装備したソファイは遥か上を見ながら呟く。なぜ彼女たちがここに居るかという、3期団長からの提案からだ。

この『瘴気の谷』の深層部にゾラ・マグダラオスの痕跡があるかもしれない、ということを言われ、ここに降り立ったのだ。

「それにしてもあのおばあさん、元気ね。『陸珊瑚の台地』からここまで続く道って結構険しかったわよ。なのにスイスイ進んで行って」

ミレイナの言うおばあさんとはフィールドマスターのことだ。

ここまでミレイナたちを案内したのも彼女で、ここから先はいつ狩猟が始まるかは分からない。ハンターではないフィールドマスターは研究施設に戻って行った。

「おばあちゃんはこのことをもう何十年も調査してるみたいですよ。それでも新発見ばかりで飽きない、って言っていました」

「確かにね。新大陸に生息していないモンスターの死骸も沢山ある」

ミレイナは付近を見渡し、狩猟経験のあるモンスターの死骸を見つげながら呟く。

「あれ、ダラ・アマデユラじゃないのかニヤ？」

クリスタルが指さした方向には山を飲み込みそうなほど大きな蛇の頭。

シナト村に伝わる御伽噺に出てくる古龍、ダラ・アマデユラ。その骸がこの『瘴気の谷』を取り囲んでいた。

「本当ね、初めて見たわ。白骨化しているとはいえ、幻に近いの古龍を見れるなんて運がいいわ。もしかしたらこの谷は大昔にあのダラ・アマデユラが掘ったのかもね」

「まさかニヤ」

「ご主人様の言うこともありえるかもしれないニヤ」

クリスタルはミレイナの言葉を否定したが、マイラは賛同する。

「御伽噺にダラ・アマデユラが通ったあとには谷が生まれるっていう一文があるニヤ。もしかしたらここはその御伽噺を体現しているのかもしれないニヤ」

「ほええ。マイラさんは物知りですね」

感心するソフィーに対してマイラは胸をはる。

「当然ニヤ！色んな場所でモンスターを狩って来たニヤ！だからいろんな村の伝記を読んできたのニヤ。ご主人様もワタシと同じくらい知識があるのニヤ。クリスはもう少し勉強した方がいいニヤ」

意地悪な笑みを浮かべながらマイラはクリスを見る。

「ほつとくニヤ」

「ほら、おしゃべりはそこまでにして行くわよ。3期団長は深層部が臭うって言うけど、一応上層部も見えていくわよ」

ミレイナの声に3人は返事をし、上層部を目指し、歩き始めた。

「待つて……。これは……」

道のように削られた溝を進んでいた4人だが、ミレイナは何かを見つけ、全員を止める。

「何かあったんですか?」

「ええ。これよ」

ミレイナは何かへ歩み寄り、しゃがむ。

「・・・?これは?」

ソファイが見たのは無数に丸く抉られた地面。

1つ1つの穴は小さいが、それがあちらこちらに無数に存在している。

すると、ミレイナとソファイの虫籠から導虫が緑の光を纏いながら飛び出す。

「モンスターの『痕跡』ニヤ」

クリスタルが呟く。

「こんな『痕跡』を残すモンスター・・・。一体どんなやつなんだろ・・・」

「分からないわ。とにかく気をつけましょう」

ミレイナは立ち上がり、3人へ注意するように告げる。

「ニヤ?」

マイラがヒゲを震わせながら不思議な声をあげる。

「マイラ?どうかした?」

「ニヤンか地面が揺れてるようニヤ・・・」

「揺れてる?」



ミレイナも周囲に目を運ぶが特におかしなものは見当たらない。

「何も無いわよ。勘違いじゃないの？」

「で、でも！確かに揺れたんだニヤ！」

「え〜？」

珍しく食い下がるマイラを不思議そうに見つめるミレイナ。

「んー。クリスとソフイーちゃんは何か感じた？」

「いえ……。私は特に」

「ボクも同じニヤ」

マイラ以外は誰も揺れを感じていない。

「ほら。やつぱり勘違いよ。……。ん？今、揺れた？」

「ほら！やつぱりニヤ！」

ミレイナも一瞬だが地面が揺れるのを感じた。

「先生もですか？」

「……。気のせいかしら……。いや、強くなってる」

「あ、私も今感じました」

おかしな揺れに4人は周囲の警戒を始める。

「っ！ソフイーちゃん！」



ソフィーは叩かれた所を両手で押さえ、少し瞳に涙を貯めながら、ミレイナを見つめる。

「な、何するんですか〜！」

「いきなり変なことという方が悪いのよ」

そう言ったミレイナはソサクサと歩いていく。

「あれ、照れてるニヤ」

「間違いないニヤ」

クリスタルとマイラがヒソヒソと話している。

「うるさい！ほら、行くわよ！全く、モンスターに襲われかけたのに気楽な・・・」

ミレイナは文句を言いながら先に行く。その後ろを3人はついて行くのだった。

通り過ぎて行ったモンスターの『痕跡』追いながら道を進んで行き、道の終わりは

ちよつとした高台になっていた。

下は少し開けているが、岩などによって見た目以上に狭く感じる。

「あれかしら……。見た目はウラガンキンのようね」

ミレイナたちは岩に隠れながら、モンスターを観察する。

モンスターは黒い皮膚の上に多くの骨を纏っていた。

「あれはラドバルキンですよ。研究施設の資料で読みました」

「なるほどね。よし」

ミレイナは立ち上がる。

「え、えつと……。特徴はですね……。」

「ま、いいりハビリになりそうね。行くわよー」

「あつー！先生!？」

ソフィーの説明もろくに聞かずにミレイナは飛び出して行った。

「やれやれニャ……。」

クリスタルとマイラもミレイナに続いて降りていく。

「ちよつ!?!お2人共!?!」

「ソフィーもいい加減なれるニャ」

そうクリスタルに言われ、結局残されたのはソフィーだけだった。

「もう……、なんなの……?」

諦めつつ、ソフィーも続いて降りていくのだった。

「いい? まだ気づかれてないわ。私が懐に潜って一撃入れるから、クリスは虫籠を置いて、あいつが吼えた瞬間に壊して動きを止めて」

「分かったニヤ」

「マイラは……、そうね適当によろしく」

「お任せニヤ」

降りたミレイナたちはラドバルキンの背後に回り、初動の段取りを決める。

「ソフィーさんはどうするニヤ?」

マイラの言葉でミレイナはソフィーの方を見る。

ソフィーは少し離れた岩の裏にいる。

「……アドリブで合わせてくれるはずよ。仕掛けるわ」

ミレイナは身を屈めたまま走り、ラドバルキンの懐に潜る。

『召雷剣【麒麟帝】』を抜刀と同時に溜め始め、一気に振り下ろす。

ゴアア!!

振り下ろした剣先はラドバルキンの柔らかい腹を切り裂く。

ラドバルキンはその場から動き、ミレイナを見据え、咆哮の体勢に入る。

「クリス！」

ミレイナの声と同時に眩い閃光が走る。

閃光を直視したラドバルキンは驚き、大きく仰け反る。

「これは、ドンピシャでしょう!!」

クリスタルを信用し、既に溜めモーションに入っていたミレイナ。

溜めた力を一気に解放させ、真・溜め斬りをラドバルキンの頭部に直撃させる。

ミレイナはその場から真後ろへローリングした。

「先生！合ませます！」

すかさずソフィーがラドバルキンの正面に立ち、『鉄刀【禊】』を黒い皮膚へ浴びせる。

ソフィーが相手をしている間にミレイナは納刀し、ラドバルキンの側面へ回り込み、

脚に向け、抜刀切りを放った。

しかし。

「・・・っ！かった・・・」

ミレイナの攻撃は両足の角のような骨に弾かれてしまう。

1度ミレイナは距離を取り、鬼刃大回転斬りを放った後の無防備なソフィーのカバーにはいる。

納刀したソフィーはすぐさま抜刀縦斬りのモーションに入る。それに合わせてミレイナも縦斬りを繰り返して、2本の刀の刃がラドバルキンの腹を切り裂く。

ゴガアアアアアアアア!!

不意の咆哮。その轟音に2人は耳を塞ぐ。

ラドバルキンは咆哮をあげた後に顔面より出っ張って、発達している顎を2度地面に叩きつけた。

「あつぶな・・・」

顎を叩きつけたことにより飛び散る小石や土を浴びながら、ソフィーは顎が自分たちに向かって来なかったことに安堵する。

ラドバルキンはミレイナたちではなく、後方でブーメランやオトモ用の手押し車型のスリンガーで後方のマイラとクリスタルへ向かって行った。

「確かに危なかったかも・・・。次は後ろにいたマイラたちを狙い始めたわ。マイラたちの攻撃も聞いてるみたいだし、私たちも混ざるわよ」

ソフィーの言葉に同意しながら、ミレイナは『怪力の種』を1つかじる。

「そんな遊びみたいに言ってる場合ですか!？」

「言ったでしょう? 私はこの生き方しかできない。それにこれが楽しい。だったら全力で生きて死ぬまで楽しむだけよ」

ラドバルキンに向かって走りながらミレイナは言う。

「先生は凄いですね……」

「何か言った?」

モンスターの叫びや地鳴りでソフィーの声はかき消されてしまう。

「なんでもありません! 私もそんなふうになって見せます!」

「ふふっ。頼もしいわ」

2人がクリスタルとマイラと合流しようとした瞬間、ラドバルキンは反動を付けるような動きを見せる。

「みんな、横に逃げなさい!」

ミレイナは危険を察知し、咄嗟に叫ぶ。

ラドバルキンは体をアルマジロのように丸め、ミレイナたちを目掛け、転がり始める。

ミレイナは真横に倒れ込むように大きく飛び、緊急回避する。

すぐさま起き上がり、ソフィーたちの安否を心配する。



「みんな、無事!？」

「はいっ!」

ソフィーは問題ないようだ。

「ギリギリだったニャ……。ご主人!」

突然クリスタルは大声をあげる。

「え?…。嘘っ!」

ラドバルキンは体中のまとった骨を上手く使い、回転を途中で止め、ミレイナに向かって方向転換を行い、再び転がり始めた。

「いい度胸じゃない……。」

ミレイナは避けようとしないう。そればかりか、『召雷剣【麒麟帝】』を抜刀し、力を溜め始める。

「ちよっ!?! 先生!!」

「流石に無謀ニャ!」

「ご主人様逃げるニャ!」

全員の叫び声。今回ばかりはクリスタルとマイラもミレイナを止めよう、と声をあげる。そして、ミレイナとラドバルキンの距離は0になる。

「でえええええやああああああああああああああああああ!!」

ミレイナの振り下ろした刃はラドバルキンの頭を正確に捉え、荒々しい稲妻を撒き散らした。

ゴガア!!?

ラドバルキンが頭部に纏っていた骨は碎け散り、そのままバランスを崩し、ミレイナの横を通り過ぎて盛大に倒れる。

「め、めちやくちやだよお・・・」

ソフィーはあまりの光景に口を開けたまま立ち尽くす。オトモ2人も同じ反応をしている。

「何してるの!?!今がチャンスなのよー」

既にミレイナはラドバルキンに向かい、頭へ真・溜め斬りを叩きつけようとしている真っ最中だった。

「は、はいー!」

困惑しながらもソフィーも錬気を溜め、鬼刃兜割りを尾へ浴びせた。クリスタルは脚へ打撃を、マイラは笛を吹いてサポートに回る。

やがてラドバルキンはゆっくりと立ち上がり、大きく息を吸い込む。

「まじか・・・、ハッ(っもっ)」

ミレイナは見た目がウラガンキンと姿と攻撃手段が似ていることから予感はしていた。

そのラドバルキンの腹から白いガスが微かに溢れ出す。

「離れて！」

「え？」

その瞬間、睡眠性のガスが大量に噴出された。

ミレイナ、クリスタル、マイラは逃げきれたが、反応の遅れたソフィーはガスを大量に吸い込んでしまう。

「あ……、あれ……？」

ソフィーは武器を落とし、目を擦る。

「なんか……、ねむ……」

とさっ、と倒れ眠り込んでしまったソフィー。

「最悪ね」

ミレイナは歯ぎしりをしながらラドバルキンを睨む。

「『閃光弾』で目を眩ませたうちに離脱はどうかニヤ……？」

マイラが呟く。

「ダメよ。もしアイツが暴れるようなやつだったソフィーちゃんはペシヤンコよ」

「うう……。その通りニャ……。」

「とにかく、私たちに注意を向けなと……。!」

ラドバルキンの目の前に飛び込もうとしたミレイナだが、ラドバルキンはミレイナたちとソフィーとはまるで違う方向へ転がっていった。

「逃げたのかしら……。?」

ミレイナは1度息を吐き、眠っているソフィーへよる。

「ソフィーちゃん、起きなさい。ソフィーちゃん」

頬を何度か叩くがソフィーは起きない。

「えへ……。プーギー……。」

「……。これはダメね。幸い、ベースキャンプも近いし、行きましょう」

ミレイナはソフィーを担ぎ、ベースキャンプに向かい始めた。

「むへへ……。せんせー、これ、おいひ……。」

「ハイハイ。分かったわよ」

ミレイナはソフィーの寝言に相槌をうつ。

「ご主人様、前より雰囲気が柔らかくなったニャ」

「確かにニャ。これもソフィーのおかげニャ」

「2人とも、何してるの?」

ミレイナに呼ばれ、オトモ2人も後ろをついて行くのだった。

## 赤き狼

「うん……。ここは……。あつ！ラドバルキンは!?」

ベースキャンプに設営されたテントの中にあるベッドで眠っていたソフィーは狩猟中だったことを思い出し、飛び起きる。

「起きた？ラドバルキンは逃げていったわ」

同じくテント内で剥ぎ取りナイフを砥石で磨きながらコーヒーを飲んでいたミレイナがラドバルキンの行方を教える。

「そ、そうなんですか……。でもなんでキャンプに……」

「アイツの睡眠ガスを吸っちゃったのよ。少し迂闊だったわ。私も、ソフィーちゃんも」  
「……すみません」

ソフィーが謝罪するとミレイナは立ち上がり、『召雷剣【麒麟帝】』を担ぐ。

「動ける？ラドバルキンも相当弱っているし、さつさと片付けてゾラ・マグダラオスの痕跡を探しましょう」

「大丈夫です！」

ソフィーは元気よく返事をし、ミレイナに続いてテントから出ていく。テントの外に

はクリスタルとマイラがそれぞれ装備の確認や腹ごしらえをしていた。

「さて、追いかけてみましょうか。導虫もしつかり匂いを覚えてくれてるようだしね」

ミレイナの虫籠から導虫が帯となり、ラドバルキンの元へ誘導を開始する。

「よしー行きましょうー！」

頬を叩き、一喝いれたソフィーは3人の前に出て導虫を追いかけ始めた。

4人が導虫を頼りに辿り着いた場所はかなりの高所で、割れた岩の足場を植物がネットのように貼り巡っている。一部の場所の岩は完全に穴が開き、植物のツタと葉だけで足場になっている。

そのツタの上にラドバルキンは佇んでいた。

「こんなところで戦いたくはないわね……。ソフィーちゃんならどうする?」

「え!?!...そうですね。この辺りには『はじけクルミ』が多く実って落ちているので、

それを当てておびき出す……。というのはどうでしょう」

ミレイナは彼女の回答に笑顔を浮かべる。

「採用よ。じゃあ、ちよつと行つてくるわ」

ミレイナは足元に転がっていた『はじけクルミ』の実を拾い上げ、身を低くしながらラドバルキンへゆつくり近寄っていく。

(もう少し詰めたいわね)

スリンガーがいくら投擲機であつたとしても、その飛距離は大したモノではない。確実に弾が当たる距離まで詰め寄っていく。

ツタの足場に乘つたミレイナは足場が頑丈か確かめるために、なんだか足踏みをする。

(うん。これなら撃つた後走れる)

左腕のスリンガーに『はじけクルミ』を装填し、狙いを定める。

スリンガーの弦を絞つた瞬間だった。ミレイナとラドバルキンの視線が交差した。

「まずっ！」

ミレイナは慌てて『はじけクルミ』を放つ。全く同タイミングでラドバルキンも咆哮を上げ、その声にミレイナは耳を抑え、しゃがみこんでしまう。

そして、『はじけクルミ』はラドバルキンの頭上を越えていった。



「先生!？」

ソフィーが岩陰から飛び出し、ミレイナに走り寄る。

「ワタシたちも!」

「分かつてるニャー!」

ソフィーに続いてオトモ2人も飛び出した。

(これを……!)

ソフィーはポーチから『スリンガー閃光弾』を取り出し、すぐさま撃ち出す。

ゴオツ!?

眩い閃光はラドバルキンの視力を一時的に奪い、大きく仰け反る。

「先生、今のうちに!」

「ありがとう!」

ミレイナはラドバルキンから距離を取るためにソフィーたちの元へ走る、のだが……。

「あつ……。ふにやつ!」

ツタに足を絡ませ、ビタン!と顔から転んでしまった。

「何やつてるニャー!ご主人!」

「なんでいつもこういう時ばかり!そういうドジっ子アピールはいらぬニャー!」

クリスタルとマイラが目を釣り上がらせ叫ぶ。

ソフィーはと言うと目を丸くして立ち尽くしていた。

「う、うるさいわね……」

ミレイナが立ち上がった瞬間だった。

ラドバルキンはその大きな顎をツタの足場に強く打ち付けた。

「きやあ!？」

顎を打ち付けた衝撃でツタは波打ち、ミレイナは再び倒れてしまう。

「こうなつたら……」

ソフィーはポーチから別のスリンガー弾を取り出し、ラドバルキンに撃ち込んだ。

するとラドバルキンはミレイナたちとは違う場所へ向かって行った。

「良かった……。『こやし弾』が早く効いてくれて……」

ソフィーが撃つたのは『スリンガーこやし弾』だ。モンスターの糞を使用し、作られた弾は着弾したモンスターを追い払う効果がある。その効果のおかげでラドバルキンは立ち去ったのだ。

「た、助かったわ……。流石にもうダメかと思ってたから」

ソフィーたちの元に戻ったミレイナは覇気のない声でお礼を告げた。

「いいえ。いつもは私が助けてもらってばかりだったので。少しは恩返しできたかな……」

「それはもう。私ももう少し気を引き締めないと。さあ、追いましょう」

ラドバルキンの向かった方へ進んで行くとラドバルキンともう一つ違うモンスターの鳴き声が響いた。

「狼みたいな声……。まさか!？」

ソフィーが駆け出す。それを追うように他の3人も走る。

「やっぱり!」

そこにいたのはラドバルキンと赤い狼のようなモンスターだった。

「異形ね……。あのモンスターは？」

赤いモンスターを見たミレイナはソフィーに尋ねる。

「オドガロンです。この『瘴気の谷』の生態系の頂点に立つモンスターなんです」

「そう……。厄介なのが現れたわね」

「……はい。あつー！」

ソフィーが驚いた声を上げると、ラドバルキンは体を横にし、駒のように回転し、オドガロンへ突っ込んで行った。

オドガロンは軽やかな身のこなしであっさり避け、体勢を整えたラドバルキンの背中に飛び乗った。

オオオオオオオオオオオン!!

片手で10はありそうな鋭い爪でラドバルキンの背中を守る骨を砕き、露わになった肉を荒々しい牙で貪り食らう。

ゴアアアアアアアアア!!?

ラドバルキンは倒れ、オドガロンは倒れたラドバルキンへゆっくり近寄る。

「うっ!!」

「まあ、そうなるわよね」

オドガロンはラドバルキンの喉元を抉り、捕食し始めた。その光景にソフィーは目を

逸らし、ミレイナは当たり前のように見つめる。

「もう一度キャンプに戻りましょう。流石に無策でどうにかなる相手じゃないわ」

「は、はい……」

気づかれないようにその場を後にする4人だった。

「さて、アイツの、オドガロンをどうするかだけど。ソフィーちゃんの知ってるアイツの情報を見せて」

ベースキャンプに戻ったミレイナたちは作戦会議を始めた。

イスに腰掛けたミレイナは足を組み、自分のハンターノートを広げ、ペンを走らせている。

「はい。先程も言った通り、オドガロンはこの『瘴気の谷』の生態系のトップに君臨する

存在です。外観から見ても分かるように、全身の筋肉が発達しており、素早い動きで翻弄してくるのは容易に想像できます」

「確かに。あのラドバルキンの骨も噛み砕いたり、切り裂いていた。迂闊に飛び込めないわね」

ミレイナは難しい顔をして悩む。

「他に生態は？」

「そうですね……。そもそも『瘴気の谷』の深層部付近は調査が進んでいないのでこれと言ったものは……。ただ餌を求めて上層の『陸珊瑚の台地』まで姿を現す程度しか」

「役に立つ情報は無し、か……」

「ミレイナはため息をつく。

「仕方ないわ。いざとなったら……」

「ミレイナが意味深に呟いた『いざ』という言葉にソフィーは首を傾げる。

「なんでもないわ。できればアイツ以外に使いたくないからこれで何とかするわ」

「ミレイナはキャンプに立てかけられた自分の愛刀たちを見つめながら言う。

「とにかく情報が足りないわ。私があるとか抑えるからソフィーちゃんはおどガロンの行動をよく観察して」

「分かりましたけど、1人で大丈夫ですか？」

「なんて事ないわ。そういうことは何度も経験してきたから。今回も同じよ」

ミレイナは立ち上がり、大剣『ハイジークムント』を手に取る。

「さあ、行きましよう」

最後にオドガロンを見かけた場所に向かい、ミレイナはヤツの『痕跡』を収集する。

「よし、これで追えるわ」

足跡や爪痕に残ったオドガロンの匂いなどを導虫に記憶させていくと導虫は虫籠から飛び出し、オドガロンの元へ誘導を開始した。

4人は導虫の光を追いかけ、谷の深部へ向かう。

「……これは？」

そこは黄色いガスのようなものが蔓延する場所だった。見るからに人体に有毒なのは明らかだ。

「これが瘴気ですね。吸いすぎると体を内部から蝕みたいですが、少量なら問題ないようです。だけど、厄介ですね」

ソフィーは付近を見渡し、あるものを見つけるとそこへ向かう。そして屈み、あるものを拾う。

「これで瘴気を払えます」

ソフィーは拾ったものをスリンガーに装填し、地面に向けて撃ち出す。

地面に撃ち出したものは着弾すると同時にその場で燃え始め、瘴気を払う。

「へえ。そんなものもあるのね」

ミレイナは感心したように笑う。

ソフィーが撃つたのは『火打石』と呼ばれる衝撃を受けると発火する石だ。これで瘴気を気にせずに進むことができる。

「はい。行きましょう」

瘴気を払いながら進む4人。

それを人では登ることのできない石の壁の穴蔵から見つめる鋭い眼光があった。



## 赤き獣は鮮血と舞う（前編）

瘴気を払いながら最下層へ進んでいくと瘴気が漂っていない鍾乳洞のような場所に辿り着いた4人。蒼く光る水が幻想的な空間を作り出しており、さっきまでの死が蔓延する空間と同じ場所にあるのが不思議なくらいだ。

「綺麗……」

ソフィーはその光景にポツリ、と眩き、辺りを見渡す。

「さっきまで腐ったような土地だったのに、一変してこんな景色になるなんて。本当によく分からない場所ね」

ミレイナも眩く。

そんな中、マイラが蒼く光る水に近寄り、観察し始めた。

「……これ、酸だニャ」

「え？」

マイラの眩きが聞こえたミレイナは間の抜けた声を出す。

「見て欲しいニャ」

マイラは小石を広い、水の中に落とす。ぽちゃん、と高い音を出すと同時に水に浸

かった小石は泡を立てて溶けてしまった。

「・・・本当ね。ここ一帯が酸に囲まれてる訳か」

「せんせーい!!」

少し離れた場所でミレイナを呼ぶソフィーの声でした。

「何ー?」

「ありました!ゾラ・マグダラオスの『痕跡』が!」

「本当!?!」

ソフィーの元へ駆け寄るミレイナたち。

確かにソフィーの所には火山岩のような大きな岩がそこにあつた。

「間違いなくマグダラオスの物ね。じゃあ、奴はここを通つていたのね」

ミレイナとソフィーが火山岩の一部を採取し、本来の目的を達成させ、その場から立ち去ろうとした瞬間だった。

ワオオオオオオオオオオ!!

狼のような声。その声の主が岩壁から飛び降り、4人の前に姿を現せた。

「オドガロン・・・」

この『瘴気の谷』の覇者、オドガロンが、自分のテリトリーに入った異物を排除するためにミレイナたちの前に立ち塞がったのだ。

「やれるわね、ソフィーちゃん」

「はい。いつでも」

ミレイナはその返事にニヤリ、と笑いクリスタルと共にオドガロンへ向け、走り出した。

「せえいつ!!」

走りながら繰り出す、抜刀縦斬り。

しかし、『ハイジークムント』の刃は空を割くだけで、オドガロンを捉えることはなかった。

「こいつー!」

オドガロンはその場から跳び、ソフィーの前に着地する。

「このっ!」

ソフィーも太刀、『鉄刀【禿】』を振り下ろすも呆気なく躲される。

「思っていたよりも速い!？」

ソフィーの側面に回り込んだオドガロンは前足を振りかぶり、ソフィーへ目掛けて振る。

オドガロンから距離を取るよう後方へローリングし、ソフィー何とか爪を避ける。しかし、オドガロンはすぐさま口を大きく開き、ソフィーへ食らいつく。

「ソフィー!!」

咄嗟にクリスタルがソフィー目掛け、体当たりをし、突き飛ばしたことにより、オドガロンの牙は空を砕く。

「あ、ありがとうございます！クリスさん！」

「早く立つニヤー!」主人とマイラが後ろから回り込んでいるから引きつけるニヤー!」

クリスタルの言葉通り、ミレイナとマイラはオドガロンの後方の左右から回り込み、距離を詰めていた。

「とつた!!」

オドガロンの右後脚に一撃を加えたミレイナ。だが、オドガロンはなんの反応を示さず、再び跳び、ミレイナの背後に回る。

「こんの……。すばしっこい!」

飛び込むように噛み付いて来たオドガロンを『ハイジークムント』を盾にし、受け止める。

「マイラ!!」

「おまかせニヤー!」

マイラの愛刀『猛レイアネコレイピア』をオドガロンの頭へ斬りつける。これにも特にアクションはない。

「これでどう?!」

マイラが斬りつけたと同時にミレイナはローリングで距離を詰め、その勢いを利用して肩でタックルをする。そのまま強・溜め斬りを頭部へ叩き込み。

続けざまにソフィーとクリスタルが飛び込み、太刀の攻撃を2撃とクリスタルの愛刀『猛レウスネコブレイド』の1撃を与えるも、怯むことなく距離を取られる。

「やっぱり、タフな上に速い」

「想像よりも何倍も速くて……。っ！来ますっ！」

ソフィーの声と同時にオドガロンは大きく跳ぶ。

ソフィーとオトモたちは前に。ミレイナは後ろに避ける。

4人が居た位置にオドガロンは着地すると、前足を器用に使い、体を捻らせ、黒い尾をミレイナ目掛け、地面へ叩きつける。

「なっ!!」

オドガロンの尾が地面を叩き、土煙を上げる。

ミレイナは尾の1撃を腹部に貰い、大きく吹き飛ばされる。

「ガハッ……!」

「先生!?!」

オドガロンが元居た位置まで戻り、着地すると同時にミレイナも地面に墜落する。

「マイラさんは先生の方へ！私とクリスさんでアイツを引き付けます！」

ソフィーの指示でオトモはそれぞれ動く。

「動きは少しだけ読めてきた。確かに速いけど攻撃は予備動作が少し大きい。それを見切れば……。クリスさん！」

「分かっているニャー！」

クリスタルはオドガロンの腹下へ潜り込み、『猛レウスネコブレイド』で突き上げる。うざったそうにオドガロンは横へ跳び、ソフィーの正面へ動く。

ソフィーが縦切りを振り抜いたと同時にオドガロンは前脚で引き裂こうとする。

「見えた!!」

弧を描くように距離を取り、完璧な見切り斬りがカウンターののようにオドガロンの頭部に入る。そのまま流れるように鬼刃大回転切りを同じく頭部へ命中させるとオドガロンはその場で小さく怯む。

「よしっ！先生は!?」

その頃、吹き飛ばされたミレイナは未だに立てずにいた。無理矢理体を起こそうとするも上手く力が入らない。

「ご主人様、立てるニヤ?」

マイラは不安そうな顔をしてミレイナの顔をのぞき込む。

「ごめん、ちよつと……。無理……。」

「そうなのニヤ。少しおしゃべりでもしますかニヤ?」

「それ、名案……。その前に、ポーチから『回復薬グレート』出して……。頭からかけてくれない……。?」

「はいニヤ」

この2人はいつでもどこでも相変わらずのようだ。

ソフィーたちが対峙するオドガロンは口から蒸気のような息を吐き、真っ直ぐ2人を睨んでいた。

「怒り状態ですかね．．．？」

「多分そうだニヤ」

あまりの迫力に若干へっぴり腰気味のソフィーに対してクリスタルはいつも通り冷静だった。やはりソフィーとクリスタルでは踏んできた場数が圧倒的に違うのが見て分かる。

「ビビってるニヤ？」

「そ、そりや．．．。初めて戦うモンスターですし、怒るとどうなるかなんて．．．」

「ま、それも分かるニヤ」

「クリスタルさんは冷静ですね．．．」

「あんなご主人と一緒に居たらこんな状況嫌でも慣れてしまうモノニヤ」

「あはは．．．。体がいくつあっても持ちませぬね．．．」

ソフィーは太刀を持つ手に再び力を込める。

「もう大丈夫みたいだニヤ」



「全然大丈夫じゃないですよ……。怖くても立ち向かわないと。それがハンターなんですから」

「上出来ニヤー!」

そういうとクリスタルは走り出す。

後を追うようにソフィーも駆け出し、オドガロンへ詰め寄る。

「速すぎる! 追いつけない!?!」

走って詰めてもさらに速度の上がった圧倒的な跳躍力で翻弄されてばかりの2人。次第にオドガロンの攻撃を捌けなくなり、体に傷を作り続けていく。

ソフィーの防具も所々破け、傷口から流れる血が『ウルムーシリーズ』の白を赤く染める。

「つくう……!」

オドガロンの前脚がソフィーの頬を浅く裂き、血が少しだけ飛び散る。

「ソフィー!?! 大丈夫かニヤ!?!」

「大丈夫です! 少し掠めただけです!」

心配するクリスタルを止め、ソフィーは武器を構え、太刀を振るうもオドガロンの動きを捉えきれず、決定打はなかなか生まれぬ。

(どう、しよう……。似たような骨格をしているトビカガチとは全然違う……。怒っ

てから動きが読めない……。それに頭も……)

ソフィーは自分の体がいつものように動かないことと対峙するモンスターの動きを捉えきれないことに焦りを感じていた。それにどこか彼女の意識も呆然とし始めていた。

オドガロンは小さく助走を付け、自身の脚をダイナミックに使い、ソフィー目掛けて飛びかかる。

「あつ……」

今から動いても間に合わない。もうダメだ、とソフィーの思考は死を受け入れ始めていた。

「ソフィー!!」

動こうとしないソフィーを庇うため、クリスタルは走るが間に合う距離ではなかった。ソフィーも目を閉じ、襲ってくる衝撃に覚悟を決める。

その時だった。

「ゴメン！待たせたわね！」

ソフィーの真後ろから大好きな声が聞こえた。

「え？」

ソフィーの真上を銀の風が舞う。

儼く美しい銀には不釣り合いな無骨な獲物がソフィーを狙う赤い獣の頭部へ躊躇いもなく振り下ろされ、オドガロンは1歩後ずさる。

「うっおらああああああああ!!!」

着地すると同時にミレイナは大剣を体ごと回転させ、全体重の乗せた薙ぎ払いで追撃する。

ガキン!!と鉄と骨がぶつかる音が響く。その一撃はオドガロンの頭へ深く入り、荒々しくむき出していた牙をへし折る。

ギヤオン!?

流石のオドガロンも余程応えたのか、後方へ転がるように怯む。だが、すぐさま体勢を整え、ミレイナへ飛びかかる。

「こんの・・・!!」

『ハイジークムント』を盾にしオドガロンを受け止めるミレイナ。しかし、体格差は歴然で押し倒されようとしていた。

「みんな!お願い!!」

ミレイナの声と共にマイラ、回復を終えたソフィーとクリスタルの3人は詰め寄り、各々攻撃をしかける。それに察知したオドガロンはミレイナを突き飛ばし、はそれぞれを追い払うかのように爪を振るう。それはソフィーの腹部を切り裂いた。

「くう……!!」

腹を裂かれると同時にソフィーは鬼刃斬りをカウンターののように振るい、オドガロンの爪を断ち切る。

それにより分が悪いと判断したのか、オドガロンは颯爽とこの鍾乳洞のようなエリアから去って行った。

「ハッ……ハッ……ハッ……ハッ……」

苦痛を荒い呼吸で誤魔化そうとするソフィー。足に力が入らないのか、自分の武器を杖にして辛うじて立っているようだ。

幸いなことに防具があつたことで爪は内臓までは届いてはいなかったが、ウルムーメイルには5本の傷が荒々しく刻まれた。

「大丈夫!?これをー!」

駆け寄ったミレイナがソフィーの肩を持ち、取り出した1粒の丸薬を彼女の口に入れる。

「んくっ……あれ?痛く、ない……?」

ソフィーは自分の手を握ったり開いたりしながら不思議そうに首を傾げる。

『秘薬』よ。ある程度の傷なら一瞬で治せる激薬よ」

「えっ!?そんな高価なもの?!」

『秘薬』は激的な効果があるものの、調合に必要なものは貴重なものばかり。買うとしてもかなりの額になるのだ。

「いいのよ。取り置きはまだまだ沢山あるから。さ、追いかけてみましょうか」

「はいっ！……っであれ？」

歩き始めたソフィーはその場で膝をつく。

「どうかした？」

「な、なんだか痛みがまた……。それに血も……」

「……そこに寝て」

ミレイナは1度ソフィーを横になるようにいい、ポーチの中を探る。

「おかしいニヤ。顔色がよくないニヤ」

横になったソフィーの顔を心配そうな顔をしたマイラが覗き込む。

「ごめんなさいね。少し恥ずかしいかもしれないけど、見せてね」

ミレイナはソフィーの銅の鎧を脱がせ、インナーだけにする。

「……やっぱり。傷も塞がってないし、血も止まってない」

ソフィーの腹には5本の抉られた傷が生々しく残っており、血がゆつくりと溢れだ

ていた。

「『裂傷』ね。ソフィーちゃん、今痛みは？」

「い、今は全く……。ただ、体を動かすと……。いたつ……。！」  
「動かないの。これ、食べなさい」

そう言ってミレイナが差し出したのは『サシミウオ』の切り身。その1切れをソフィーの口にゆつくり運び、静かに食べさせる。

「ああー!!それボクのおやつニヤ!!」

ソフィーの口に切り身が入った瞬間、クリスタルが大声をあげる。

「うるさいわね!そんなこと言ってる場合じゃないでしょ!」

「確かにそうかもしれないニヤ!でも!そもそもご主人が持つてるのがおかしいニヤ!」

「べ、別に空いた時間にツマミにしようなんて思っでないわよ……。?」

「自爆してるニヤ!」

「2人もうるさいのニヤ!!」

収まりそうにない言い合いに痺れを切らしたマイラがどこからか取り出したオタマで2人の頭をコン!と1発ずつ殴る。

「いいニヤ?今は狩りの最中でソフィーさんもケガをしてツライのニヤ。そんな時に2人がくだらないことで言い合ってる暇はないニヤ」

「ぐたらなく……。!ギニヤツ!」

クリスタルが反発しようとした瞬間に再びオタマが炸裂し、ミレイナとクリスタルは頭を抑える。

「・・・なんで私まで・・・」

「とにかく、分かったのなら返事をするニヤ？」

「・・・はい」

「聞こえないニヤ!!」

「は、はいっ!!」

「ソフィーさんが動けるようになったらオドガロンを追いかけるニヤ!」

「はいっ!!」

サシミウオの効能で傷が塞ぎ始めたものの、体にまだ違和感の残って、寝たままのソフィーはマイラだけは怒らせないようにしよう、と決めたのだった。

「・・・だってあのマイラさんの雰囲気、ヤバイモンスターのそれだよ・・・」

## 赤き獣は鮮血と舞う（後編）

動けるようになったソフィーを気遣いながら4人はオドガロンが逃げて行った瘴気が蔓延するエリアに向かう。

「ソフィーちゃんは無理しないで。オドガロンは私たち3人で抑えるから、貴女には寄ってくる小型モンスターを捌いて欲しいの。露払いみたいになるけどいいかしら？」

ミレイナの提案にソフィーは申し訳なさそうな笑顔を浮かべ、頷く。

「はい……。いつも足を引つ張つてごめんなさい……」

「そんなことないわよ！むしろ今回は私が不甲斐なさすぎるわ。ソフィーちゃんには助けて貰つてばかりだからここからは私がソフィーちゃんを助ける番よ」

ミレイナはソフィーの頬を撫で、微笑む。

思いもよらぬ行動でソフィーは顔を赤らめ、俯く。

「どうかした？」

「い、いいえ！なんでもありません！」

「?とにかく、追いかけるわよ」

鍾乳洞から出てすぐの広がつたなだらかな斜面のエリアの中央にオドガロンは佇ん



でいた。

よく観察してみると口からはヨダレをだしており、消耗しているようだ。

「……畳み掛けるなら今か……。準備はできてる？」

「いつでもいけるニヤ」

ミレイナの問いかけにクリスタルが答える。ソフィーとマイラも同じように深く頷く。

「じゃあ、手はず通りに。行くわよ！」

火打石を『スリンガー』で撃ち、瘴気を払い、4人は一気に駆け出し、オドガロンへ突撃する。

それに気づいたオドガロンは1度、雄叫びを上げ、4人に相対するが、疲れからか、動きは鈍い。

足元に深く入ったマイラの1太刀でオドガロンは転倒する。流れるように追撃に移ろうとした4人だが、どこからかこの『瘴気の谷』に生息する小型の鳥竜種、ギルオスが数匹姿を現した。

「ソフィーちゃん！」

「はい！こっちは任せてください！」

ソフィーはオドガロンから離れ、小型モンスターの迎撃に移る。

起き上がったオドガロンは大きく腕を振るい、ミレイナたちを引き剥がす。

1度退き下がるかのようにエリアの端に移動すると、落ちている何かの腐った死骸を食べ始めた。

「ちっ……。仕留めきれなかったわね」

どうやらミレイナはオドガロンが回復を済ませる前に討伐してしまいたかったようだ。

「……何？あれ……」

理解できない、とでも言いたげにミレイナは小さく呟く。

腐肉を食べ終えたオドガロンは口と上半身から蒸気を出し、背中の筋肉は盛り上がり、筋が青く光だした。

「……どうなってるのよ、あれ」

「ボクも検討がつかないニャ……」

ミレイナの動揺した呟きにクリスタルも理解できないと続く。

ウオオオオオオオオオオオオン!!

オドガロンの大咆哮が谷中に木霊し、大きすぎる音に4人は耳を塞ぎ、蹲る。そして、オドガロンが最初に標的にしたのはマイラだった。

「マイラ！避けて！」

その瞬間、オドガロンはマイラを爪で引き裂こうと、飛びかかる。

ミレイナの声に咄嗟に反応したマイラはその場から大きく壁の方に横つ飛びをし、オドガロンの爪を避けるが、その爪はマイラの背中に浅く傷をつける。

クリスタルが咄嗟にマイラのフォローに入り、彼女とオドガロンの間に立つ。

「マイラ、大丈夫かニヤ？」

「だ、大丈夫ニヤ。少し掠めただけニヤ」

そう言うときマイラは立ち上がり、自身の武器を構える。

オドガロンはその場から跳躍。

2人を狙って飛びかかるが、彼らはそれを危なげに避ける。

「気を抜かないで！次が来るわよ！」

さらに速度を上げたオドガロンを間合いに入れるために走って追いかけるミレイナが声を上げる。

オドガロンは着地した勢いを殺さず、そこからもう一度跳躍。壁の方に跳躍し、そのまま壁を蹴る。三角蹴りの容量でミレイナへ突撃した。

「くう・・・!!」

彼女はオドガロンの腹の下を潜るように転がり、間一髪で避け、起き上がると同時にオドガロンへ体を向ける。

なおも暴れ続けるオドガロン。

3人は攻撃に転じることができないまま、防戦一方だ。

不意にオドガロンの動きが止まり、ミレイナとオドガロンは向き合い、睨み合う形となった。

「尋常じゃないほど暴れるわね・・・」

ポツリ、と眩き、ミレイナは背中の大剣の柄に手をかけ、オドガロンの動きに備える。先に動いたのはオドガロン。全ての脚を使い、ミレイナに飛びつく姿勢を一瞬見せた。

「これでも・・・」

彼女は左腕に付けたスリングアーを地面に向け弾を射出し、腕で目を覆う。

「喰らいなさい!!」

その瞬間、ミレイナの足元は眩い光を放った。

その光の正体は彼女の撃った『スリングアー閃光弾』。本来、打ち出した弾は一定距離を進まなければ炸裂しない。だが、あえて地面に撃つことにより、弾が炸裂する時間を短縮させたのだ。

!?!?

勢いよく飛び上がったオドガロンは視力を奪われ、空中で藻掻く。平衡感覚を失った

体はバランスを崩し、倒れ込みながら地面に落ちる。

「畳み掛けるわよ！」

その声に応じ、3人はオドガロンの頭へ集中攻撃を始めた。

「先生！私も！」

周囲のギルオスを追い払ったソフィーもオドガロンへの攻撃に加わる。

「まだ足りないの!?!」

それぞれ渾身の一撃を与えるもオドガロンを仕留めるまでには足らず、オドガロンはゆっくり起き上がる。

「1度離れるわよ！」

追い込まれた獣は何をするか分からない、とミレイナの本能が告げ、3人に離れるよう、叫ぶ。

その声に反応した3人は距離を取り、オドガロンの出方を見る。

しかし、意外にもオドガロンは背を向け、別のエリアへ脚を引きずるように移動を開始した。その足取りと姿はミレイナたちから逃げるように見えた。

「・・・逃げた？」

武器を構えたままソフィーは少し拍子抜けだ、と言いたげに呟く。

「そうみたいね・・・ん？」

武器を納刀しながらミレイナが返答すると谷の上層から何か落ちてきているのに彼女は気づいた。その何かはオドガロンが逃げていった方向へ墜落するようだ。

「みんなはあれが見える？」

なおも落下し続けている何かを指差し、ミレイナはソフィーたちに尋ねる。

「なんででしょうか……。飛竜のように見えなくはないですが……」

確かに、ソフィーが言うように二本足で2対の翼、長い首と尾が見て取れる。

クリスタルとマイラも同じように首を縦に振っていた。

「確かめておくべか、よね……。ちようどオドガロンが向かった先のようにだし、行きましょう」

落下して来たモノとオドガロンを仕留めるために、一行は歩き始めた。

「・・・いた」

移動先で見つけたオドガロンは上空を見上げ、静かに佇んでいた。その視線の先には飛竜と思われる何か。そして何かはドスン、と低い音を響かせ、地面に墜落した。

「レイギエナ、なの？」

背の高い草むらに隠れた一行。

ミレイナの横でオドガロンを観察していたソフィーが不思議げに呟く。

「レイギエナって？」

聞いたことの無い名前にミレイナはソフィーに質問する。

『陸珊瑚の台地』に生息している飛竜です。恐らくあれはその死骸です。死骸が落ちて、この『瘴気の谷』で分解されてる、という話は聞いていましたけど、まさか飛竜もだなんて・・・。驚きです」

落ちてきたレイギエナの死骸にオドガロンは近づいていく。

顔を上げ、周囲を見渡し、脅威がないかを確認している。

「捕食する気ね。行くわよ！」

ミレイナは茂みから飛び出し、大剣に手をかけ、いつでも迎撃できる体勢に入る。その後ろから3人も続く。

気配に気づいたオドガロンは4人を一瞥し、レイギエナの死体の喉を啜え、引きずり

ながら運び始めた。更に器用なことに、オドガロンは爪を使い、岩肌を登っていく。

「逃げる気?！」

走る速度を上げ、一気にオドガロンを仕留めようと接近するが、立ち塞がるように小型の鳥竜種と瘴気によって皮膚が爛れた翼竜が行く手を阻む。

「邪魔よ!!」

鳥竜種のギルオスを踏みつけ、跳びながら突き進む。

「先生!右!」

ソフィーの声でそちらを向くと翼竜がミレイナへ突進してきていた。

「こんの!!」

ミレイナはギルオスの背を蹴り、背面跳びで翼竜を避けると同時に、そいつに向かつてスリンガーのアンカーを射出する。アンカーは足に引っかけり、引き戻すことでミレイナの体は振り子のように振られる。

「ふっ!!」

アンカーを上手く外し、崖を登るオドガロンへ勢いよく飛び出す。

近づいていくオドガロンとの距離。

抜刀。

狙いはオドガロンのクビ。



力を溜め、その刹那に全てを賭ける。

「やああああああああああああああああああああああああああああ!!!」

振り下ろした一閃はオドガロンの肉を裂き、骨を砕いた。

オドガロンは力を無くし、崖から地面へと落ちていく。

ドスン、と重い音を響かせ、落下したオドガロンは活動を止めたのだった。

「うん。終わりよ」

着地したミレイナは『ハイジークムンド』を納刀し、3人に笑いかけるのだった。

## 2つの試練

『アステラ』のマイルームでミレイナはコーヒーを啜り、手に持った書類を読みながら顔を顰めていた。

その光景を後ろからソフィーとシエリーは部屋の隅の方で見つめているという、異様な空間がそこにあつた。

「先生、難しそうな顔、してるね」

「ええ。ですが、無理ありません。2人が『瘴気の谷』で見たレイギエナを仕留めたのはお姉様の敵であるネルギガンテなのですから」

オドガロン狩猟中に『陸珊瑚の台地』から落ちてきたレイギエナの死体。それを調べると黒い棘がいくつもレイギエナの体を貫いていた。

恐らく、『瘴気の谷』に残っていたゾラ・マグダラオスの匂いを追って、ネルギガンテも近辺まで訪れていた所に、『陸珊瑚の台地』を統べる、レイギエナと交戦したようだ。しかし、そのお陰か3期団の空挺は『瘴気の谷』まで降下でき、調査を大きく進めることができたのも事実だ。

「なんであそこまでネルギガンテに固執するんだろう……。私には分かんないよ……」

座り込み、膝を抱え込むソフィー。

「私も詳しいことは知りませんが・・・」

シエリーは小さく呟き、隣で座り込む、ソフィーの頭を撫でる。

「今、お姉様の一番近くにいるのはソフィーです。何かあつた時に頼れるのは貴女だけなので、頼みましたよ」

「・・・うん！」

ソフィーが静かに、だが力強く頷く。それと同じタイミングでミレイナがガタツ！と音を立て、勢いよく立ち上がる。

その音に2人は驚き、肩を跳ねさせる。

「行くわよ、ソフィーちゃん」

ミレイナは振り向き、目を丸くしているソフィーに告げる。

「え、つと。どこにですか？」

『『古代樹の森』よ。私は腹ごしらえしてるから準備ができたなら食事所まで来なさいね』

「は、はあ・・・？」

詳しい話もせずに、ミレイナは外へ出ていく。

「な、何だつたんだらう？」

「わ、私にも分かりません・・・あの書類は私も読んでいませんので・・・」

「うーん。よく分からないけど、私も行くね」

ソフィーは壁に立てていた『パルサーシヨテルII』を手に取り、ミレイナの後を追いかけて行った。

目的地までの翼竜で空を飛ぶ移動時間に『ガロンシリーズ』を纏ったソフィーは何故そこへ向かうのかをミレイナに聞いていた。

「ゾラ・マグダラオスの行方を探す手がかりがあるらしいわ。なんでもそこに住んでる古代竜人が知ってるらしいけど……。まあ、眉唾物だから行って確かめないとね」

何かなんだかよく分かっていないソフィーは首を傾げるのだった。

「うーん。この辺に居るみたいなんだけど・・・」

『古代樹の森』の人が歩けるほど大きくなった枝や蔓の上を歩きながら高層へと進んでいく4人。だが、進んでも進んでも古代竜人が住んでいそうな場所は全く見当たらない。

「あの情報、嘘だったんじゃないのかニヤ？」

面倒臭くなってきたのか、クリスタルがやる気のなさそうな声を出す。

「本当に正しいのかどうかを調べに来てるのニヤ。シャキツとするニヤ」

マイラにどやされながら、クリスタルはため息をつく。

「・・・待つて・・・」

先頭を歩くミレイナが片手を水平に上げ、3人を止める。

「・・・居たわ。上から見下ろしてくれちゃって。いいご身分だわ」

「上？」

ミレイナの視線が上に向かっていることに気づいたソフィーはその視線を追う。

「あっ・・・」

そこには木の枝に乗った竜人族が居た。その竜人族はソフィーの知っている者たちとは見た目もそうだが、雰囲気など言葉には表せないような何かが根本的に違っていた。

「ずつと、見ていたのかしら？」

「—————」

ミレイナの問いに答えたように古代竜人は口を動かすが、言語を理解できない。

「……マイラ、分かる？」

「えつと……。断片的ニヤら。空の王と陸の暴君……？倒す……？」

「へえ、なるほどね。分かったわ。そいつらを狩ればいいのよね？」

古代竜人は頷く。その瞬間、遙か遠くから猛々しい方向が森に響き渡る。一瞬、音の方を向いたミレイナたちだが咆哮の主の姿は見当たらなかった。

視線を戻すとそこに古代竜人の姿はなかった。

「あ、あれ？居なくなってる……」

ソフィーが付近をキョロキョロ見渡しても姿を見つけないことはできなかった。

「まあいいわ。やることは分かった訳だしね」

「そうなんですか？」

「ええ。あの古代竜人は空の王と陸の暴君を倒せば教えるって言ったわ」

そう告げるミレイナの口元は薄く笑っていた。

「リオレウスとディアブロスを狩る。たったそれだけで教えてくれるなんて優しいわね」

すると……。

「ん？ミレイナさんとソフィーじゃないか」

背後から声がした。その声の主は新たな防具、『ギエナシリーズ』を身につけたフレッドだった。

「兄さん!?なんでこんな所に?」

突然現れたフレッドにソフィーは驚いていた。

「1期団の人に頼まれて古代竜人を探しにここまで来たんだが、どうやらお役御免のようだ」

「フレッドくんも、というかあの太刀使いの人も私と同じみたいね」

ミレイナは顎に手を当て、少し考える。

「ふむ……。なら、こうしない?ソフィーちゃんとフレッドくんの2人はこのリオレウスを狩猟してくれるかしら。手分けした方が早いし。ついでにクリスも置いてくわ」

「ついでってなんニヤ?ついでって」

「え……。でも……」

自信がなさそうにソフィーはか細い声を出す。

「大丈夫よ。貴女ならできるわ。自分を信じなさい、相棒」

そう言つてミレイナは自分の胸を叩いた後に軽くソフィーの胸を叩く。

「はいっ……!」

力強い返事をする。

ミレイナはにつこり、と笑みを浮かべる。

「じゃあ、早速私は行くわ。気を抜かないようにね」

ミレイナとマイラが地上までの道を歩いて降りて行く。姿が見えなくなると同時にソフィーたちの真上を巨大な影が通り過ぎて行く。

「……リオレウス」

赤い体に大空を雄大に飛ぶ姿はまさに王と呼ぶに相応しい飛竜。2人にとっては縁の相手だ。自然と背筋が伸び、緊張感が体に襲いかかる。

「大丈夫ニヤ。今のソフィーなら問題ないのニヤ」

クリスタルがいつもの調子で話す。

「はい。シェリーと約束した矢先に離れ離れですが、先生の期待に応えます。行こう、兄さん」

「ああ」



この大樹の上層、飛竜の巢へと3人は歩み始めた。

## 試練の始まり

激しい日照りが続くはずの砂漠だが、それは外の話。『大蟻塚の荒地』の砂漠地帯は2層構造になっており、ミレイナとマイラはその下層、大空洞にいた。もちろん、例外なくそこも砂の空間だ。

1度息を整えるために深呼吸をする。それだけで口の中がジャリ、と不快な音を立てる。

ミレイナは舌打ちをしながら唾と共に砂を吐き出し、目の前に相對する敵を睨む。

黄土色の甲殻に太い強靱な2本の脚。長い尾の先にはハンマーのように発達した骨。飛竜種に分類されているものあまり使用されない1対の翼。一際目を引くのは頭部の1対の大角。それは、ディアブロス。『大蟻塚の荒地』に君臨する大型のモンスターだ。だが、その体はズタボロで、体のいたるところ甲殻が砕け、その隙間から血液が溢れていた。

「もう少ししてところかしら。マイラはどう思う？」

横に並ぶオトモアイルーに話しかけるミレイナ。自身もそうだが、マイラ表情もまだまだ余裕があった。

「ワタシもそう思いますニヤ。口から時々出る黒い息の感覚も短くなってるから、相当弱ってるんじゃないんですかニヤ？」

「なるほどね」

ミレイナは言葉を聞き終わると、背中に納刀している『暴雪剣グレッツアタギオ』の柄に手をかける。

「だったら早いところ終わらせましょう！お腹が減ったわ！」

「分かりましたニヤ！」

2人はディアブロスに向かって駆け出す。

対してディアブロスはこちらに向かってくる標的にハンマーのような尾を水平に振り、薙ぎ払う。

ミレイナたちは感覚を研ぎ澄ませ、気配だけで近づいてくる尾をギリギリまで引き付ける。ミレイナは前方へローリング、マイラは縄跳びをするかのように高く跳び、薙ぎ払いをやり過ごす。

「マイラは脚！」

「ニヤ！」

ミレイナは頭、マイラは背後から回るように脚へ二手に分かれる。

接近してくるミレイナに気づいたディアブロスは角を砂地に勢いよく差し込む。

「よっ」

体を半身にしてあっさりと躲す。その場で足を踏み留め、前に倒れ込むように背中の大剣を抜刀。全体重を乗せ、角へ振り下ろす。

ガキツ!!と金属音にも似た甲高い音が響くと同時に『暴雪剣グレッツアタギオ』がディアブロスの大角の一本を断ち斬った。

ギヤアアアア!

ディアブロスは角を断ち斬られた衝撃から大きく仰け反り、片角が砂を巻き上げる。

「きやつ!?もう!砂まみれじゃないのよ!!」

頭から全身に砂を被ったミレイナは不満の声を上げる。

「そんなこと言っていないで早くして欲しいニヤ!!」

仰け反ったまま動きを止めていたディアブロスの脚にマイラは渾身の一撃を叩き込む。

「・・・ニヤ?」

反撃を警戒していたマイラが不思議そうな声を出す。

ディアブロスはそのまま動かず、マイラを睨んだまま息を吐く。

何かがおかしい。

「ま、まずいかも・・・、ニヤ・・・?」

マイラは息をのみ、ディアブロスの出方を伺う。だが……ズドン……。

ディアブロスの巨体は地面に倒れ、砂塵が舞う。

「あー、もう……。最悪……。お風呂入りたい……。ってマイラ？」

体についていた砂を払っていたミレイナはやけに静かになったエリアに気づき、マイラの方を見る。

「それ、死んでるの？」

「は、はい……。相当弱ってたところに毒が回って力尽きたんだと思いますニャ」

「そういうこともあるのね……」

倒れたディアブロスを見ながら、ミレイナは呟く。

「まあ、なんにせよ。試練は一つクリアしたわ。マイラもありがとう。お疲れ様」

ミレイナはしゃがみ、マイラの頭を撫で、ポーチからオトモ用のウィンナーを取り出し、マイラに渡す。

「ご主人様もお疲れ様ニャー！」

ウィンナーを頬張りながらマイラは笑う。

「さて、帰りましょう。ソフィーちゃんたちを出迎えないとね」

「はいニャー！」

時刻は少し遡る。

『古代樹の森』に大きくそびえる大樹。その頂上付近に設置されているベースキャンプの外でソフィーとフレッド、一緒に残ったクリスタルは火竜リオレウス討伐の作戦会議をしていた。

「ヤツの飛んで行った方向から考えると恐らく・・・」

机の上に広げたこの土地の地図の1箇所をフレッドは指差す。

「ここだろう」

古代樹の頂上。そこは飛竜の巣だ。

「場所は狭く、戦いづらい場所だ。危ないと思っただけなら足りなく構わず逃げろよ」

フレッドが真剣な顔でソフィーに忠告する。だが、そのソフィーは薄ら笑みを浮かべ

ていた。

「ありがとう。でも大丈夫だよ、兄さん」

「お前……。見ないうちに変わったな！」

驚いた顔をしたフレッドだがそれも一瞬で、笑顔になるとソフィーの頭をクシヤクシヤ撫でる。

「わわっ！ちよつと、何？兄さん」

「なんでもないさ！さ、行こう！」

「うん！」

少し乱れた髪を手で整えながらソフィーは返事をする。

「あれ？クリスさん、どうしたんですか？やけに楽しそうですね……」

「ニヤ？兄妹仲がいいニヤ、と思っただけニヤ」

「そうかもですね。でも、クリスさんもマイラさんと兄弟仲良いじゃないですか。どつちがお兄さん、お姉さんになるんですか？」

「……？ボクはマイラとは兄妹じゃないニヤ」

「え!? てつきりそうとばかり！」

「へえ。違うんだな」

大袈裟に驚くソフィーに対してフレッドは控えめだった。

「そんなに驚くことかニヤ……。兄弟……。姉妹ならご主人とマイラニヤ。あの2人は物心ついた時からずっと一緒ニヤ」

「え……。？先生はハンターになってからマイラさんと出逢ったって言っていましたけど……。」

聞いていた話とは違うことにソフィーは首を傾げる。

「ニヤ……。？……。ああ、そうだったニヤ。ボクの勘違いだったニヤ」

「いや、それ嘘だろ？」

明らかに誤魔化してるクリスタルにフレッドは指摘する。

「まさか。ほら、行くニヤ」

2人を置いてベースキャンプから出ていくクリスタル。

「クリスタルの様子、明らかにおかしいな」

フレッドはソフィーに寄り、小声で話しかけると、ソフィーは小さく頷く。

「うん……。なんで先生は嘘をついたんだろう……。」

「それは分らんが、何か事情があったんだろ。問い詰めてみるしかないな」

フレッドはソフィーの肩をぼんと叩き、クリスタルの後を追う。

ミレイナの考えが今は目の前の狩りに集中するために頬を叩き、気合を入れる。

「さあ！打倒リオレウスだよ！リベンジ戦だね！」



ぐーっ！と腕を上にあげ、ソフィーは叫ぶ。

「だな。変に気張りすぎんなよ」

その横をうつすら笑みを浮かべたフレッドが通っていく。

彼女たち兄妹にとって因縁の相手と言うだけあって2人の気合いは十分だった。

リオレウスの巣と思われる古代樹の頂上に到着した3人だが、リオレウスの姿は見当たらなかった。

「留守中、だね……」

木の影に隠れている3人。ソフィーは小さな声で呟く。

「いや。そうとは限らん」

足元に落ちていた赤い鱗をフレッドはつまみ上げる。それを導虫の虫籠に入れる。すると。

「ほらな」

導虫は籠から飛び出し、空に向かって飛んでいく。

ギャアオオオオオオオオオ!!!

空を引き裂くような強烈な咆哮。

膨大な音量にクリスタル以外は一瞬体をすくませる。

「……きた……!」

赤い対の翼で大空を駆け回り、まさに竜と言う言葉が相応しいモンスター、リオレウス。空の王者がその姿をソファイーたちの目の前に現した。

「よし。行くう!」

フレッドと目を合わせ頷いたのを見て、飛び出して行くソファイー。

いつもならギリギリまで相手の様子を伺い、対象個体のクセなどを見極めるソファイーなのだが、今回はミレイナのように自分から突貫して行つた。これが彼女の成長なのか、はたまたミレイナの影響なのかは分からないが……。

「まずは……!」

滞空したままのリオレウスを見て、ソファイーは左腕のスリンガーに『スリンガー閃光弾』を装填する。

「先生の教え通りに……!」

腕を突き出し、スリンガーを打ち出そうとした瞬間、リオレウスは大きく息を吸い込

み、ソファイーへ目掛けて火球を吐き出した。

「……！ブレス!?!」

咄嗟に前方へ飛び、火球ブレスを回避するが、地面に着弾した際の熱風がソファイーを襲う。

「あつつう……!」

その場で体を丸め、熱風を耐える。

「ソファイー！アイツから目をそらすな!」

フレッドの声でハッ、としたソファイーは空を見上げる。リオレウスは次の攻撃を行おうとせず、見定めるようにソファイーを見ていた。

「試練って言ってたし、リオレウスも私を試してるのかな……。ははっ。そんなわけないよね」

呟きながらソファイーは体勢を変え、背中の『パルサーシヨテルII』に手をかける。

「でも！先生の隣に立つんならこんなやつに負けてられない!!」  
それに呼応するようにリオレウスは咆哮を上げる。

狩るか、狩られるか。

命のやり取りが始まった。

## 空の王の試練

森の中から激しい爆音と猛々しい咆哮が絶え間なく鳴り響く。

戦地は大樹から根元の森へと変わるも尚、攻防を繰り返すソフィーたち。大きな傷はまだないが、激しさを増していくリオレウスの攻撃に傷を増やし続け、防具の至る所に血がついていた。

「くそっ、コイツ底なしかよ」

相当な数の攻撃をリオレウスの体に浴びせているが、弱っている気配を感じられずフレッドが弱音をこぼす。

「まだ元氣に見えるけど私たちの攻撃はちゃんと届いてるよ。証拠に翼はボロボロだよ」

ソフィーの言う通り、リオレウスの右の翼爪は折れ、翼膜は裂かれていたり、破れている。

「大丈夫、勝てるよ兄さん」

その言葉を告げると同時にソフィーは駆け出し、リオレウスとの距離を詰める。

「おいつー」

遅れてフレッドもソフィーの後を追う。

「誰に似たんだよ、クソツタレ．．．！」

納刀していた彼の武器『ディアールテミス』を抜刀し構える。

「まあ、諦めるニヤ。良くも悪くも主人の影響力つてスゴい凄いのニヤ」

フレッドの横に立っていたクリスタルがケラケラと笑う。

「笑ってる場合か！」

「ほら、行くニヤ！」

「だーっ！クソっ！」

四足で走っていくクリスタルを追ってフレッドもリオレウスとの距離を詰めていく。

接近してくるソフィーを喰いちぎろうとリオレウスは強靱な顎を開き、ソフィーへ牙を立てる。

（噛みつき、くる．．．。避けないと．．．。どつちに？後ろ？横？いや．．．、前．．．

！)

ソフィーは走る速度を上げ、リオレウスの前で強く踏み込み、跳ぶとさらにリオレウスの頭を踏み台にして跳ぶ。

「でやああああああああ!!」

空中で抜刀し、『パルサーシヨテルⅡ』に練気を込め、空中気刃斬りを首元に切りつける。

ギャア!!?

その一撃でリオレウスは体を振らせながら仰け反る。

「でやああああ!!」

着地と同時に鬼刃大回転切り。リオレウスの脚を切り抜ける。

「兄さんー!」

「ああ!この位置ならー!」

リオレウスの顔の真正面の位置に立つフレッドは左手の剣を振るい、リオレウスの頭部を切りつける。刃はリオレウスの鱗を裂き、血飛沫が舞うと同時に『ディアールテミス』の刀身も赤く染まり、煙を上げていた。オーバーヒートだ。

フレッドの持つ武器、『チャージアックス』は剣にモンスターを切りつけることで蓄えられる斬撃エネルギーを内蔵されたピンに蓄積される。このエネルギーを使用し、剣と

盾の強化。さらには剣と盾を合体させた斧モードはそのエネルギーを放出され、膨大な破壊力を生み出す。

剣を盾に差し込むとカチャン！と仕掛けが作動した音が鳴り、盾が剣の鏢までスライドする。そして大盾が回転を始めると同時に眩い光を散らす。

「おおおおおおおおおおおおおおおお!!!」

武器を左回りに大きく円を描き振り回し、リオレウスの頭を軽く裂く。

「うおおりゃああ!!!」

遠心力によって盾は剣先に位置を変え、その姿を大斧に変えた。斧が真後ろに来たタイミングで真正面に垂直に振り下ろす。大斧はリオレウスのこめかみ辺りを捉え、甲殻を砕き、血飛沫をあげた。

「ふん!!!」

さらに力を込め、斧を地面へ振り下ろし、次は眉間に刃が食い込み、切り裂く。

グギャアアアアアアアアアア!!!??

激しい苦痛の叫びを上げながら大きく後ずさる。

斧の刃が地面に強く叩きつけられると同時に盾部が展開し、ピンに蓄えられたエネルギーを全て放出させた。

その瞬間、地面から5本の眩い光が轟音と共に噴き上がった。

チャージアックスの切り札、超高出力属性解放斬り。その絶大な破壊力が後ずさったリオレウスを追撃し、全身を襲い、甲殻を砕く。

ドズン、とリオレウスはバランスを崩し、その巨体を地面に伏せ、起き上がろうともがく。

「今だあッ!!攻めろ!!」

「うん!!」

ソフィーは気刃斬りの連続攻撃から気刃兜割りを。フレッドは2度目の超高出力解放斬りを使い、リオレウスを仕留めるために全力を出し切る。

だが。

「ダメっ!足りない!」

ソフィーの叫びと共にリオレウスは起き上がり、周辺を尾で薙ぎ払う。

「ぐっ!!」

「兄さん!」

足元に飛び込むことで尾を回避したソフィーとは反対にフレッドは尾に直撃する。

「だ、大丈夫だ・・・!防いでいる・・・!」

彼の言う通り右手の盾で攻撃をしっかりと受け止めていた。超高出力解放斬りのあと強制分離が幸をなしたようだ。だが、彼の様子を見るに今まで戦っていたダメージの蓄



積も相まつて相当答えたようで、その場に膝をついている。

「一旦退いて手当を・・・」

「構うな！もう一押しだ！」

フレッドの言葉でソフィーは横目でリオレウスを確認する。身体中ボロボロで弱々しい声を出している。それにフレッドに意識が向かないようにクリスタルがリオレウスの注意を引いている。そこへソフィーが加勢に加われれば・・・。

・・・いけるかもしれない。

「すぐ終わらせてくるから、待ってて・・・」

「・・・ああ」

ソフィーはクリスタルの加勢に加わるためにリオレウスの正面に立つ。

「フレッドは大丈夫かニヤ？」

「本人は大丈夫って言ってますけど、ずっと注意を引いて、攻撃を受け止めてくれていたからダメージは相当です。早く終わらせましょう」

「そうだ、ニヤ!?!」

空中を飛びリオレウスが炎ブレスを薙ぎ払うように吐き、その熱風がクリスタルの小さな体を転がす。

「クリスさん!?!っとうわっ!?!」

低空飛行でソフィーを目掛けて突っ込むリオレウスをなんとかギリギリで避け、納刀した太刀へ手を伸ばす。

躲かれたりオレウスは突っ込んでいる勢いを殺すために翼と地面を器用に使い、スピードを抑えスマートに着地した。すぐさま首を振り火球ブレスを撃ち出し、ソフィーたちを近寄らせない。

明らかな逃げ、守りの姿勢。リオレウスも追い込まれているのを分かっているのだろう。

それでもなんとか接近できたソフィーは太刀独特の動きで回り込み、常に位置を変えながら的確に攻撃を加えていく。

右の薙ぎ払い。突き。切り上げ。気刃斬り。これらの攻撃でリオレウスは小さく怯む。

腹の下にいるソフィーを覗き込むように見たりオレウスは小さく跳ね、踏み潰そうとするが、それに気づいたソフィーはバックローリングで回避するが、すぐさま追撃の尾の薙ぎ払いに対処できず、横っ腹に直撃する。

「ガハツ・・・!?!」

「ソフィー!!」

痛みを抑えるために回復に専念していたフレッドが声を荒らげ、名前を呼ぶ。

彼女の華奢な身体が数メートル地面を転がる。

「……う……、あつ……。……ゲホッ!!ガホッ!」

細い腕を震わせながら起き上がろうとするソフィー。しかし、受けたダメージは相当なもので吐血し、地面を赤く染めた。

「ま……だ……やれ……る……」

そんな彼女を横目にもオレウスは脚を引きずりながらフラフラ移動を開始した。あの傷だ。自分の巣で回復するつもりなのだろう。

「間に合わない!」

回復を終えたフレッドがリオレウスへ接近するが距離が遠すぎる。間に合わない。

人とモンスターの回復力は雲泥の差があり、ソフィーたちが体勢を整えている間に彼女たちを退けるには充分な時間が生まれてしまう。

「逃がさ、ないから……」

太刀を杖替わりにゆっくり立ち上がったソフィーは自分の真横を通り過ぎて行くリオレウスを睨みつける。

左足を引きずりながらリオレウスを追うソフィー。だが、離されていくばかりだ。

「まあ、慌てるんじゃないニヤ」

クリスタルがソフィーに歩み寄り、支える。

「で、でも……!逃がしたら……」

「見てるニヤ」

クリスタルの言葉と同時に少し前を行くりオレウスが突然苦しみの叫びを上げ、その場で動きを止めた。

「え……?」

「『シビレ虫かご』を置いたニヤ」

オトモ道具の1つである『シビレ虫かご』。それはハンターが使用する罠、『シビレ罠』と同じ効果があり、装置に触れたモンスターを感電させ、動きを短時間だけ止めることができる。

「動きは止めたニヤ……さあ、ソフィー……」

ソフィーの腰をポン、と押すクリスタル。

押された勢いにふらつきながらもソフィーは倒れることなく、足と太刀を地面に引きずりながらリオレウスの真正面に立つ。

「……………」

片手に持った『パルサーシヨテルII』を無言で地面と水平に構えると、刀身は練気の輝きを強くする。

「やああああああああああ!!!」

真つ赤に染まった刃が真つ直ぐリオレウスの額を貫く。

太刀の長い刃の7割程がリオレウスの頭部に突き刺さり、夥しい量の鮮血を撒き散らす。

赤い飛沫を浴びながら、ソフィーは刀から手を離し、その場にへたり込む。

「……………はあつ、はあつ、はあつ……………。やりました、先生……………」

拳を上空に突き上げ、大の字に寝転ぶ。

氣づけば陽は傾き、夕焼けが『シビレ罨』の効果が切れ、立ったまま絶命したりオレウスと寝転ぶソフィーを照らしていた。

ソフィーたちの勝利。そして、試練の成功だ。

## 束の間の休息

「あゝ！もう！なんなの!?話の規模が大きくなりすぎなのよ!!」

「ま、まあまあ、先生。落ち着きましょう」

試練を終え、2日後。いつもの様に食事所で大量のビールと料理を平らげていくミレイナとそれを宥めるソフィー。それとやけに大人しいフレッドがそれぞれ楽な格好で夜を過ごしていた。

古代竜人にリオレウスとディアブロスの狩猟を完了したことを報告した2人。その見返りとしてゾラ・マグダラオスの情報を得たのだが……。

「つたく、冗談じゃないわ。寿命が来るからつてここまでやって来て、今は地中を迷子ですつて?お守りじゃないのよ!」

ジョッキのビールを一気に飲み干し、叩きつけるように荒くテーブルに置く。  
「飲みすぎですよ……。それに少し違う気がします」

古代竜人の話をまとめると、ゾラ・マグダラオスは生命エネルギーの溢れるこの『新大陸』を求め、海を渡っていた。しかし、ゾラ・マグダラオスはこの『新大陸』の中心の地下回廊を彷徨っており、更には寿命が尽きようとしている。寿命が尽きたゾラ・マ

グダラオスは体内に蓄えに蓄えていた生命エネルギーを放出。それが地下回廊から地脈を伝い、『新大陸』を崩壊させるといふ。

「ほら、わたひつて一応『舞姫』つてよふあれてたひやない？ そーゆー古龍とかは割と慣れへゆし、撃退や狩ったことはあゆけるー……」

「飲み過ぎです。呂律回つてませんよ……。けどどうしたんですか？」

ミレイナは椅子に深く持たれ、満天の星空を見上げ、長く息を吐く。

「流石に規模が違いすぎるわ……。大陸一つが吹き飛ぶ、なんてね……」

いつもと違う雰囲気語るミレイナ。いつも笑つて、滅茶苦茶だが、しつかり事を片付ける彼女の姿にソフィーは不安を覚え、何も言えなかつた。

「ま、なるようにしかならないわ。それより飲むわよー！ ほら、ソフィーちゃん！」

「ちよつ、先生！ 私お酒は飲めません！」

「えー？ 飲めないのー？ まあいいわ。はい！ あはははははは！」

ビールの入ったジョッキを無理やりミレイナに持たされるソフィー。ここで拒んで持たなかつたとしてもしつこく言い寄られるのは想像できる。これが正解だっただろう。

「はあ……。お酒なんて飲んだことないよ……」

両手で持ったジョッキのビールの匂いを嗅いでみる。

「先生の匂いに似てる．．．?」

今のミレイナが飲み過ぎなだけだ。

もう一度嗅いでみる。

「やっぱ似てないや．．．美味しいのかな．．．」

ジョッキに口を近づけて一口飲み込んでみる。

「．．．にがあい．．．」

ソフィーの口には合わなかったようだ。

「ほーら、フレッドくん!」

ミレイナが自分の兄の名前が聞こえ、ソフィーがそつちを向くと．．．。

「わーっ!!? 兄さーん!!?」

机に突っ伏しているフレッドに執拗に絡んでいるミレイナがいた。

「ねーえー。もうへばっちゃったのー? ねーねー?」

ミレイナは自分のジョッキをフレッドの頬に押し当てている。どうやらフレッドは

酒で酔い潰れているようだ。

「ちよちよちよちよ!! 先生何してるんですか!」

自分の兄を守るように間に割り込む。目の前から漂う強い酒の匂いにソフィーは顔を顰める。



「何もしてないわよー。ちよつとお酒あげたらこんなになつちやつて。もー、弱すぎよー」

「何言つてる。その坊主に5杯も飲ませやがつて。その前にも相当飲んでやがつたんだ。当分起きねえぞ」

料理長が呆れながら注文された料理を鉄板で焼く。

「もう、最近の若い子は・・・」

ミレイナはつまらなさそうに自分のジョッキを起き、メニューを手取る。

「おつ、料理長ーこれー」

メニューの一品を指差して料理長へ見せる。

「ああ。持つて来い」

料理長がウェイターをしているアイルーに指示するとそのアイルーは幾つも積まれた樽からワイングラスのようなものに注ぎ、慣れた足取りでミレイナの所まで持つてくる。

「ありがとう。はい、ソファイーちゃん」

受け取ったグラスをソファイーの前に置くミレイナ。

「わあ。綺麗・・・」

グラスに注がれたドリンクは明るい黄色。見る人によつては金に光っているように

見えるかもしれない。

「スターブランデーっていう果物の飲み物よ。頑張ったソフィーちゃんへ、私からのご褒美よ」

「えっ！本当ですか!? えへへ。ありがとうございますっ」

ニコニコしながらグラスを持つソフィー。余程ドリンクの見た目に気に入ったのか、飲もうとせずに眺めるだけだ。

すると、後ろから明るい声が聞こえてきた。

「お姉様、お隣よろしいですか?」

「あら、シエリー！珍しいじゃないの!」

ミレイナが振り向くとそこには彼女たちの受付嬢兼同居人のシエリーが受付嬢の制服のまま立っていた。

「今、マイラさんがソフィーのお部屋を用意しますし、クリスタルさんもお手伝いしてますから遊び相手もいなくて。なのでお姉様とご一緒しようかと」

「さっすがシエリー！ほら！座りなさい!」

隣の空いた椅子をバンバン叩きながら隣に座るように言うミレイナの言葉でシエリーは綺麗な動作で腰掛ける。

「マスター、レウススイスキーをーっ」

シエリーが注文をするとマスターはやめろ、と呟きグラスにドリンクを注ぐ。どうやら注文も落ち着き始めたからか、そちらにまで出回り始めたようだ。

「そういえばソフィーちゃんが家の空き部屋で暮らすことになってたわね。忘れちゃってた」

「お姉様が言ったんですよ?」

ソフィーがミレイナのマイハウスで暮らすという話は随分前に出ていたのだが、ゾラ・マグダラオスの捕獲作戦や古代竜人の試練などでバタバタしており、全く進んでいなかった。

狩猟依頼などが一段落ついた今のタイミングがベストだった。

「シエリーも手伝えれば良かったんじゃないの?」

シエリーから見てミレイナの後ろからひよこっ、と現れ、シエリーの隣の椅子に座ったソフィーが素朴な疑問をする。

そのタイミングでシエリーの注文したドリンクが彼女の前に置かれ、グラスを片手に持つ。

「マイラさんはこだわる方なので邪魔しないのが一番です。クリスタルさんはマイラさんのことをよく分かってるので問題ありません」

「ふーん。確かにそうかも」

「ところで、ソフィー。それは飲まないんですか？それに立ったままですよ」

シエリーに指摘され、手に持っていたグラスへ視線を落とすソフィー。

「あ、忘れてた。それにとつても綺麗だから飲むのが勿体ないなって」

「はあ・・・？」

シエリーの反応に首を傾げるソフィー。

「まあ、いいです。そういうえば貴女とこうして食事をするのは初めてですね。どうですか？」

グラスをソフィーの前に少し突き出す。

それを見て彼女はぱあつ、と笑顔を浮かべると、シエリーの隣の椅子に腰掛ける。

「うん！それじゃあ！」

「乾杯」

「カンパニー！」

グラスがぶつかり、気持ちのいいカン、という音が静かに鳴る。

「いいわね、ああいうの。料理長もそう思うでしょ？」

何杯目かも分からないビールを飲み干したミレイナは空になった彼女のジョッキにビールを注ぐ料理長に声をかける。

「嫌いじゃないな。だが、そんな言葉が出てくるあたりお前も歳だな」

「うるさいわね。どうせ私は行き遅れたアラサーよ。それで、どう？料理長」  
並々にビールが注がれたジョッキを料理長に向ける。

「営業時間中だ」

ふいつ、と背を向け、調理に戻って行った。

「何よー。ほら！フレッドくん！」

「も、もう・・・無理だから・・・」

「みんな連れないの・・・」

「またビールを流し込むように飲むミレイナの隣でレウスウイスキーを半分ほど飲んだシエリーがふうつ、と息を吐いていた。」

「あら、珍しく顔が赤いじゃない。自分で言って恥ずかしくなった？」

「お姉様、からかわないでください。さっきのようなことは柄じやありません」

「そう？私は好きよ？」

「・・・お姉様が仰って下さるのならたまにはいいかもしれません」

「それに、ソフィーちゃんと仲良くなれて嬉しいんでしょ？」

「なっ!？」

「ずいつ、と顔を近づけてきたミレイナにシエリーは驚く。」

「べ、べつにそんなのじゃありません！ただの業務です！業務！」

「照れちゃってー。可愛い」

照れを隠そうとグラスに口をつけ、ミレイナと目を合わせないようにするシェリー。そこでふと隣に座っているソフィーが一言も喋っていないことを思い出した。

どうせ彼女のことだ。ニマニマと笑って私を見ているに違いない、と思い、横目で見てみると。

「ちよつ！貴女、馬鹿ですか!？」

そこにはスターブランデーを一气飲みしようと奮闘中のソフィーがいた。

「ん？おお！ソフィーちゃんやるわね！私も負けてられないじゃない！」

ぐっー！とジヨツキをを傾け一気飲みするミレイナ。完全に酔っ払いの行動だ。

「お姉様も変なことやらないでください！ソフィー！それはそうやって飲むものじゃないですよー！」

ソフィーの肩を持ち、必死に止めるシェリーだが、彼女は静止を全く受け入れようとしない。

あれよあれよとドリンクは減っていく、ソフィーは飲み干してしまった。

「……ぶはっ……。ふあっ、ほえ……」

「ソフィー！ソフィー!？」

ソフィーの顔は真っ赤で目の焦点も合っていない。

「大丈夫ですか!? ソフィー!？」

「ふにやあ……。しえ……り……」

「ソフィー!?!?!」

前のめりで机に倒れてしまった。

「ソフィーちゃん、お酒も飲んだことみたいだったしねえ」

「なのにあんな強いお酒を飲ませたんですか!？」

「だってー。一気飲みするなんて思わなかったもの」

スターブランドーはワインの1種でアルコール度数40%を超える。

そんなものを酒になれていない者が飲めばソフィーのようになるのは当然だ。恐らくいつもビールを一気飲みするミレイナの真似をしたようだが、酒の種類が違いすぎる。

「まあまあ、寝かせてたらいいわよ。それより、今日は付き合ってもらおうわよ……と  
思ったけどそうはいかないようね。なんの御用かしら? リーダー?」

振り向かずに調査班リーダーの名を呼ぶ。

「すまないな、団欒中に。総司令からのお呼び出しだ。来て貰えるか?」

ミレイナたちの後ろにはリーダーが立っていた。

「ええ、行きます。一層の会議スペースですよね」

「ああ」

彼は特に何も言わず食事所を去っていく。

「はあ、ごめんねシェリー。ちよつと行つてくるわ」

「いいえ。お気になさらず。私はお姉様がお望みならば何時でも参ります！」

「うん。ありがとう」

ジョッキに残つたビールを飲み干し、ミレイナは立ち上がる。

「料理長ご馳走様！これお代ね。足りなかつたらまた払いに来るわ。シェリーたちの分もあるからまだ飲み食いしていいわよ」

返事も聞かず千鳥足で食事所を後にし、会議スペースまで向かう。

フラフラと歩き、会議スペースに到着すると総司令、それぞれの班のリーダー、ソードマスターたちが神妙な顔をしていた。

「あー、これ。酔っ払いの来る場所じゃないんじゃないんですか？」



頬を掻き、苦笑いを浮かべるミレイナ。

「問題ない。君の意見を聞きたいと思つてな」

総司令が笑みを浮かべる。それにつられるように他のリーダーたちも笑っている。

「まあ、いいですけど……。どれどれ」

ミレイナは大机に広げられた地図や書類に目を通していく。

「なるほど。マグダラオスの進行ルート of 地脈回廊に前回同様の防壁を設置。回廊内の岩を爆薬で破壊し、確実にダメージを与えていく、と。で、討伐してしまつたら大爆発しちゃうからそうなる前に海に追い返そうという事ですか」

「その通りだ。何か質問はあるか？」

「物資は？」

「本土のギルド本部へ依頼すれば問題はないだろう。ここは本部にとつても重要な地点だ。ゾラ・マグダラオスに対しては何かと融通が効く」

「だつたら撃龍船の手配も。それに物資も積めばいい。それに私の名前を出して、新大陸が爆発することを報告すれば二つ返事で送るはずですよ」

「撃龍船？」

聞きなれない単語に調査班リーダーが聞き返す。

「大砂漠のジエン・モーション、厄海のグラン・ミラオスを撃退、討伐に使用した対大型古

龍用の船です。必ず役に立ちます」

「他に付け足すことは？」

「そうですね……。ネルギガンテがまた現れると思います。その時は全ハンター  
ヘゾラ・マグダラオスから離れるよう伝えてください。私が、私たちがアイツを引き受  
けます。では」

それだけ言うとミレイナは会議スペースを後にした。

ゾラ・マグダラオスを巡る戦いも終わりに近づいているのかもしれない。

## 煌めく台地

ゾラ・マグダラオス撃退戦への準備が刻々と進んでいく中、ミレイナたちのマイハウスのポストにある一通の手紙が届いており、それに気づいたマイラがミレイナの元へ持ってきた。

「ご主人様、こんなのが届いてたニヤ」

「ありがとう」

ミレイナは手紙を受け取り、差出人を見る。

「送り主は陸珊瑚の研究室からか。私とソフィーちゃん宛にねえ」

封を開け、内容を読んでいく。

「これはヤバいかも……。ソフィーちゃん！」

「はーいー！」

つい先日から同居することになったソフィーの返事は庭から聞こえてきた。どうやら庭に放して飼っている、各地で捕まえた環境生物と戯れていたようだ。

『陸珊瑚の台地』に行くわよ。研究室から直接手紙が届いたから相当ヤバいかも。これ、読んでおいて」

「は、はいー」

ミレイナはソフィーに手紙を渡すと自室に入り、準備を始めた。

おどおどしながらソフィーは手紙に目を通し始め、ぎよつ、とする。

「これって古龍・・・？」

場所は変わって『陸珊瑚の台地』の上層エリアのベースキャンプ。普段ならば美しい珊瑚と青空を見ることができのだが、この日の空は黒い雲がかかり、異様な雰囲気漂わせていた。

ミレイナはいつも通りの『キリンXシリーズ』と大剣『輝煌剣リオレウス』を、ソフィー

はおろしたての『ガロンシリーズ』と太刀『鉄刀【襖】Ⅱ』を装備していた。

「さて、3期団の人たちの話を聞く限りこの場所だめつきりモンスター姿を見なくなった、て話ね。十中八九古龍が現れた、つて考えてよさそうね」

「はい……。この場所で古龍が現れたなんて記録はないですけど」

「ゾラ・マグダラオスの活動で異常が起きてると思いますニヤ。他の場所でも古龍の目覚めは連鎖していくというのはよくあることニヤので。ワタシたちも何度か巻き込まれましたニヤ」

マイラがソフィーに自分たちが経験してきたことを伝える。

「とにかく何か『痕跡』を探しましょう。近くに何かあるはずよ」

ミレイナの提案に一同は頷く。

フィールドに出てみたが報告にあつた通り、モンスターの姿は全く見当たらず、目に映るのは珊瑚と砂のみだ。普段ならこのエリアにはガジャブーが屯しているのだが、一匹も外に出ていない。

しかし、この状況をプラスと捉えるならモンスターの妨害がなく、未知のモンスターの『痕跡』をじっくり探すことができる。

「手がかり無し、か……。うーん、ある程度目星は付けてきたんだけど。ここじゃないのかしら」

顎に手を当てながら他の候補地を考えるミレイナ。

「それも分からないですニヤ。そもそもどんな奴がいるかすら……ニヤ？」  
「どうかした？」

お手上げ状態だったマイラがふと後ろを振り向く。その視線の先にいたのはしやがみこんで何かを見つめるソフィーとクリスタルだった。

「何か見つけたの？」

ソフィーたちの後ろに立ち、その視線の先を見てみると何かの小さな足跡がそこにあった。

「蹄、でしょうか？」

「この足跡ってアイツじゃないかニヤ？」

ソフィーとクリスタルがミレイナへ振り向きながら聞く。

「ええ、そうね。感が当たったかも。きつとー」

ミレイナがモンスターの名前を言おうとした瞬間、激しい轟音と共に雷が落ちた。しかも彼女たちの真後ろに。

恐る恐る振り向くとそこには馬によく似た体躯だが、その大きさは馬より遥かに大きい。全身は銀に輝いており、真つ白な鬚には青い光を纏っていた。その中でも最も目を引くのは頭部に生えた蒼蒼美しい一本角。

そこにはミレイナの纏う防具の元となっている、幻とまで言われるほど目撃例の少ない古龍キリンが佇んでいた。

「綺麗・・・」

初めて生で見るキリンの神々しさに見とれるソフィー。対してキリンはソフィーを一瞥した後にミレイナを見つめる。

「・・・来る・・・！」

ヒヒイイイイイイイン!!

キリンは後脚だけで立ち上がり、馬の鳴き声に似た雄叫びを上げると同時に自身の周辺に雷が数本落ちる。

それが回戦の合図となり、ミレイナたち4人は一斉に散る。

「いいーソフィーちゃん！角を狙いなさい！後、とにかく動き回って！立ち止まらないことよー！」

「は、はいー！」

全員がそれぞれキリンの正面に入らないように距離を詰めようと走る。

キリンがまず標的にしたのは一番近くにいたミレイナ。彼女へ向かって頭を下げ、角を突き刺すように一直線に突進する。その速度はこれまで戦ってきたモンスターの方が速い。

「余裕！」

突進を走って避け、距離を詰める。キリンが方向転換と共に立ち止まり、振り向く瞬間にミレイナの溜め斬りがキリンの頭を捉える。この程度では全く怯む様子はなく、ミレイナはすれ違うように前方へローリングし、キリンの後方へ離れる。

「クリス！」

「おうニャー！」

ミレイナの呼びかけが来るのが分かっていたかのようにクリスタルが続けざまにキリンの角へ斬撃を浴びせる。

それを鬱陶しく感じたのか、キリンは頭を振り、クリスタルを追い払おうとする。

「ふん、そんなのには当たらないニャ」

ヒヒイイイイン!!

キリンのけたたましい声と同時にクリスタルがいた場所へ雷が数本落ちる。

「あつぷニャ!?!」

声に反応し、咄嗟に移動していたクリスタルは雷に当たることはなかったが、直前までいた地面は真つ黒に焦げ、煙を上げていた。

「クリス！あんまり調子に乗るんじゃないわよ！」

いつの間にか距離を詰めていたミレイナが溜め斬りでキリンの頭を捉え、クリーン



ヒットさせる。

斬りつけると同時に火属性の爆発が起きるが、キリンはビクともしない。

「やあああああああ!!」

続け様にソフィーの太刀の連撃。これにも反応を示さないキリンはソフィーを追い払うかのように自身の周辺へ雷をいくつか落とす。

「わっ……!危ない……!」

これまで培ってきた経験と感で間一髪落雷を回避したソフィー。

「これならどう!」

キリンの目がソフィーに向いている間にミレイナは限界まで力を溜めた真・溜め斬りを繰り出す。

これまでにない火属性の激しい爆発が巻き起こり、爆風でミレイナの髪がなびく。

ヒイン!!?

キリンは苦しむような鳴き声を上げ、その場で怯む。しかし、それがキリンの堪忍袋の緒を切ってしまった。荒い鼻息を吐きながら銀の体毛からバチバチと白い火花を発し始めた。

「さ、こ、こからもつと楽しくなるわよ」

「笑ってる場合じゃないですよ!って、わあっ?!?!」

全く別の位置にいる4人に対し、雷を放つキリン。何とか雷を避け、キリンへ近づこうとするが、先程に比べて走る速度と独特なステップの速度が目に見えて上がっており、近づぐことを許してくれない。

「速いわね……。でもっ！」

キリンの突撃を紙一重で避けたミレイナは上手くキリンの背後をとる。

「ふん!!!」

キリンが振り向くのに合わせた渾身の抜刀溜め斬り。だが、キリンは怯んだ様子を見せず、目の前のミレイナを角で薙ぎ払う。

「うぐっ!!」

キリンの角がミレイナの脇腹を捉え、その方向へ彼女の体は吹き飛び、地面を転がる。

「ご主人!?!」

彼女の比較的近くにいたクリスタルがミレイナを案じ、駆け寄る。

「マイラさん!」

「分かりましたニヤー!」

吹き飛ばされたミレイナをカバーするためにソフィーとマイラがキリンの注意を引くための行動を起こす。

マイラは『はげましの楽器』で補助。ソフィーは拾っていた『石ころ』をスリンガー

に装填し、キリンの頭に当てることで視線を誘導する。

「こつちを向いた!」

頭に当たった『石ころ』が痼に障ったのか、キリンはソフィーをじろつ、と睨む。

「どう来る・・・」

身構えるソフィーとは反対にキリン落ち着いた様子で静かに横方向へ歩きながら頭を下げる。

「な、何もしない・・・?」

しかし、この状況でそれはありえない、と思つたソフィーは今の状況を確認する。

(角が光ってる。・・・他には聞いたことも無い音。例えるとするなら空気が鳴るような微かに高い音・・・。肌が電気を感じて少しむず痒いかも・・・。それに目の前がやけに眩しく、目を瞑つてしまいうそう・・・。あれ?キリンが頭を振りそう・・・)

ソフィーが出した結論は。

「・・・!マイラさん!!」

「ニヤツ!」

隣で楽器を奏でていたマイラを抱き込むようにその場から跳ぶソフィー。

その瞬間何か鋭いものが2人の居た場所の空気を裂き、暴風が起きてから雷の音が3度、遅れて聞こえてきた。

「どうやらキリンは雷を操り、ソフィー目掛け、水平に放ったようだ。」

「あ、危なかった……」

「た、助かりましたニヤ、ソフィーさん……」

「起き上がり、キリンのいた方を確認するが奴の姿はない。どうやら移動したようだ。」

「良かったわ、何事もなくて。あんな攻撃方法初めて見た」

『回復薬』の入った瓶を飲みながらミレイナがソフィーの元へ歩いてくる。その後ろには同じように水筒を飲むクリスタルが彼女の後を着いてきていた。

「先生も知らないなんてことがあるんですか？」

「そりゃ、この『新大陸』特有の個体がいるんだもの。『現大陸』にいるモンスターでも動きが違うなんてあってもおかしくないでしょ？」

「確かに……」

「さあ、追うわよ。アイツが居たんじゃここ一帯が雷で黒焦げになっちゃうわ」

今までミレイナたちがいたエリアから少し下層の『回復ミツムシ』たちが飛び回る見晴らしの良いエリアに移動した彼女たち。そのエリアの中央にキリンは佇んでいた。

高所から飛び降り、ミレイナはキリンとの距離を一気に詰めようとするが、すぐさま彼女に気づいたキリンが凄まじいスピードで走ってきた。

「それを……」

ミレイナもスピードを落とすことなく走り、相対的に距離が縮まってくる。

「うらあつ!!」

目の前の段差を使い、宙に跳ぶミレイナ。飛ぶと同時に大剣を抜き、刃がキリンの角へぶつかる。

「とつたー!」

僅かに怯んだキリンの隙をミレイナが見逃すはずもなく、キリンの背に乗る。

背に乗った敵を振り落とそうとキリンは暴れるが、ミレイナは衝撃をいなし、剥ぎ取り用のナイフで何度もキリンを突き刺し、体力を奪っていく。

自らが傷を負うのも厭わないようで、キリンは壁に自分の体ごとぶつけ、ミレイナを

振り落とそうとする。

「あつぶないわね！」

キリンの背から頭の方へ飛び移り、衝突を避けるミレイナ。そしてキリンは今ぶつかった壁からの衝撃が強かったのか、大きくのけぞり、その場に足を止める。

「このっ!!」

ミレイナは『輝煌剣リオレウス』を抜刀。力を溜め始める。そのタイミングでようやく追いついた3人もそれぞれキリンへダメージを与えていく。

「つせえいつ!!」

勢いよく振り下ろした大剣がキリンの額を引き裂く。そのまま頭を砕こうと力を込め続けるがキリンが動き出すと判断したミレイナは武器を背負投のような動作で強引に引き抜き、キリンから飛び降りる。その軌跡を描くようにキリンの頭からは鮮血が散り、キリンがその場へ転倒する。

「みんなお願い!!」

キリンから飛び降りるも、いくらかの距離が離れたミレイナはソフィーたちへ追撃の指示を出す。

ソフィーたち3人はそれぞれキリンの頭を集中して攻撃する。遅れてミレイナもキリンの攻撃に加わるが、程なくしてキリンは起き上がってしまう。

キリンは全員を1度睨むとその場で力を溜めるような素振りを見せると同時に雷がキリンへと集まっていく。

「まずい！離れて！」

その瞬間、キリンに大きな雷が降り注ぐ。

ミレイナの声が届いたソフィーたち3人は咄嗟にキリンから離れたことでなんとか直撃を免れたが、体に若干の痺れを感じる。それほど電気量だ。

そして、目の前に落ちた雷の中から現れたのは全身を青白く輝かせながら、大量の雷を帯電させ、鬣を逆立たせたキリンだ。その神々しく、恐ろしくも感じる姿にソフィーは言葉無くしていた。

「これが古龍の力……?」

「そう、これが古龍。私たちの常識なんて通用しな、つてきやあ!」

ソフィーの漏れた呟きにやや離れた位置からミレイナが答えた瞬間、キリンはミレイナに向かって突進する。

間一髪でミレイナはそれを避け、距離を取る。

「行きます！」

丁度近くで立ち止まったキリンへソフィーが仕掛ける。

走っている勢いを乗せた抜刀縦斬りはキリンの角へ命中し、ソフィーは次の一撃を打

ち込もうともう一度太刀を振るう。だが。

ガン!

「か、硬い……!」

キリンが少し前進したせいで頭から首の根元に狙いがズレたソフィーの攻撃は硬い金属音を鳴らし、弾かれてしまった。

「なんで? さつきは確かに斬れたのに……!」

衝撃を感じた方向へキリンが頭を向けると、ソフィーと視線が合う。その角は輝きを強くしていた。

「まずい!」

慌てて武器をしまい、後ろに向かって走るソフィー。そしてキリンが短く鳴いた声を聞いて思いつきり跳び、緊急回避を行った。

その瞬間凄まじい轟音と共に太い雷の柱がソフィーの真後ろに落ちた。

「ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ! ハアツ!」

起き上がれもせず、倒れたまま荒く息を吐き続けながらキリンへ体を向ける。

(あ、危なかった……。死んでた……。一瞬気づくのが遅れてたら黒焦げとかじゃ済んでない……。一瞬で消し飛んでた……。これが古龍……)



雷が落ちた場所は地面を深くめぐり、その地点は真つ黒に焦げ、黒煙が上がっていた。もし、その場に自分の体があったならどうなっていたかは容易に想像がつく。

紙一重で回避した死を目の前に恐怖し、動けず、体を震わせていた。

「はああああああ!!」

倒れているソフィーの前にミレイナが立ち塞がり、キリンの頭へ一撃を与える。

それでキリンの敵視はミレイナに向き、彼女は誘導を開始する。

「マイラとクリスはソフィーちゃんを後ろへ！私が！」

ミレイナの指示が飛ぶとすぐさまオトモの2人が動けないでいたソフィーの元へ駆け寄る。

「ソフィー！立てるニヤ!?!」

「・・・は、はい・・・。あ、あれ・・・、足に力が入らない・・・」

「腰が抜けてるみたいニヤ。クリス！」

「分かったニヤ」

マイラとクリスタルが2人でソフィーの両肩を持ち上げ、引きずりながら歩く。

「ごめんなさい・・・。また・・・。また、足を・・・。足を引っ張って・・・。迷惑かけて・・・」

「気にしないでくださいニヤ。ソフィーさんは古龍と真正面から戦うのは初めてだから

仕方ないのですニヤ」

「うくつ……。ごめん、なさい……。ごめんなさい……」

「泣くんじやないニヤ。立ち向かっていけるだけ上出来ニヤ。今はボクとマイラが近くにいるニヤ。あそこの言わ陰に隠れて落ち着くのが最初ニヤ」

(よし、だいぶ皆とは引き離すことができた)

キリンと対面に向き合いながらチラツ、と見てミレイナは3人が十分離れたことを確認する。

大剣を納刀し、キリンの出方をうかがいながらジリジリと距離を縮めていく。

その場でキリンは前脚で地面を何度か蹴る。

「来る……。って、あれ……」

キリンは颯爽と駆け出し、珊瑚の丘を駆け上って行った。

ミレイナはそれを追おうとせず、ただ見送る。

「・・・良かった・・・。・・・ソフィーちゃん！マイラー・クリス！どこ!?」  
付近を走り回りながら名前を呼びながら3人を探す。

「こつちですニャー!ご主人様!」

ひよこつ、と岩陰から顔を出したマイラーがミレイナを呼ぶ。

「マイラー!ソフィーちゃんは!?!」

「体は大丈夫ニャのですが・・・」

言葉を濁すマイラー。その言葉に不安を覚えながらソフィーの元に向かう。

「ソフィーちゃん・・・」

「せ、んせい・・・」

ミレイナが見たソフィーは膝を抱え込んで座り、体を震わせていた。そして目は挙動不審に動いて焦点も合っていないように見える。

「・・・怖かったわね」

「同情は、やめてください・・・」

「同情じゃないわ」

「・・・」

「相手は古龍だもの。ましてやソフィーちゃんは初めて真正面から対峙した。仕方の無

「い」とよ」

「・・・でも・・・、もしかしたら私、死—」

「もう・・・。はい、これ」

「え？」

ミレイナがポーチから取り出したのは焼いた肉だ。ソフィーと顔の高さを合わせるためにしゃがみ、目の前に差し出す。

「ツマミのつもりで持ってきてただけど、ソフィーちゃんにあげるわ」

「・・・食欲なんか、沸かないです・・・」

「いいから食べなさい」

「もがっ」

無理やり口へ押し込むミレイナ。

「嘔んで。・・・呑んで。どう?」

「・・・んっ・・・。美味しい、です」

「他は?」

「・・・温かいです・・・」

「ソフィーちゃんはそれを感じることは好き?」

「嫌いじゃないです・・・」

「もう、不貞腐れちゃって。でもそれはね、生きてる証なの。ソフィーちゃんが生きてるって証拠なのよ」

ソフィーの頭を撫でながらミレイナは優しく語りかける。

「……つうう……」

ソフィーは膝に顔を埋め、声を殺して泣き始めてしまった。

「あらら。悪いけどみんなはキャンプでシエリーと待機。その間に私がケリをつけてくるわ」

返事を待たずにミレイナは『導虫』に従い、キリンを追う。

「この感じだと頂上かしら……」

スリンガーから射出できるアンカーをいたる所に止まっている『楔虫』へ絡めながら、台地の高低差をもとせずに登っていく。

「よっ、と……」

珊瑚の丘の頂上。

そこはまるで決闘場のように逃げ場もなく、段差もない平地だ。キリンは体の輝きを増して、ミレイナがやってくるのが分かっていたかのように待ち構えていた。

「かかって来なさい」

キリンは鳴き声をあげ、前足を振り上げる。落雷と同時に両者が正面から対峙した。

「くっそ……。やっぱり古龍って奴らは桁違いね……」

幾度となく降り注ぐ落雷を避け、何度も頭にその瞬間の最高の攻撃を当て、ダウンさせてもキリンは真向からミレイナへ襲いかかってくる。

(アイテムも残り少ない、これじゃあ……。……。ジリ貧ね)

キリンの突進を真横にローリングし避け、起き上がりと同時に『怪力の種』を齧る。

「なっ!!?」

キリンが走り去った方向へ振り返った瞬間に奴はミレイナの目の前にまで戻ってきていた。

「はっ、速っ・・・!?!」

キリンは頭を下げ、勢いよく突き上げる。

「くう・・・!!」

反射的に大剣を盾にし、角を受け止めるが衝撃でミレイナの体が後退する。

「コノヤロウ!」

下から上に『輝煌剣リオレウス』をかち上げるように振り上げる。それはキリンの下顎を斬りつけ、キリンが怯み動きを止めた。

「うおおおおおおおおお!!」

前ローリングでキリンの頭の目の前に位置をとり、洗練された動作で真・溜め斬りまですで角へ叩き込む。

「まだダメなの!?!」

まだキリンを打ち倒すことはできず、声を荒らげるミレイナ。その動揺が隙を生み出し、落雷がミレイナへ直撃する。

「ガハッ・・・!?!」

真上からの衝撃でミレイナの体は地面へ叩きつけられてしまう。

キリンはそれ以上の追撃をしようとせず、倒れたミレイナをただ見ているだけだ。

倒れたまま動かないミレイナの防具から煙が上がり、焦げた匂いがする。

その場は完全に静寂が支配していた。

.....

キリンは動かなくなった標的を後目に立ち去ろうと踵を返し、歩みだそうとするが、歩目を踏み出す瞬間に動きを止め、ミレイナの方へ目を向けた。

ピクツ.....

倒れていたミレイナの指が動く。

「.....うぐつ.....」

(視界が少しぼやけてる.....。立てるなら関係ないわ.....)

両腕に力を込め、上半身を起き上がらせる。

「ゲホツ.....！ゲホツ.....！.....あー.....、効いたわ.....。アナタの仲間の防具じゃなかったら今頃死んでたわよ.....」

フラフラと立ち上がるミレイナ。

キリンは立ち上がった敵に対して威嚇するように鳴き声をあげる。

「さて、そろそろ終わりにしましょう」

足元に落ちていた自分の武器を拾い上げ、構える。

キリンはミレイナの目の前まで走り寄り、角を突き上げるが、それを見切ったミレイナは横へ転がり、回避と同時にその勢いを乗せ、真横へ大剣を薙ぎ払う。



その刃はキリンの角を的確に捉え、ピシッ、とキリンの角がひび割れるような音が聞こえた。

「うおおおおおおおおおおお!!!」

唼りと共にギロチンのように振り下ろされる溜め斬りが角の根元へ勢いよく食い込み、パキン、という気持ちの良い音を鳴らし叩き折った。折れた角は宙を舞う。

大剣の刃はそのままキリンの鼻梁を捉え、それをキリンは受け止めた。

「あああああああああああ!!!」

さらに声を荒らげ、力を込める。

（このまま、頭を潰す……!）

メキメキ、と軋む音が微かに聞こえ始め、キリンが抵抗する力が弱まってきているのが分かる。

「はあああああああああああ!!!」

ついにキリンは抑えきれなくなり、頭から地面へ叩きつけられ、さらに潰そうとする。血飛沫が上がり、それを顔面に浴びる。

悲鳴をあげるキリン。

尚も力を込め続けるミレイナ。

そして……。

この戦いで起きたものとは比にならないほど巨大な雷がキリンを中心に落ちた。

数分前。

ベースキャンプに何とか戻ったソフィーたち3人はシエリーと合流。ソフィーは落ち着きを取り戻した後、ミレイナの言葉を守らず、『導虫』を追い、キリンの元へ向かっていた。

そこには『シーカーシリーズ』という探索用の防具を身につけたシエリーの姿もあった。

「シエリーまで来る必要はなかったんじゃないの?」

「また貴女がうじうじしてたらー発平手打ちで立ち直らせるためです」

「あ、あはは・・・」

「それに、嫌な感じがするんです」

「嫌な予感？」

「はい・・・。言葉には表せませんがね・・・」

シエリーの雰囲気によソフィーは黙り込んでしまい、無言のまま『導虫』を追って行く。

「よいしょ、つと」

ソフィーが『楔虫』からアンカーを外し、先に着地。すぐにシエリーも近くに近くに  
着地するが、バランスを崩し、転びそうになる。

「おっと、大丈夫？」

「あ、ありがとうございます」

「ニヤハハ！シエリーはもつと運動した方がいいニヤ」

「ば、バカにして・・・！」

クリスタルがケラケラ笑うその後ろから影が急に接近し、それはクリスタルの真後ろ  
に荒々しく着地した。

「な、なに・・・。あれ・・・」

「嘘・・・」

それは漆黒の毛の巨大な猿のようなモンスター。

異常なまでに発達した両腕と頭から生える対の剛角が目を引く。

それはじつ、とソフィーたちを睨み、今にも襲いかかつてきそうだ。

「シエリー！下がって！」

ソフィーはシエリーの前に立ち、背中の『鉄刀【禊】Ⅱ』に手を伸ばすがその腕をシエリーが掴み、止める。

「な、何してるの!?危ないから！」

「逃げましょう……。アイツは無理です……」

「何言ってるの？古龍じゃないと思うし、マイラさんとクリスさんもいれば……」

「ソフィーさん、ワタシもシエリーさんに従うニャ……」

「そうだニャ。警戒しているけど敵視はされてないニャ。今のうちだニャ」

「な、なんでそんな逃げ腰なんですか……」

いつもと違う皆の様子に戸惑うソフィー。

「いいから逃げますよ！例えここにお姉様がいても討伐できるかどうか……」

「……また……い……、……し……て……」

「ソフィー……？」

ギリツ、とソフィーが歯ぎしりをした音が微かに聞こえた。

「じゃあ、シエリーたちは逃げてよ。私が足止めする」

シエリーの腕を振り払い、ソフィーは前に歩き出す。

「ば、バカ……！あれはラー」

だが、その瞬間、眩い光が走り抜け、地面を揺らし、遅れて雷の音が上空から鳴り響いた。

「今度はなんですか!?!」

その音を聞いたモンスターは空を見上げ、何かを追うように視線を動かす。

—————

耳をつんざくような雄叫びをあげ、遙か彼方へ跳んで行った。

!!!

「なんだったの……」

ソフィーはモンスターが跳んで行った方向を呆然としながら見つめる。

「ソフィー!!」

「あ、シエー」

ソフィーが振り向いた瞬間、彼女の頬に鋭い痛みが走る。

(シエリーに、殴られた……?)

「貴女、いくらなんでも無謀です！確かにあれは古龍じゃありません！ですが、あれはその凶暴さゆえに古龍級生物に認定されているラージャンですよ！さつき死に目にあつてべそかいていた貴女じゃ即死です！」

「……………」

「ソフィー!!」

「……………ごめん」

「…………いきなりすみませんでした。私もパニックだったので…………。とにかくお姉様の元へ。恐らく今の音はお姉様とキリンです。急いでいきましょう」

「…………うん」

シエリーを先頭にマイラとクリスタルが着いていく。少し遅れてソフィーがゆっくり歩き出す。

「このままじゃダメなのに…………。私だって…………」

「お姉様!」

「先生！」

「ご主人様！」

「ご主人！」

頂上に到着した4人が目にしたのは煙が立ち込める平地に武器も足元に落とす、立ち尽くすミレイナの姿だけだった。

ミレイナは首だけ動かして4人の方を見る。

「……全く……。待ってなさい、って言ったのに……」

そして彼女の体から力が抜け、その場に倒れ込む。

意識があります！全身、火傷が酷いです！急いでキャンプに！

ご主人様！しっかりとってくださいニヤ！

先生！先生！！

ご主人！気張るニヤ！

あまり動かさしないでください！マイラさんは――

ミレイナの意識は途切れた。